第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 津島岡大遺跡第30次調査 (インキュベーション施設新営工事、津島BC19・20区)

(1) 調査の成果

本調査区は、津島南地区の西側に位置する。今回の調査により、縄文時代後期から近世・近代にいたるまでの遺構が確認され、津島地区の西側における遺跡の内容を知る手がかりが得られた。

特筆すべき成果に、古代の条里制の地割に合致した、区画を明示する遺構を確認したことがあげられる。本調査地点は、岡山平野における条里地割のなかでは、里境および坪境にあたる地点である。発掘調査によって確認した条里遺構は、岡山平野における条里の復原の際に基準の一つとなるものである。また、道路状遺構としての区画が確認されたことの意義も大きい。さらに今回の調査地点では三叉路状の区画を確認したが、三叉路の連接点より南に向かう区画が認められなかったことは、坪境の区画を何らかの施設によって必ずしも明示する必要がなかった可能性も示しており、区画の表示の仕方とあわせ、今後検討すべき課題となろう。本調査区で確認した東西区画は、古代には道路状遺構であったが、近世・近代には溝となる。区画表示の在り方は変化するものの、古代の段階に整えられた地割は、その後もほぼそのままの位置で踏襲され続ける。本調査区での確認例は、古代の段階の区画が近世・近代までたどれることを示すものであり、岡山平野における条里制の施行が平安時代に遡ることを示す実例の一つとなった。

調査期間 2007 (平成20) 年8月1日~12月17日

調查担当 野崎貴博(主任)・池田 晋

調査面積 1,035.4 m²

遺構・遺物

【遺構】 縄文時代後期:土坑・ピット・焼土集中、弥生~古墳時代後期:溝

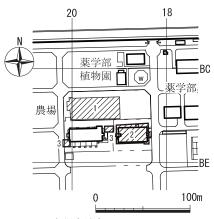
古代:道路状遺構(条里関連)、中世:耕作痕、近世・近代:溝・水門・土坑

【遺物】 縄文時代:縄文土器・石器、弥生:突帯文土器・石器、古墳:須恵器

(2) 調査地点の位置

本調査地点は津島南地区西半、津島地区に設定した構内座標では BC19・20区に位置する(図1)。津島地区における発掘調査ではもっ とも西側に位置する調査区の一つとなり、津島岡大遺跡の西側の状況 や、遺跡のひろがりを面的に確認するうえで重要な位置にある。

本調査地点周辺では、南側に位置する遺伝子実験施設・動物実験棟の建設に先立って発掘調査を実施している(遺伝子実験施設:津島岡大遺跡第8次調査、動物実験棟:同第16次調査)。また、新営予定地の東約200mの地点では、事務局本部棟、創立五十周年記念館の建設に先立つ発掘調査を実施している(事務局本部棟:同第26次調査、創



- 1. 木調杏州占
- 2: 第8次調查(遺伝子実験施設)
- 3: 第16次調査(動物実験棟)

図1 調査地点 (縮尺 1 /4.000)

立五十周年記念館:同第27次調査)。事務局本部棟の調査では近世・近代の東西方向の条里の区画溝が確認されている。本調査区はその西側延長線上にあたるため、条里の区画が確認されることを予測して調査を進めた。

(3) 調査に至る経緯と経過

a. 調査に至る経緯

2007年、岡山大学津島地区にインキュベーション施設の新設が計画され、施設の新営予定地として津島南地区西半に位置する薬学部棟西側の区画が割り当てられた。予定地周辺ではこれまでにも発掘調査を実施しており、その成果から、①縄文時代後期には微高地が広がり、その間に南北方向の低地が通る地形が展開すること、②遺構・遺物の密度は高くないものの、縄文時代後期から近世にいたるまでの各時期にわたる遺構・遺物が分布すること、が予測された。そこで施設の建設に先立ち、発掘調査を実施することとした。なお、当地点における包含層の厚みおよび遺構・遺物の有無については、これまでの周辺の発掘調査により概要が推察されたため、試掘・確認調査は実施しなかった。

b. 調査の経過

発掘調査に先立ち、7月23~30日の期間で近・現代の造成土と近代の耕作土を除去した。その際、旧陸軍歩兵 第十聯隊兵舎建物の基礎を確認した。

発掘調査は8月1日より開始した。近代層下では水門を伴う条里の区画溝と土坑群、耕作地内に掘削された小溝群を検出した。以降、近世、中世から古代へと遡りながら耕作地の調査を進めた。この間、近世の耕作面においては土坑群や耕作痕、中世の耕作面においては鋤溝と考えられる耕作痕を確認した。中世層の調査を終了した10月中旬になり、調査区西半において、ほぼ正方位に合致する南北方向、東西方向の溝を検出した。これらは2条の溝が対になるかたちで検出されたため、道路状遺構である可能性を念頭に調査を進めた。その結果、2条の東西溝群のうち、北側の溝が直角に折れて南北方向の溝に連続し、「L字」、「逆L字」の鉤形の溝となることが明らかとなった。これに対し、南側の東西溝については、分流や屈曲がなく、東西区画から南に向かう道路や溝は派生しなかった。最終的に、対になる溝に挟まれた高まりで構成される道路状遺構と東西・南北の道路が連接した三叉路部分を確認することとなった。なお、11月19~29日の期間で、古代の遺構の調査成果を公開した。

調査区北辺では、古代の道路状遺構と同じ検出面で東西方向に掘削された溝群を検出した。これらの溝群は出土した土器や土層から、弥生~古墳時代後期の溝群であると考えられる。

その後、縄文時代後期の基盤層である12層での調査をすべて終了した段階で本調査を終了した。なお、調査終 了後、2007年12月18日に愛媛大学田崎博之氏、宮崎大学宇田津徹朗氏による土壌サンプル採取を実施した。

(4) 調査の概要

a. 層序と地形

層序 (図2)

本調査区で確認された土層は大きく12層に大別される。以下に各層の概要を記載する。

1層: 1907 (明治40) 年に旧日本陸軍が第十七師団駐屯地を造成した際の造成土を主体とし、以降、現在に至るまでの造成土である。明治期の造成土は明黄橙褐色花崗岩バイラン土の真砂土を主体とする。現地表面の標高は約3.8mである。

2層: 灰色砂質土で、1907年までの近代耕作土である。径 $1 \sim 5 \, \text{mm}$ 程度の礫を多く含む。層下半では管状に鉄分の凝集がみとめられる。上面の標高は約2.9~3.0mである。

3層:明橙褐色砂質土である。上面に鉄分の沈着がみとめられる。近世の土層である。上面の標高は約2.75~2.9 mである。

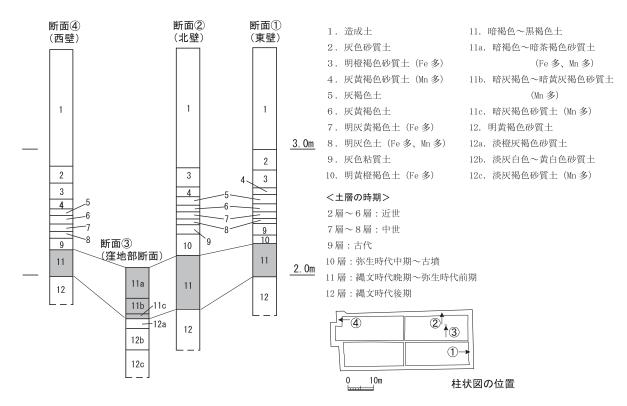


図2 土層柱状図と柱状図の位置(縮尺1/30)

4層: 灰黄褐色砂質土である。マンガンの集積が顕著にみとめられる。近世層と考えられる。上面の標高は約2.6~2.7mである。

5層:灰褐色土である。近世層と考えられる。上面の標高は約2.55~2.65mである。

6層:灰黄褐色土である。近世層と考えられる。上面の標高は約2.5~2.55mである。

7層:明灰黄褐色土である。中世層と考えられる。上面の標高は約2.4~2.5mである。

8層:明灰色粘土である。鋤溝とみられる耕作痕多数を確認した。上面で亀山焼の破片が出土しており、中世の 土層とみられる。鉄分の沈着、マンガンの集積が顕著にみとめられる。上面の標高は約2.35~2.45mである。

9層:灰色粘質土である。古代の堆積層と考えられる。上面の標高は約2.3~2.4mである。

10層:明黄橙褐色土である。調査区東半の窪地部に堆積した土層である。弥生時代の堆積層と考えられる。上面で弥生時代から古墳時代後期の溝を検出した。上面の標高は約2.3mである。

11層:暗褐色〜黒褐色土である。マンガンの集積が顕著にみとめられる。津島地区では「黒色土」と呼称している鍵層で、上面が弥生時代前期の土層である。窪地部では11層が厚く堆積しており、細分が可能であった。上面の標高は約2.1〜2.25mである。

11a層は暗褐色~暗茶褐色砂質土である。鉄分の沈着、マンガンの集積が著しい。突帯文土器を多く含む層である。窪地部最深部における上面の標高は約2.1mである。11b層は暗灰褐色~暗黄灰褐色砂質土である。鉄分は少ないが、マンガンの集積が著しい。明黄褐色砂質土ブロックを含む漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.85mである。11c層は暗灰褐色砂質土である。マンガンの集積が著しい。上層より色調が淡くなる漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.75mである。

12層:明黄褐色砂質土である。縄文時代後期の基盤層である。上面で縄文時代後期以降の遺構を検出している。 上面の標高は約1.7~2.0mである。 12a層は淡橙灰褐色砂質土である。暗褐色土ブロックを含む漸移的な層である。窪地部最深部における上面の標高は約1.7mである。12b層は淡灰白色~黄白色砂質土である。マンガンの集積がみられる。窪地部最深部における上面の標高は約1.6mである。12c層は淡灰褐色砂質土である。マンガンの集積が顕著にみられる。窪地部最深部における上面の標高は約1.4mである。

地形

縄文時代後期には調査区東半において幅約16mの浅い窪地がほぼ南北方向にのびる。窪地の東西に広がる微高地との比高は約0.5mである。法面は西斜面の傾斜が強く、東斜面は緩やかに下がる傾斜となっている。この窪地は弥生時代前期までの間に埋没が進行するが、弥生時代前期段階にもわずかな窪みがのこっている(11層上面段階)。古墳時代後期以降になると、各層の上面の標高は0.1m前後におさまり、ほぼ平坦な地形となっている。

b. 遺構と遺物

縄文時代、弥生~古墳時代後期、古代、中世、近世の遺構・遺物を検出した。

縄文時代(図3)

本時代の遺構と考えられるものは、12層検出の土坑9基、ピット12基のほか、焼土集中がある。遺構の分布密度は低く、散在している状態である。また、調査区の東半でほぼ南北方向にのびる窪地状の地形を確認した。

検出した土坑には、長楕円形を呈する長軸長約1.1~2mの大型のもの、平面円形を呈し、径約0.5~0.75mのものがある。これらの土坑は深さ約0.1~0.3m前後の浅いものである。埋土には褐色系のものと、明黄褐色系のものがあるが、窪地部を境に、西に褐色系埋土の土坑が、東に明黄褐色系埋土の土坑が展開している。褐色系埋土の土坑には上層から掘り込まれたものが含まれる可能性もあり、これについては今後の整理作業において検討を加える予定である。ピットは調査区北半中央部で、窪地部への落ち際付近に集中する傾向を示す。これ以外の地点のピットは単独で検出され、有機的な関係性はとらえがたい。焼土集中は窪地部東斜面で検出された。このうち、焼土と大型の炭化材を多量に含む遺構は、検出面よりも下位の断ち割り内で多量の炭化物や焼土を確認した。平面的には明瞭に検出することができなかったが、浅い掘りこみをともなうものであった可能性がある。この東には焼土・炭が集中して散布している状況が確認できた。

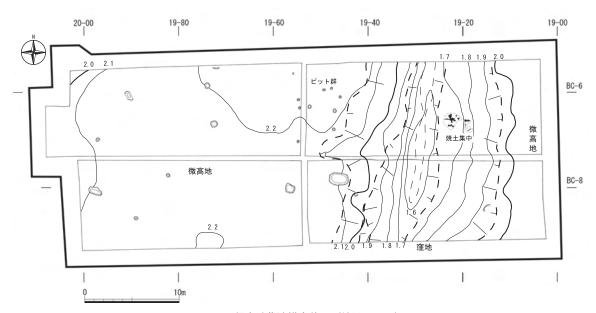


図3 縄文時代遺構全体図 (縮尺 1/400)

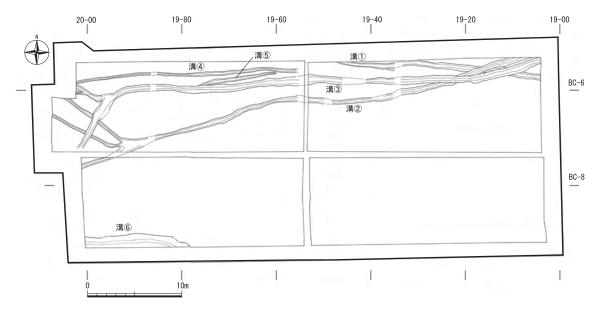


図4 弥生時代~古墳時代後期遺構全体図 (縮尺1/400)

弥生時代~古墳時代後期(図4)

本時期の遺構として、調査区の北辺を東北東 - 西南西に走向する溝群(溝①~⑤)および調査区南東で東西方向の溝 1 条 (溝⑥)を検出した。これらの遺構は調査区西半では11層上面で、調査区東半では10層上面で検出した。これらのうち、北辺の溝群のすべての溝を切る溝③からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、調査区北辺の溝群の下限を示す。そのほかの溝については、時期を示す遺物が出土していないため、確実な時期を示せないが、いずれの溝も上面が弥生時代前期に該当すると考えられる11層(「黒色土」)を掘削しており、弥生時代前期を上限とするものである。

溝の勾配はいずれも緩いものであり、溝底面の起伏を考え合わせれば、大きな勾配を有するものは無い。わずかな底面高の差に注目するならば、溝③は東から西にわずかな勾配をもって下がり、溝①、②、⑥では西から東に緩い勾配をもって下がっている。調査区東半は縄文時代後期以来の窪地があり、弥生時代前期段階(11層上面)にもたわみ状の地形はのこっている。その後、次第に埋没していったとしても、わずかなたわみがのこっていたことも考えられるので、西から東に下がる勾配を有する溝は、この窪地の影響を受けたものといえるかもしれない。一方、古墳時代後期の溝である溝③は東から西に下がる勾配を有する溝である。この傾斜方向の違いが溝の時期差を示している可能性もある。今後の整理作業の中で検討を加えていきたい。

古代(図5)

古代の遺構としては、並行する2条の溝と、溝に挟まれた高まり部分で構成される道路状遺構を確認した。この高まり部分が通路で、両脇の溝は側溝と考えられる。道路は東西に直線的に延びるものと、調査区西半部における南北方向の道路が連接し、三叉路を形成している(以下、記載の便宜上「南北道路」、「東西道路(東)」、「東西道路(西)」と呼称する)。

道路状遺構の規模は南北道路と東西道路では大きく異なる。両側縁の溝自体が削平を受けていることや、歪みをもつものであり、どの部分で計測するかで規模は異なるが、溝の芯々間で計測すると、南北道路は約4~4.5m、三叉路連接点より西側の東西道路(西)は約2.5~3 m、東側の東西道路(東)は約1.5~2 mとなる。

また、東西道路(東)と南北道路はほぼ直線的に走向しているが、東西道路(西)は東西道路(東)よりも南側に位置しており、連接点を境とする東西道路の西と東ではズレが生じる結果となっている。

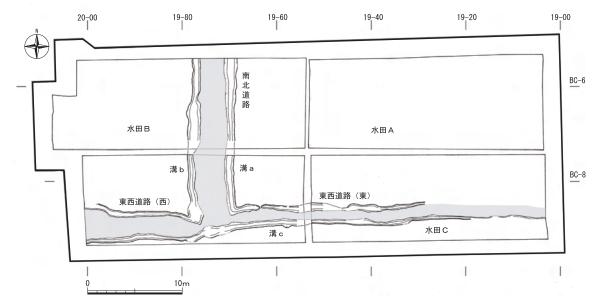


図5 古代遺構全体図(縮尺1/400)

溝の底面の標高をみると、溝 $a \cdot b$ はともに南北方向では北から南へ傾斜するが、東西方向ではほぼ水平である。溝 c は東から西へ下がる傾斜をもっている。これらの溝の主たる機能が周囲からの水の浸透を防ぎ、路面を乾燥化させることにあったとしても、排水機能をになう場面が生じることも予想される。しかし、暗渠や通路を横断する水路は確認されず、どのような方法で排水を行ったかは明らかにしえない。なお、出土遺物は少ないものの、溝 a から10世紀頃の須恵器杯底部が出土している。

道路状遺構によって区画された水田面の標高は下位の地形の影響を受けている。水田Aでは、調査区東半中央部が最も低く、調査区西半北側の南北道路状遺構沿いが最も高い。南北道路状遺構の西側の水田Bについても、北東部分が最も高く、放射状に緩く下がっている。水田Cは確認した範囲が狭く、地形の細部は詳らかではないが、やはり下層の窪地部の影響を受けており、19-20~19-40ライン間はやや低くなっている。

今回検出した道路状遺構は岡山平野における条里制の推定地割の位置に合致しており、岡山平野における条里制の施行が古代まで遡ることを示すものである。その場合、南北区画は坪境に、東西区画は里境となる。条里制では坪よりも里の方が上位の単位であり、里境区画の方が大規模であると想像するところであるが、本調査区でのあり方はそれとは異なる。なお、本調査区で確認した東西方向道路状遺構よりも3町北には幅約10~12mの東西方向の大規模な坪境溝が掘削されている。区画の明示という意味もあるが、それぞれの区画にもっとも合理的な機能をもたせることを意図した結果、里境よりも坪境の区画の方が大規模なものとなったのかもしれない。

中世・近世

中世の遺構としては、8層上面で鋤溝と考えられる浅い耕作痕を多数検出した。耕作痕は調査区中央の19-40 ライン付近を境に、西は南北方向に、東は東西方向に掘削されたものであった。溝・畦畔等の明瞭な区画施設は みられなかったが、この耕作痕の方向が分かれる境界が何らかの土地の区画境を表示している可能性がある。ただし、古代の段階の南北方向の区画よりも東に位置することには注意が必要であろう。

近世の遺構としては、近代まで踏襲される東西方向の溝と、溝に造りつけられた水門、水門のそばに設けられた木枠入りの水桶状の土坑と、耕作地へと続く細い溝数条を検出した。先述したとおり、東西方向の溝は、本調査区の東約200mに位置する事務局本部棟調査地点で確認した東西溝と連接する条里の区画溝とみられる。

上記の内容は現時点における暫定的なものであり、正式な内容は本報告によるものとする。 (野崎貴博)

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

津島地区における2007年度立会調査の実施件数は、14件を数える。このうち、中世層以下の土層・遺構を確認した調査が3件ある。すなわち、公共下水道接続工事<調査番号4>と総合研究棟Ⅲ期改修に関連する工事の一部<調査番号8・10>、そして給水配管引き込み工事(推進工事)<調査番号13>である。以下では、これらの調査成果について報告する。 (光本 順)

2. 公共下水道接続工事 (理学部ほか): BA12区 <調査番号4>

(1) 調査地点の位置と経過

調査地点は津島キャンパス西門の北側である。守衛所の向かい側に設置されている公共下水枡への接続工事に伴うもので、南北方向の管路幅0.7m、長さ5m、東西方向の管路幅0.7m、長さ10m、新設枡(1.9×2.0m)一カ所が調査対象であった(図6)。掘削深度は東西方向の管路で、道路面から1.7~1.8m、南北方向の管路で道路面から1.85m、枡部分で道路面から2.2mである。管路部分では「黒色土」層まで、枡部分では基盤層まで掘削が及んだ。調査期間は2007年8月20日~22日である。以下に概要を記述する。

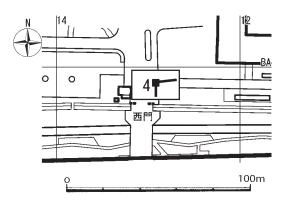


図6 調査地点の位置 (縮尺1/2,000)

(2) 調査の成果

a. 層序と地形 (図7)

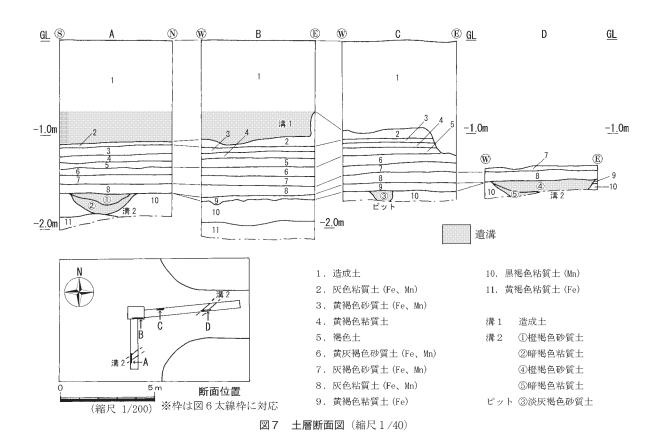
本調査地点では造成土以下基盤層まで11層を確認した。各層の時期については出土遺物がなく、周辺の調査成果から推定している。

1層は造成土である。陸軍による造成土及び岡山大学設立後の造成土である。2層は近代の耕作土層である。 灰色粘質土で鉄分・マンガンを含む。3~5層は近世の耕作土層である。3層はマンガンを多く含む黄褐色砂質 土、4層は黄褐色砂質土、5層は褐色土である。6層は黄灰褐色砂質土で鉄分・マンガンを含む。7層は灰褐色 砂質土で、鉄分・マンガンを含む。6・7層は中世の耕作土層と考えられる。8層は灰色粘質土で、マンガンを 多く含む。古代の耕作土層と考えられる。9層は黄褐色粘質土で、鉄分を多く含む。古墳時代相当と考えられる。 10層は黒褐色粘質土で、マンガンを多く含む。津島一帯で認められる「黒色土」層にあたる。時期としては縄文 時代~弥生時代前期と考えられる。11層は黄褐色粘質土層で、鉄分を含む。基盤層と考えている。

11層段階の地形はGL-2.0mで、南北方向の傾斜は認められない。10層上面は東から西へ、南から北へと若干傾斜している。9層は $A\cdot D$ 断面では傾斜が認められず、8層によって削平されている。8 層以上では、 $B\cdot C$ 断面の間でやや高低差があるが、全体としては水平堆積である。

b. 遺構 (図7)

溝1 2層上面で南北方向の溝を一条確認した。枡南壁 (B断面)で溝東側の立ち上がりを確認したものである。これより以南の管路部分では、調査範囲が溝中に含まれている。西側の立ち上がりは確認できず、幅は不明である。確認できた深さは30cmで、溝の底はGL-1.1mを測る。造成土を埋土としている。出土遺物はない。造



成直前まで機能していた溝であろう。近代の南北方向の溝であるため条里境との関係を検討してみたが、本調査 地点は区画にはあたらない。

溝2 A·D断面で確認された北東から南西方向の溝である。9層上面での検出である。幅0.7~1.05m、深さ0.2 mを測る。埋土は2層を確認した。出土遺物はないものの、層位関係から古墳時代の時期と考えられる。本地点とは少し距離があるが本地点の東約150mの第19次調査地点では弥生時代後期~古墳時代前半の北東-南西方向に走る溝群を検出している。微高地の裾部を走る溝であり、本地点のものもこれに類する溝と考えられる。

ピット1 10層上面で検出した(断面C)。径30cm、深さ10cmで、出土遺物はない。調査区内で組み合うも

のはなく、機能は不明である。時期としては弥生時代前 期以降と考えられる。 (岩崎志保)

3. 総合研究棟Ⅲ期改修工事

・電気設備・外灯基礎及び管路工事

: AV · AX07 · 08区<調査番号8>

・外構枡・配管(東半部)工事

: AW07 · 08区 < 調査番号10 >

(1) 調査地点の位置と経過

総合研究棟改修工事として、2007年11月~2008年1月 にかけて、工学部3号館および2号館建物周辺の掘削工 事が実施された。そのうち、掘削深度が比較的深かった

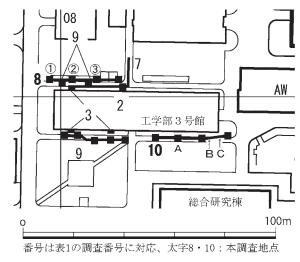
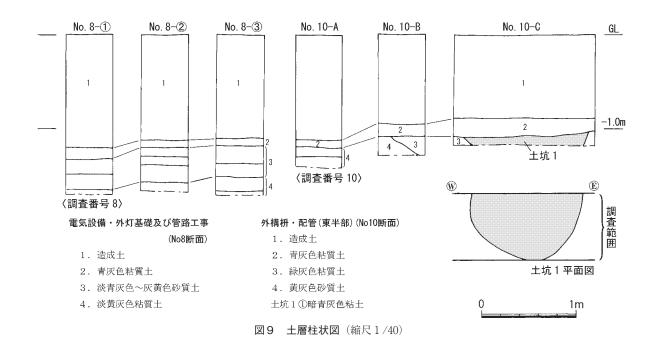


図8 調査地点の位置(縮尺1/1.500)



のが、調査番号8の3号館北側の電気設備・外灯基礎及び管路工事と、同10の同館南側の外構枡・配管(東半部)である。前者の調査を11月16・19日、後者を12月25・27日、1月11日に実施した。

(2) 調査の成果

電気設備・外灯基礎及び管路工事では、中世層と考えられる土層(4層:淡黄灰色粘質土)を確認している。 近世と考えられる3層(淡青灰色~灰黄色砂質土、Feの沈着で2・3枚に細分可能)が、その上に堆積する。

一方、外構枡・配管(東半部)では、近世土層の範疇に掘削が収まった。C地点では、近世土坑の一部を土層 と平面で確認した。土坑の平面形は隅丸長方形となる可能性がある。埋土は暗青灰色粘土となり、遺物は出土していない。 (光本)

4. インキュベーション施設外構配管工事:BA~BC20区 <調査番号13>

(1) 調査地点の位置と調査の経過

本調査地点は津島南地区の薬学部植物園西側に位置する(図10)。南東はインキュベーション施設新営地(津島岡大遺跡第30次調査)である。調査地点周辺では、第30次調査以外には、掘削深度の大きな工事に伴う調査は実施されていない。

本調査は新設されるインキュベーション施設への電気・ガス・水道および汚水の配管整備工事に伴う立会調査である。調査地点北側の⑤地点以北では、それぞれの設備の接続先により経路が三方に分かれる(西側経路:水道・ガス、中央経路:汚水、東側経路:電気)。⑤地点以南はこれらの配管を一系路に統合した集中経路となる。集中経路では4系統の管を並べて埋設するため、管路全体の幅は約2mと広くなる。しかし、掘削深度が浅い電気・ガス・水道配管を東半に、掘削深度の大きい汚水配管経路を西半約1mに寄せる構造であったため、近世以前の土層は集中経路西半部の掘削において確認された。

調査期間は2008年3月3~26日で、工事の進行に合わせて調査を実施した。以下、埋設設備ごとに掘削範囲と掘削深度をまとめておく。

汚水配管部分:インキュベーション施設から⑧地点までの掘削深度は約1.4mである。⑧地点以北では支障物の影響により、掘削深度が約1.7~2.4mとなる。掘削深度の大きい⑧地点から公共下水桝間の掘削については、深度が大きい桝部分(④~⑧地点)による土層の堆積状況確認後、管路の掘削を行った。水道・ガス配管部分:水道管・ガス管は、市道に埋設された各既設管から新たな管を引き込む。その際、市道に並行する既存の用水路底より下位に管を通す必要から、用水路両脇(②・③地点)については現地表面から約2.3mの深さで掘削した。③ - ⑤間、⑤地点以南の管路については約1~1.4m前後の掘削である。なお、市道部分については岡山市教育委員会の指示にしたがい、掘削に立ち会ったうえ、記録をとった。

電気配管部分:経路の北端に引き込み用電柱を建柱するため、オーガにより ϕ 50cm、深さ2.1m0掘り方を掘削した。管路の掘削深度は約1.2m前後、ハンドホールは約1.4mである。

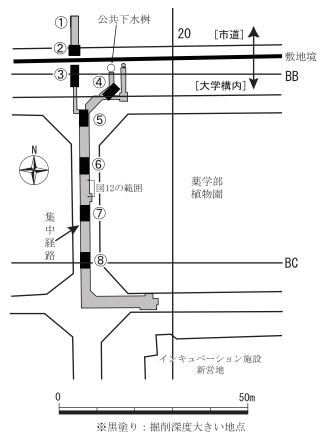


図10 調査地点と柱状図位置(縮尺1/1,000)

(2) 調査の概要

a. 層序と地形 (図11)

ここでは掘削深度が大きく、下層まで堆積状況が明らかとなった①~⑧地点、汚水配管管路部分の成果を中心に報告する。なお、本調査地点では遺物の出土がなく、各土層の時期は周辺の調査成果を参考にした。

1層は陸軍駐屯地造成(1907年)以後の造成土である。上面の標高は約3.5~4m前後で高低差があるが、これは調査地点が道路や植え込みなどにあたっており、現在の土地利用の差を反映したものである。

2層は明灰褐色砂質土で、上面の標高は約2.7~2.9mであり、近代の耕作土と考えられる。

3層は明橙茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.6~2.8mである。上面には鉄分の沈着が著しい。近世の耕作土と考えられる。4層は淡灰~明灰茶褐色粗砂で、上面の標高は約2.5~2.8mである。洪水砂とみられる粗砂層で、層の厚みに差があるものの、調査範囲のほぼ全域で確認した。本調査区の南東に位置するインキュベーション施設調査区(第30次調査)では近世と考えられる粗砂層が標高約2.6~2.7m、東に300mの延長線上にある創立五十周年記念館調査区(第27次調査)では中世の粗砂層が標高約2.9~3.1mで確認されている。本調査区では、後述するように、下層の5・6層が近世の土層である可能性があるため、本層も近世に所属する可能性を考えておきたい。5層は明灰茶褐色砂質土で、上面の標高は約2.4~2.6mである。6層は明灰橙茶褐色弱粘質土で、上面の標高は2.35~2.5mである。津島地区における他地点の状況をみると、中世に所属する土層は灰白色粘質土が主体的である。土質から判断すると、5・6層は近世の土層である可能性がある。

7層は明橙灰白色粘質土~粘土で、上面の標高は約2.4mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。 8層は明灰色強粘土で、上面の標高は約2.15~2.3mである。本層も鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しい。いずれも中世の水田層と考えられる。

9層は暗灰色強粘土で、上面の標高は約2.2~2.3mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と

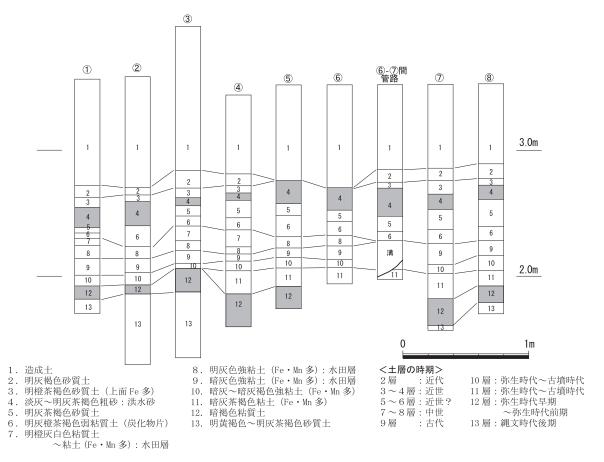


図11 土層柱状図 (縮尺 1/30)

考えられる。南東に近接する第30次調査地点でも中世水田層下に灰色粘質土の古代層を確認しており、本層も古代に属する可能性が高い。

10層は暗灰~暗灰褐色強粘土で、上面の標高は約2.0~2.15mである。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と考えられる。11層は暗灰茶褐色粘土で、上面の標高は約2.0~2.1mである。調査区北側では確認されなかった。鉄分の沈着、マンガンの凝集が著しく、水田層と考えられる。10・11層については、第30次調査地点では対応する土層を特定できない。ここでは両層を弥生時代~古墳時代の土層と考えておきたい。

12層は暗褐色粘質土で、上面の標高は約1.8~2.05mである。津島地区では「黒色土」と呼んでいる鍵層であり、 上面が弥生時代前期にあたる。掘削深度の浅い⑥地点、⑥-⑦地点間管路では確認されなかった。

13層は明黄褐色~明灰茶褐色砂質土で、上面の標高は約1.6~1.9mである。縄文時代後期の基盤層と考えられる。掘削深度の大きい2、3、7、8地点で確認した。

地形 縄文時代後期の13層段階では、北側の②、③地点では標高1.8~1.9m前後、南側の⑧地点では標高約1.8mである。なお、南東の第30次調査地点では、標高約2.1m前後で微高地が広がっている状況が確認されており、⑧地点から南に向かってさらに高まっていくと推測される。④地点から⑥-⑦間管路地点では13層は確認されていないが、⑤地点では掘削底面の標高1.76mで12層が確認されるため、本調査範囲のうち③地点以南は窪地状に低くなっているとみられる。

12層段階では、③地点が標高約2.0mでもっとも高く、⑦地点が標高約1.83mでもっとも低い。③地点以北では12層上に10層が確認されること、下位の13層が高い位置で確認され、本来は微高地状を呈していたと推測される

ことから、11層以下が削平されている可能性も想起される。その場合、①・②地点では、12層は本来③地点で確認された標高約2m程度の高さを有していたことが想定できよう。また、調査区南側では⑧地点で標高約1.9mであるが、第30次調査地点西側では標高2.2m前後で確認されており、13層同様、南に向かって高まることが想定される。

11層は、④地点以南で確認しているが、上面の標高が約2.0~2.1mでほぼ水平となる。この段階で調査区南半では12層段階の起伏がほぼ解消されている。

なお、12層上に10層が形成されている調査区北側の①~③地点については、11層形成後、土地の改変等により、11層と12層の一部が削平をうけた可能性があることは先述した。①、②地点の12層上面の標高は約1.9mで、ほぼ水平な面を形成している。③地点では約2.1mとなり、これは④地点以南の11層上面の標高にほぼ合致しており、③地点以南に水平な面が形成されたことを示す。したがって、10層形成段階に②、③地点間を境とする段差が作出されていたこととなる。この南北の段差は近代にいたるまで踏襲される。

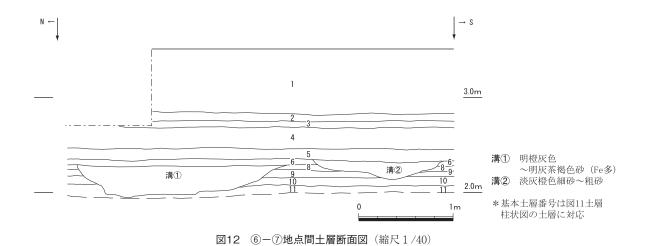
b. 遺構 (図12)

⑥-⑦地点間管路で6・8層から掘削された溝をそれぞれ1条ずつ確認した。調査範囲の東壁断面で確認された溝はほぼ同じ位置で西壁にも確認できたため、東西方向の溝とみられる。溝①は8層から掘削されており、幅約2.2m、深さ約0.35mをはかる。底面の標高は1.94mである。埋土は明橙~灰茶褐色砂で、下方にむかって砂の粒子は粗くなる。底面の粗砂層では鉄分の沈着が顕著にみられる。溝②は6層から掘削されており、幅約1.3m、深さ約0.2mをはかる。いずれも遺物は出土していないが、土層から溝①は中世、溝②は近世に属する可能性が高いとみられる。そのほかに遺構は確認されず、本調査地点は遺構・遺物の稀薄な地点といえる。

(3) まとめ

津島南地区西半部では、これまで本調査区の南の第8・16・30次調査のほか、東約250~300mの地点では2件の発掘調査(第26・27次調査)、西約350mの地点で国際交流会館新営にともなう試掘調査を実施している。南・東側では、微高地と谷によって起伏のある地形が形成されていることが確認され、遺構・遺物の密度は津島地区北東の密集域に比して高くはないものの、縄文時代以降、各時期の遺構・遺物を確認している。それに対して西の試掘地点では中世層よりも下位は湿地状の堆積であり、遺構・遺物が非常に稀薄な状態である。今回の調査はこれまで調査が実施されてきた地点のほぼ中間地点を南北約80mにわたって掘削したこととなる。

その結果、縄文時代後期~弥生時代前期までは微高地と低地で形成される起伏のある地形が展開すること、古 墳時代から古代にかけて土地の改変が行われていること、近世の洪水砂の広がりが確認されたこと、遺構・遺物



-12-

の密度は稀薄ではあるものの皆無ではないこと、など、旧地形の復元と土地利用の状況、遺構・遺物の疎密を知ることができた。

また、津島南地区西側で確認された湿地状の地形の東への広がりを本調査地点よりも西側に想定することができるようになったことは津島岡大遺跡の西側の範囲をとらえるうえで重要である。 (野崎)

表 1 2007年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内容
1	発掘	津島南	BE19·20	イ	インキュベーション施設新営に伴う発掘調査	8.1~12.17	2.0~2.5	縄文〜近代の遺構・遺物、古代の道路状 遺構、弥生〜古墳の溝
2	立会	津島北	AV07	エ	総合研究棟Ⅲ期改修工事:配管工事	8.8	0.4	既設工事内
3	立会	津島北	AW·AX07	エ	総合研究棟Ⅲ期改修工事:外部PS基礎部分	8.20 · 21	0.6~0.75	造成土内
4	立会	津島北	BA12	理他	公共下水道接続工事 (理学部他)	8.20~22	2	GL-1.6mで黒色土確認、弥生時代の溝
5	立会	津島北	AU·AW08	I	総合研究棟Ⅲ期改修工事:建柱	8.24	0.8、1.9~2.0	残丘部分: GL-0.8m、下面に灰青色砂礫 層確認(丘形成前の土層か)。他 2 箇所: GL-1.9~2.0m、近代層確認
6	立会	津島北	AW13	図	中央図書館耐震改修工事: 建柱	10.22	0.75~1.35	既設工事内および一部近代層
7	立会	津島北	AV07、 AX07·08	エ	総合研究棟Ⅲ期改修:機械設備工事・配管替え	11.9 · 12	0.7	造成土内
8	立会	津島北	AV · AX07 · 08	エ	総合研究棟Ⅲ期改修:電気設備・外灯基礎及び 管路掘削工事	11.16 · 19	1.4~1.7	近世~中世層確認
9	立会	津島北	AW07	エ	総合研究棟Ⅲ期改修:外構枡·配管(西半部)	11.19 · 26 · 28	0.8	造成土内
10	立会	津島北	AW07·08	エ	総合研究棟Ⅲ期改修:外構枡·配管(東半部)	12.25·27、 08.1.11	1.1~1.4	近世層確認、土坑1基
11	立会	津島南	AZ~BF18	イ	インキュベーション施設仮設電気引き込み工事	08.2.4	1	近代層確認
12	立会	津島南	BD18	農·薬	遺伝子実験施設アース板修理工事	08.2.29	1.65	既設工事内
13	立会	津島南	BA~BC20		給水配管引き込み工事 (推進工事)	08.3.3~26	1.2~2.4	縄文時代〜近代の土層確認、中世と近世 の溝各1条
14	立会	津島南	BB~BG18, BC·BE17, BE16	薬	ガス配管改修工事	08.3.7~26	0.8~1.3	造成土内~一部近世層まで掘削

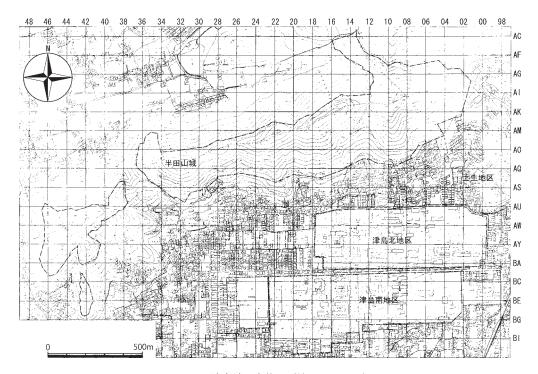


図13 津島地区全体図 (縮尺 1 /20,000)

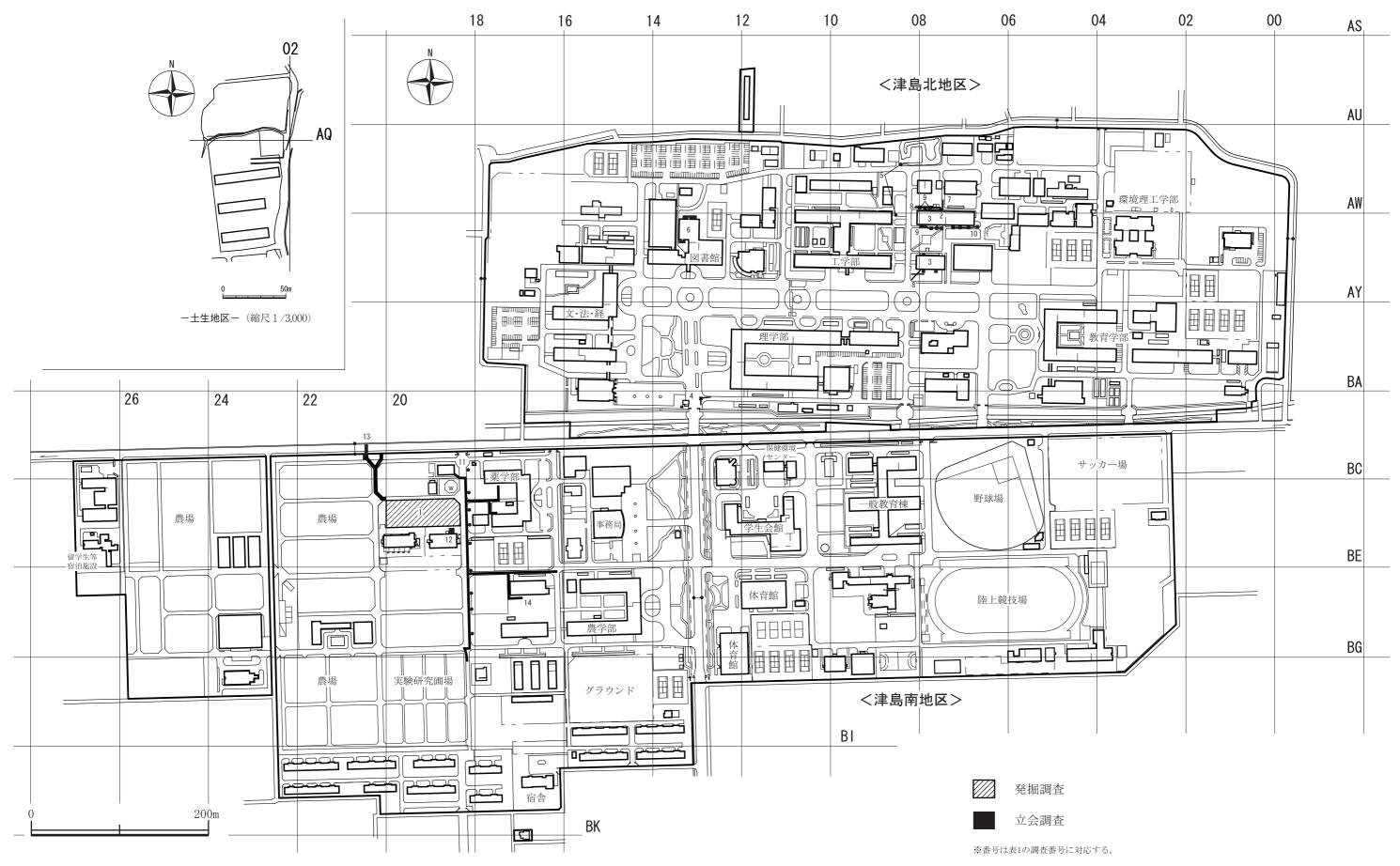


図14 2007年度の調査地点【1】 -津島地区- (縮尺 1/4,000)

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第18次調查 (医学部附属病院中央診療棟建設関連工事、

鹿田BT13~BY20区、CG~CI9·10区、CM~CN9·10区、CO10·11区)

調査期間 2007 (平成19) 年10月10日~2008 (平成20) 年3月14日

a 地点 (中央診療棟建設地): 2007年10月10日~2008年3月14日

b 地点 (防火水槽設置地点): 2007年10月16日~2007年11月1日

c 地点 (用水路改修地点) : 2007年12月27日~2008年1月16日

調査担当 a 地点:山本悦世(主任)・岩﨑志保、池田晋(12月から)

b 地点: 光本 順 c 地点: 野崎貴博

調査面積 a 地点:872.16㎡、b 地点:43.2㎡、c 地点:56㎡

遺構・遺物

【遺構】 a 地点:土坑59基(井戸26基、土坑24基、野壺9基)、溝29条、柱穴399基、土器集中箇所

4カ所、焼土集中箇所1カ所

b 地点:井戸1基、土坑1基、入り江状遺構、護岸施設、杭、

c 地点: 土坑1基、溝3、道路状遺構

【遺物】 a 地点: 土器類(弥生後期~古墳時代初頭、古代後半~中·近世)、木製品(井戸枠材、箸、

不明飾り木製品、下駄、漆塗り椀など)、石製品(五輪塔の一部、砥石ほか)、そ

の他 (桃核、ウシ肩胛骨など)

b 地点: 土器類 (古代後半~中・近世)、木製品 (杭ほか)

c 地点: 土器類 (弥生時代~中世)

総合計188箱/1箱約28以

その他 a 地点(中央診療棟建設地点)において現地説明会を開催:2008(平成20)年2月23日

見学者数97名

A. 全体の概要

(1) 調査地点の位置

岡山大学鹿田地区の東南部に位置する。調査地点は a \sim c 地点の 3 箇所に分散する(図15)。周囲には、第 2 次調査地点、第10・11・14次調査地点が点在する。

a 地点はかつて医学部附属病院の厨房棟が建っていた地点である(図15-18a地点)。鹿田地区に設置した構内 座標では、BT13区~BY20区にあたる。 b 地点は鹿田地区の東入口付近にあたり、 a 地点の南東方向約45mに位置する。鹿田地区構内座標CG~CI9・10区である。 c 地点は b 地点から南約30mに位置する。用水路脇の道路部分である。鹿田地区構内座標CM~CN9・10区、CO10・11区である。

(2) 調査の成果

調査成果としては以下の3点にまとめられる。

①弥生時代~古墳時代初頭の鹿田地区における中心的微高地の端部付近の状況を確認した。

②古代後半期における居住域の東側への広がりが鹿田地区の東側に求められる点、古代後半~中世前半期における屋敷地の区画とその推移が、 鹿田地区全域を対象としたものであった点について、従来の予察を補強 した。

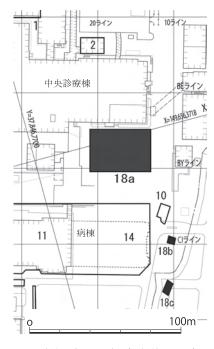
③近世では、中世末まで継続した居住域が耕作地に転じたのち、近世後半に再び土地造成が行われ、a地点(厨房跡地)は居住域として、b地点(防火水槽)は船着き場として利用された可能性が求められた点は新たな知見として注目される。

B. 中央診療棟建設地(旧厨房跡地):18 a 地点

(1) 調査地点の位置

a 地点は鹿田キャンパスの東端部付近に位置する(図15-18a地点)。 北側に中央診療棟を挟んでNMR-CT室(第2次調査地点)さらに、 北西部に外来診療棟(第1次調査地点)、南側には病棟(第11次・14次調査) が建てられている。

鹿田地区に設置した構内座標では、BT13区~BY20区にあたる。



※番号は表2の〈調査番号〉に対応 18a~cが調査地点

図15 第18次調査地点 (縮尺 1/2,500)

(2) 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

2005 (平成17) 年度末に、岡山大学医学部附属病院中央診療棟改築に伴う一連の工事実施予定が示された。本工事対象地は、コンクリート 1 階建ての建造物である厨房棟が位置する地点であり、当初は2000㎡を超える範囲が予定された。2006 (平成18) 年度に入り、対象地を 2 期に分割して対応する計画へと変更となり、最終的には2007 (平成19) 年度に 1 期分872.2㎡の面積を調査することとなった。

それを受けて、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは、当該地における埋蔵文化財に関する調査計画の検討に入った。当該地周辺では、北側で第1・2次調査(外来診療棟・NMR-CT室)、南側では第14次調査(病棟)が既に実施されており、弥生時代~中世・近世の時期に属する遺構・遺物の広がりが予想された。また、既存建物の基礎構造からは、広範囲におよぶ深い撹乱部が形成されていることが危惧されることとなり、これ以上の遺跡破壊はできるだけ回避すべきであることが望まれた。このように、当地点の埋蔵文化財の残存状況については、既存の発掘成果から一定の予測を得ることは十分に可能であり、こうした点から、遺跡確認を目的とした試掘・確認調査は行わないこととした。既存の発掘調査の成果を基礎に、本地点における発掘調査試算を行った結果、調査員2名で約5.5ヶ月の発掘調査期間が設定された。

調査の経過

2007年9月13日から表土掘削を開始した。調査員1名が常時立ち会い、表土および撹乱土掘削のほか既存の建物基礎の撤去を進め、その大半の除去作業を同10月9日に終了した。その中には、鹿田キャンパスに医科大学が設置された頃の主配管や木造建物基礎あるいは昭和期に建設された厨房棟の基礎が含まれており、その除去によって、 $1\sim2\,\mathrm{mom}$ で基盤層に達するような深い掘削溝や撹乱穴が、調査対象地を基盤の目のように切り刻む

こととなった。特に、近世~中世の包含層は、約5m×3m以下の大きさとなった島状の高まりとして、約30箇所に残存するという状態となった(図18)。大規模な撹乱による破壊を免れた部分では、近代層以下の土層が良好に残っていた。一方、深い撹乱部は弥生時代の基盤層にまで破壊がおよぶことが予想された。ただしその後、弥生時代~古墳時代初頭の包含層が大規模な撹乱部においても、想定以上に広い範囲で残っていることが判明することとなる。

発掘調査は2007年(平成19年)10月10日から開始した。撹乱部分の清掃終了後、発掘調査開始段階の全景写真を撮影した。写真撮影後、近代土層下面の近世面を検出する作業を進め、同面の精査から近代・近世の遺構の検出を試みた。近代では、溝・大形の土坑そして耕作地形成に伴うと判断される地形の落ちなどを検出した。これらの遺構は、多くの撹乱溝によって細かく分断されていたため、直接につながりを確定することは困難な場合が多く、埋土の特徴を手がかりに調査を進めた。近世土層の検出に入ると、調査区中央部付近において、非常にレベルの高い位置に中世土器を多量に包含する土層の広がりを確認した。一部では炭化物の分布を伴っていた。本土層に関しては、当初、包含される遺物の時期から近世層はなく中世層の高まりではないかと考えられ、同面で検出される大形の柱穴や井戸で構成される中世の集落の存在が期待された。しかし、同土層下面に近世遺構が検出されたことになり、改めて検討した結果、同土層は近世段階に形成された造成土的な性格を有する土層であり、少なくとも二時期におよぶ近世の集落の存在が判明した。

こうした調査の進行とあわせて、撹乱下部の清掃を進める中で大形の遺構が次々と検出されていった。これらは本来所属すべき土層とは分離しているため、その調査時期が問題となったが、各遺構の所属時期も確定できないことから、随時、調査を行うこととし、全体の写真撮影については、検出層位ごとではなく、近世~古代末の遺構をまとめた状態で撮影することとした。同時期の遺構としては、土坑・井戸・溝・ピット(柱穴)が検出された。

古代後半~近世・近代の遺構の調査を終了したのを受けて、2月23日に現地説明会を開催した。97名の見学者があった。

包含層の掘り下げが進行し、古代後半に属する遺構の調査終了段階には、撹乱溝等による大きな段差は姿を消し、弥生時代後期~古墳時代初頭の遺物が点々と散在的に出土し始めた。調査区南側には数条の溝、さらに、井戸がそれに重複するように検出された。同西側では、当時の微高地の斜面部に遺物の集中も認められることとなった。弥生時代後期の遺構の調査あるいは遺物の取り上げ後、全景写真を撮影した。その後、最終確認のために、必要な箇所について基盤層以下にまで掘り下げを行い、3月14日に発掘調査を終了した。3月17日に、調査区壁面の土層記録などの補測を行い、全ての作業を終えた。

(3) 調査概要

a. 層序と地形

層序 (図16)

本地点では、1922年(大正11年)に医科大学が本地点に建設されて以後現在に至る間の表土層を構成する1層の下面から、近代、近世、中世~古代後半、古墳時代前期~弥生時代後期に属する各土層、そして弥生時代の基盤土層が堆積する。各土層の特徴をまとめよう。

1層: 鹿田地区に医科大学が建設された段階から現在に至るまでの堆積土を一括し、同区を厚く覆う表土層を指す。造成土あるいは配管・基礎工事の埋め土などを含む。厚さ1m前後を測り、現地表面にあたる上面は標高約2.3mに位置する。

2層:近代の堆積土層である。灰色粘土層あるいは灰色砂混粘土層を呈する。上面は標高1.8~1.9mに位置する。 均質性に欠ける土層であり、その混入度によって細分が可能な場合も認められる。ただし、1層による削平など

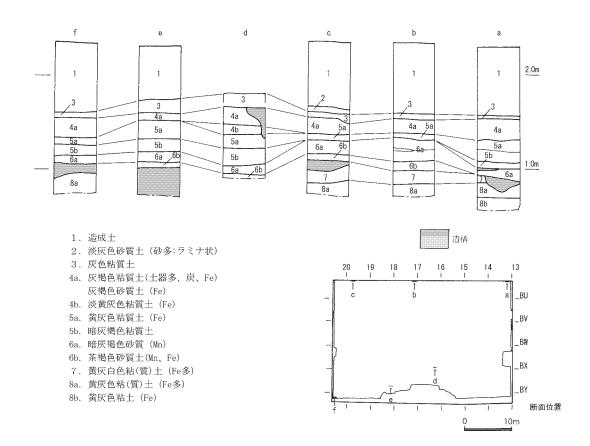


図16 土層柱状図と土層断面位置(縮尺1/40、1/800)

により、全域に確認されるものではなかった。

3層: 灰色粘質土で、近代の耕作土と考えられる。全体に均質性が高い。上面の高さは標高 $1.6\sim1.65$ mを中心とするが、調査区の中央部から南側にかけては標高1.85m前後まで上昇し、その高低差は約20cmを測る。層の厚さも全体的に20cm程度が確認されている。こうした高低差には、前段階(4 層段階)の地形が踏襲されていることが予想される。

4層:近世に属する土層である。灰褐色粘質土を基本とし、大きくは上層(a層)と下層(b層)に分層される。 a層は灰褐色粘質土あるいは砂質土である。おおむね近世後半に属すると考えている。上面の高さは、標高1.7~1.8m(高位部)と標高1.4~1.55m(低位部)に広がりが確認される。前者は、15ライン~20ライン付近の範囲で、さらにBUラインとBYラインの間という範囲に、方形に近い広がりが予想される。下面は標高1.55~1.6mに位置する。堆積土は2~3層に細分される部分が多く、それぞれが遺構面を形成する。埋土には土器の細片が多く含まれ、炭化物の包含も珍しくない。さらに、こうした包含物が土層内に均質に含まれる点も注目される。こうした土層の堆積範囲が、近世の遺構が集中的に検出される地域に合致していることからも、4a層は居住域を形成するための造成土的性格をもつ可能性が指摘され、複数回にわたって盛り上げて整地された様子が復元される。一方、後者は、高位部を形成する調査区中央部を除き、それを取り囲む西~北~東側の範囲に広がる。土質は砂質を帯びる場合が多い。下面は標高1.3m前後に位置し、層の厚さは10~20cmを測る。本地域に堆積する土層は、土器などの包含物を特別に多く含むことはなく、全体的に均質性の高い特徴をみせる点で高位部の土層とは異なる。こうした特徴から、居住域の周囲に一段下がった耕作域を形成する土層と判断される。最も低い地点は調査区北西コーナー部で、標高1.35mを示す。

b層は黄灰褐色砂質土である。おおむね近世前半に属すると考えている a 層に比べてやや黄色みを帯び、砂質を強める。包含物は少なく、均質性の高い土層である。上面は標高 $1.55\sim1.6m$ 、下面は標高約1.3mを測る。 2 層に細分される場合も多い。その分布域は、 a 層の高位部の下部にほぼ限定される。また、下面の高さは低位部にあたる a 層のレベルに近い。こうした土質の特徴や下面レベルあるいは限定される分布域の状況から、本土層は a 層よりは古い段階の耕作土である可能性が考えられる。その多くは、 a 層形成段階における耕作によって消失する中、高位部の居住域下部にのみ残されたと判断される。

5層:古代後半~中世前半に属する土層である。淡黄灰色粘質土 (a層) と暗灰褐色粘質土 (b層) とに、比較的明瞭に細分される。

a層は、やや砂質を帯び、色調面での濃淡によってさらに2層に細分される部分もある。上面の高さは、標高 1.5~1.6mと同1.3~1.4mを測る。前者の広がりは、調査区南端付近にあたるBXラインとBYラインの間より南側で、さらに17ライン~20ラインの間という非常に狭い範囲に限定される。下面は標高1.3m前後に位置する。一方、後者は、前者の狭い堆積範囲を除いて調査区の大半を占めており、一見平坦な地形の広がりが見て取れる。しかし、下面の高さを確認すると、北壁~東壁を中心とする範囲では標高1.2m前後を中心とするが、15ライン以西でBUライン付近から南側の範囲では標高1.3m前後を保っており、高低差を示す。このやや高い地形の範囲には古代後半~中世の遺構が集中するほか、4層でみた高位部の範囲ともほとんど一致する。こうした状況から、上面の高低差は、4b層段階の土地改変が作り出した結果であり、調査区南端の部分だけが高い地形であったわけではなく、本来、同範囲には、北壁~東壁付近よりはやや高い地形が保たれ、居住域が広がっていた可能性が想定される。また、前段階の低い地形を埋める形で、調査区全体の平坦化がなされたことも窺われる。

b層の堆積は、調査区の北壁周辺では確認されていない。この背景には、6層の高まりの影響で後世の削平を受けた可能性が考えられる。上面の高さは、15ライン以西でBUライン付近から南側の範囲において標高1.3m前後、東側では同1.2m前後の値を示している。そこには、a層と同様の地形と遺構の関係が想定されることから、5b層形成時点で、居住域部分がやや高まる地形が創出されたと見なされる。下面の高さは、前者では標高1.2m前後、後者では同 $1\sim1.15$ mを示し、東側に向けてやや低い傾向をもつ。

6層: 古墳時代初頭に属する土層である。おおむね暗灰褐色砂質土を呈し、マンガンの沈着が特徴的である上層 (a層) と、茶褐色砂質土を呈し、鉄分あるいはマンガンの沈着が認められる下層 (b層) とに細分される。

a層上面は、5層までとは逆に、調査区の北側が高い傾向を示す。14ラインから19ラインのやや西側にあたる 北壁において、本土層上面の高さは標高1.3m前後を測る。同レベルが広がる範囲は、北壁を底辺とした台形状 を呈しており、BWラインの南2m付近まで伸びる。この微高地部の周縁は標高1.2mあたりまで下がり、その南 側を弧状に取り巻く幅5~8 mの範囲では、標高1.0~1.15 mに上面をもつ低位部の広がりへと展開する。さらに こうした微高地下端の緩やかな落ち込みの南側では、上面の高さは標高1.2mまで上昇し、さらに南東部へ向け て下降するなど、起伏のある不安定な地形の広がりを見せる。

b層は、東壁~南壁側では確認されていない。それ以外の地点で上面の高さをみると、北壁で標高1.2~1.3m、 微高地端部の南側低位部で同0.95m、調査区南西部で同1.1mという数値を得ることができる。これらは、a層から10cm程度低い数値となっていることから、基本的には同層と共通した地形が復元される。

7層: 弥生時代後期の基盤層にあたる。黄灰白色粘質土あるいは粘土を呈する。鉄分の沈着が顕著である。上面の高さは、北壁において、15ラインから19ライン付近までが標高1.1mを示しており、その高さを保つ微高地は、BWラインから2m程度南の地点まで舌状の広がりを見せる。その微高地から南側は標高 $1m\sim0.65m$ まで下降しており、やや起伏のある低位部を形成する。基本的には6層の地形と共通する。

8層: 弥生時代以前の基盤層を構成する。黄灰色粘土あるいは粘質土を呈し、鉄分の沈着が顕著である。地形が高い部分では、粘性の違いなどから上下層に細分される場合もある。上面は、北壁で標高1m程度、南側で0.8~0.6

m程度を示す。

9層: 弥生時代以前の基盤層を構成する。暗灰色粘土層を示す。標高0.4~0.3m付近に堆積する。

10層:弥生時代以前の基盤層を構成する。灰白色粘土層を呈する。標高0.15m付近に堆積する。

11層: 弥生時代以前の基盤層を構成する。灰色粘土に細砂が混ざり合った状態を呈する。標高 0 m付近に堆積する。

12層: 弥生時代以前の基盤層を構成する。灰白色砂質土を呈する。強い砂質を示す。標高-0.2m付近に堆積する。 9~12層については、その確認は部分的であり、地形などの詳細は不明である。

地形の復元

弥生時代後期~古墳時代初頭(6・7層)では、本地点は、北側に位置する第2次調査地点さらに第1次調査地点において確認されている微高地の端部にあたることが予想される。微高地部は、調査区北壁で東西幅約30mの広がりをもつ。南に向かって約16m張り出し、BWライン付近では東西幅17m程度となっており、全体的には舌状あるいは台形に近い形状が復元される。その周囲には、少なくとも幅12m程度のたわみ状地形が広がっているが(SD28・27・落ち1~3)、その内部には緩やかな起伏を有する。こうした地形の中で、井戸・溝は、たわみ部分を中心に配され、溝が微高地を巡る。

古代後半~中世前半(5層)では、調査区全体に平坦化が進み、安定的な土地形成がみてとれる。前段階とは逆に、南側が高い傾向にあるかもしれない。調査区の西2/3程度の範囲が比較的高く、そこに居住域が形成されたと想定される。調査区東側では耕作域の広がりを窺わせる。

近世(4層)にはいると、前半段階(4b層)では、調査区南端部を高い状態のままに遺して、その北側を耕作地として削平した可能性が考えられる。さらに、後半段階(4a層)では、調査区中央部~南側に、居住域を形成するための盛り土が行われ、地形的な高まりを生み出す。周囲は耕作地として引き続き利用され、4a層が4b層を消失させていくと考えられる。この地形は、調査区全体が耕作地と変化する近代(3層)に踏襲される。

b. 遺構と遺物

検出された遺構あるいは人間活動の痕跡は、全時期を通じて、井戸26基・土坑24基・野壺9基・溝29条・柱穴399基、 そして土器集中箇所4カ所・焼土集中箇所1カ所である。遺物は、弥生時代後期~近世・近代の土器・陶磁器類のほか、漆椀や井戸枠などの木製品、五輪塔の一部を含む石製品、桃核などがあげられる。古い時期から順に、 時期別の概要をまとめよう。

弥生時代後期~古墳時代初頭(図17)

井戸1基・土坑2基・溝9条・遺物集中箇所を4カ所および焼土集中箇所1カ所を検出した。それらの遺構に関して、連続性などを考慮し、出土土器あるいは検出面から時期別にまとめると、弥生時代後期の遺構としては、井戸1基・土坑2基・溝4条(土器集中箇所1箇所含む)・焼土集中箇所1箇所、古墳時代前期では、溝2条(土器集中箇所3箇所含む)となる。本時期の地形を改めて確認すると、調査区北面から南側に向けて張り出すように形成された微高地とその周囲を巡るたわみ状の地形が復元されるが、土坑1基(SK60)を除く全ての遺構は、このたわみ状地形内あるいは近辺に配される。

弥生時代後期では、溝(SD23)の下部で井戸(SK59)が検出された。底部付近から後期後葉~末葉の土器(高杯他)が出土した。周辺に居住域を想定させる遺構が検出されない微高地端部に単独で構築されている点は、その性格を考える上で注目される。溝群は重複関係を持つ。撹乱による破壊や上部削平あるいは土質変化の影響で、その多くが分断されているため、各溝の連続性を確定することは困難であったが、形状の特徴や位置関係などから小形の3条(SD26、SD25-23、SD22-24)とたわみ状の溝(SD28)の存在を考えている。後者は、自然地形の可能性が高く、その斜面部分には土器の集中が認められた。焼土集中箇所は溝22上で検出された。

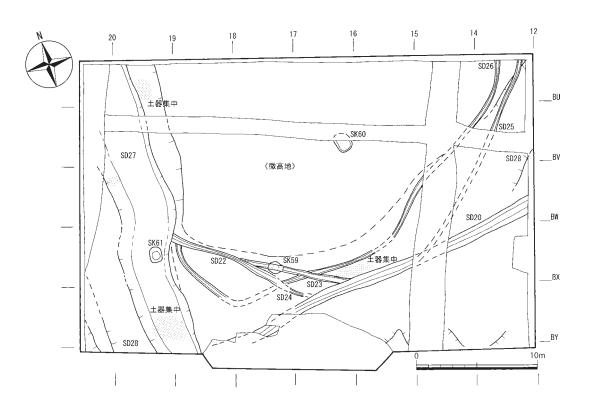


図17 弥生時代後期~古墳時代初頭遺構全体図(縮尺 1/300)

古墳時代の遺構では、6 b層上面で溝 1 条(SD20)、6 a層上面でたわみ状をなす 1 条(SD27)が認められる。両者間の掘削面の違いから、前者が古いことがわかる。後者の内部にあたる範囲では、土器集中が 2 箇所で確認された。

古代後半~中世前半 (図18・19)

井戸14基・土坑2基・溝9条・柱穴群を検出した。これらは、出土遺物から得られる各遺構の時期や溝と井戸の配置などから、11世紀~13世紀初頭と13世紀中頃~14世紀前半の2段階にまとめることができる。

<古段階> 11世紀~13世紀初頭(あるいは前半)に属する遺構は、井戸7基・溝6条・柱穴群である(図19①)。 井戸は全て調査区南西域に集中する。これらは、出土遺物の時期あるいは近接した位置関係から、1基の井戸 が移動して形成された可能性が考えられる。また、ほとんどの井戸では、多量の炭化物やあるいは豊富な遺物が 納められており、祭祀的行為が顕著に認められる。

これらの井戸が存続する時期幅のなかで埋没した溝は、6条が確認される。いずれの溝も撹乱によって細かく 分断されているため、直接的なつながりを確定することはできなかった。ただし、4条の溝(SD12b・13・18a・ 18b)については、形態的特徴から一連の溝として評価しており、敷地を区画する可能性を考えている。これらは、 平行する2条の溝あるいは一部で底部が2条に分離することから、作り替えがあったことが窺われる。また、調 査区南端部では、南北方向の区画溝となる可能性が高い溝(SD12a)も検出されている。

<新段階> 13世紀(中頃)~14世紀に属する井戸7基・土坑2基・溝3条が含まれる(図19②)。

13世紀代では、15ライン付近に溝が南北方向に走り、その西側に4基あるいは5基の井戸、東側に1基の井戸が位置する。個々の井戸の詳細な時期は今後の課題であるが、それらは $5\sim10$ m程度の距離間隔を保つ。溝は2

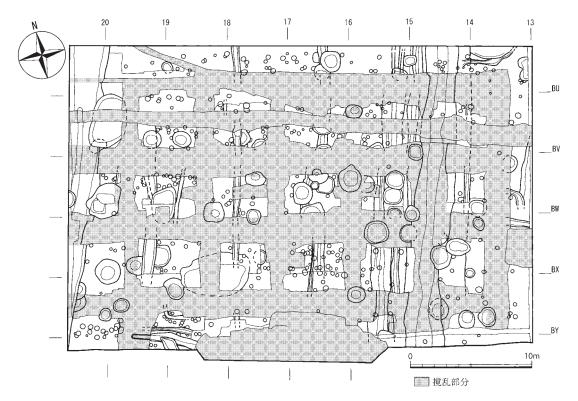


図18 古代後半~近代遺構全体図(縮尺 1/300)

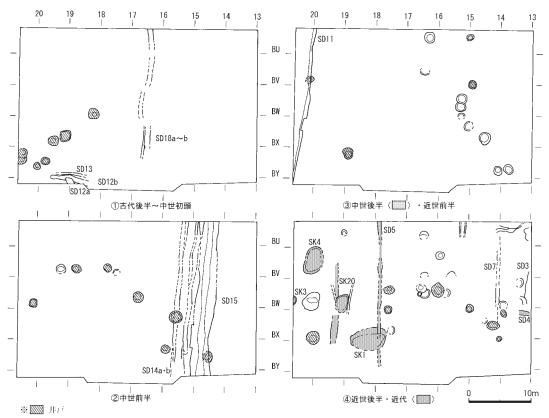


図19 古代~近代の時期別主要遺構配置図(縮尺 1/600)

条が東に向けて作り直されていることから、少なくとも本段階の中にも複数の段階が存在したことは明らかである。屋敷地は溝の西側を中心に配されており、溝と井戸の配置には、前段階からの変化がみてとれる。その他に 土坑1基を含む。

14世紀代に埋没した遺構は、大形の溝 1 条と井戸 1 基あるいは 2 基、そして土坑 1 基と柱穴群である。前段階から飛躍的に大形化した溝(SD15)は幅 3 m前後が検出された。深さは1.3~1.4mを測り、BV~BXライン付近から遺物がまとまって出土した。また、少なくとも掘立柱建物 1 棟が調査区南西隅に配されていたことが、柱穴内出土の土器によって確認される。そのほかに、五輪塔の一部が井戸から出土した。遺構数はやや少ない傾向を示しており、居住時期幅は比較的短期間であったかもしれない。

中世後半(図19③)

井戸3基・土坑1基・溝1条を含む。遺構から出土する備前焼のすり鉢、あるいは肥前陶器などから、15~16世紀の年代が導き出される。溝(SD11)は、調査区の西端をおおむね南北方向に走る。幅2m以上を測り、前段階の大溝(SD15)と同様に大形の形状を保つ。内部からは、ウシの肩胛骨1点が掘り方斜面に接して出土した。本地点の南側に隣接する第14次調査地点においても、溝から馬の下顎骨が出土している。同溝の東側には井戸が点在しており、居住域として利用されていたことを示す。

近世前半(図19③)

9基の土坑を含むほか、溝 1条(SD11)が中世後半から継続して機能すると考えられる。土坑は、断面箱形の特徴を有し、底部に枠をのこすものが大半を占める。いわゆる「野壺」と評価される。17ライン以東に南北方向に数基が並ぶように配される。これらの土坑の機能を考えると、本地点周辺には耕作地が広がっていたことが窺われる。出土遺物が極めて僅少であるため、各遺構の詳細な時期については今後の検討を要するが、検出レベルなどから、近世前半の可能性を考えている。

近世後半 (図194)

井戸8基・土坑15基・溝5条・柱穴群を検出した。井戸はBV~BXライン間に配される。井戸の時期を決める遺物は少ないが、大小の礫石が埋土の上半に投棄された状態を見せる場合が多い。土坑は、平面形の規模あるいは掘り方の形状などに違いを示しており、そこには墓・柱穴などの機能的差を考慮する必要があろう。溝は、南北方向に4条と、東西方向に走ると予想される1条があげられる。いずれも詳細な時期を示す遺物は出土していない。柱穴は、BW・BX15・16区、BV18・19区付近に集中しており、掘立柱建物の存在を窺わせる。本地点が居住域として、再度整備された時期として注目される。

近代 (図194)

検出した遺構は、土坑 4 基・溝 6 条である。調査区西半に位置する土坑 3 基(SK 1 ・ 4 ・ 20)はいずれも大形であり、一辺が 2 ~ 5 mの不整方形を呈する。埋土には水性堆積層が形成されている点が特徴であり、貯水機能をもつことが窺われる。注目される遺物では、漆椀が土坑 2 基(SK 1 ・ 3)から出土した。溝は、南北方向に走り断面箱形の用水路を形成する溝(SD 5)以外は比較的浅い溝である。東西方向の溝はBWライン付近を走ることが予想されるが、同ライン上は撹乱で大半が破壊されているため、調査区東端部で確認されたのみである(SD 4)。同溝からは桶が出土した。本時期に形成された土層は耕作土と考えられ、いずれの遺構もそれに関係をもつ機能が想定される。

(4) 調査の成果

① 弥生時代後期~古墳時代初頭の時期では、鹿田遺跡の中で最も遺構密度が高い居住域が、第1次調査地点~ 第2次調査地点に広がる。本地点は、その居住域につながる微高地が南に張り出す端部にあたる。検出遺構は、 微高地の縁辺部を巡るたわみ部分に溝と井戸が、微高地部に土坑が点在するのみであり、居住域の広がりは考え にくい。そうした微高地端部に形成された井戸の性格については、今後検討する必要があろう。

鹿田遺跡で中心となる微高地端部付近の調査成果は、集落の全体像を考える上で重要なデータであり、岡山平 野南端部付近における弥生時代の集落構造を理解する上でも貴重である。

② 古代後半(11世紀代)に属する遺構の広がりは、これまで本調査区の南側に位置する第14次調査地点のほかには、第5次調査地点付近にわずかに認められるのみであった。本地点の資料は、次項で述べる防火水槽設置地点の成果もあわせて、本地点周辺が同時期における集落の中心的位置にあった可能性を強く示すこととなった。居住域(屋敷地)の選地における時期的変遷を考える上で良好なデータの追加として評価される。

また、屋敷地の区画に関するデータも注目される。本地点は、鹿田キャンパス内の西側地域に位置する第7次調査・第17次調査の東方の並びにあたる。同調査地点の南端部で検出された東西方向の溝のラインは、本調査地点の東西方向の溝(SD12)にほぼ一致しており、屋敷地を区画する溝が鹿田キャンパス全域におよぶ広い範囲を対象として整備されるという予測を裏付けることとなった。さらに屋敷地の推移に関しても、これまでの予察を補強することができた。また、居住域としての土地利用が中世後半~近世初頭まで継続することを示すデータの増加は、その確実性を高めることとなった。

③ あらたな知見としては、近世後半の状況があげられる。近世前半には、弥生時代以降継続してきた居住域が耕作地に変化し近代に至ると考えられていた鹿田遺跡であったが、本地点では、近世後半における居住域の存在を確認することとなった。調査区のほぼ中央部に、中世の包含層を掘削した土を盛り上げることで土地造成を行い、屋敷地を構築している。防火水槽のデータを考えあわせると、そのために行った土地の改変は、かなり大がかりなものであったことは明らかである。詳細な時期に関しては、今後の検討課題であるが、同時期に行われた土地利用の変化に注目していきたい。 (山本悦世)

C. 防火水槽設置地点:18b地点

(1) 調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学鹿田キャンパス東端の東門付近、新築なった病棟の東側に所在する。隣接の調査区としては、共同溝地点(鹿田遺跡第10次調査)が北西に約10m、病棟Ⅱ期工事地点(第14次調査)が西に約12m、中央診療棟厨房跡地点(第18次調査)が北北西に約45mの距離で位置する。調査用に設定した鹿田地区構内座標において、本調査地点はCG~CI9~10区に該当する。

(2) 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

医学部附属の南病棟の新築にあわせ、同所周辺の整備が2007年度に計画された。その一環において、防火水槽が病棟東側の、東門付近に設置されることとなった。防火水槽設置のためには、約40㎡の範囲を、現地表面より4mほど掘削する工事が必要とされた。当該地点は、周知の遺跡である鹿田遺跡の範囲内であり、これまでの調査成果から当該地点にも遺構・遺物の存在が予想されたため、事前の発掘調査を実施することとなった。調査面積は、43.2㎡(7.2×6.0m)である。防火水槽工事時の掘削が深くなる都合から、調査区四周は発掘調査前の時点で矢板によって囲まれることとなった。調査は、調査研究員1名が担当することとなった。

調査の経過

表土掘削は、2007年10月15日に実施した。発掘調査は、翌日の10月16日に開始し、最終的に調査が終了したのは11月1日となる。

調査開始前に、本調査地点の北側と東側において実施した立会調査(ガス管埋設)では、中世段階の井戸(または土壙墓)や溝が検出されていた。こうした遺構は、鹿田遺跡において通有なものであり、本調査地点にも同

様の遺構および包含層が広がることが調査前に想定された。

このように、中世集落域の存在を想定しつつ表土剥ぎを行い、調査を開始したが、側溝を整備する中で、周囲の立会調査で確認した包含層とは異なる土層が調査区の大部分において厚く堆積することが判明した。この土層については、近世瓦を含むことと、想定した標高から中世以前の包含層が検出されないこと、そして土質から、近世段階の河道埋土と推定した。河道埋土の面的広がりと深度を把握するため、側溝幅を拡張しながら調査を行った結果、調査区北辺において河道の北肩と護岸と考えられる横木を検出した(10月17日)。翌日からは、河道内の規模・構造を確認することをめざした。側溝箇所のみを深く掘削することは困難であったため、平面的な掘削と側溝を下げる作業を繰り返した。なお、瓦を主体とする河道内遺物の多くは、河道斜面直上にみられたため、河道埋土の上層の掘り下げについては手掘りとともに重機も併用した。調査4日目(10月22日)には、調査区南辺の側溝において、本調査区でもっとも河道が深くなる箇所を確認した。10月23日以降、河道埋土の掘り下げを継続し、北岸の護岸施設等の構造について調査を行った。25日には、近世の全体写真を撮影した。

北岸斜面の調査中、炭層と古代後半の土器が集中する箇所の存在が注意された。河道の形成時期が古代後半まで遡る可能性も考慮しつつ、10月26日からこの土器・炭層集中箇所の調査をした結果、土器および炭層は、河道に上半部が削平されるかたちで残存していた古代後半の井戸と土坑に伴うものであることが判明した。

井戸の調査とあわせて、北壁において河道により掘削されることなく残存した近世以前の包含層の調査を実施 し、時期は不明であるがピット1基を検出した。

11月1日に古代後半の全体写真を撮影し、すべての調査を終了した。

(3) 調査概要

a. 層序 (図20)

本調査地点は、近世段階の河道が大部分を占めていた。すなわち、調査区の北辺で河道の北肩が一部検出され、調査区南辺では河道の最深部付近を確認した。そのため、弥生時代~近世段階の通常の包含層については、調査区北辺付近のみで確認される。以下、基本層序と河道埋土の内容について略述する。

基本層序

- 1 層:造成土。主に岡山医科大学が1922 (大正11) 年に現在のキャンパスに移築された際のものである。上面標高は3.3mである。
- 2層:灰色砂質土で、Feをブロック状に含む。調査区全体に広がる土層で、造成がなされる直前の、近代耕作 土と考えられる。上面標高は1.40~1.50mである。
- 3層: 茶褐色砂質土で、2層同様、調査区全体に広がる土層である。近代の耕作土と考えられる。上面標高は1.30~1.40mである。
- 4層:明黄灰色砂質土で、北壁では3層に細分されたがいずれも黄灰色系の色調をなす土層である。この4層上面まで近世河道の肩があがる。上面標高は1,20mである。
- 5層:暗灰褐色~淡灰黒色粘質土で、北壁では二層に細分された。上面標高は0.92mである。出土遺物はない。
- 6層:暗灰黄色粘質土で、上面標高は0.75mである。出土遺物はない。
- 7層:淡灰黄色粘質土である。出土遺物はないが、既往の調査成果によれば、弥生時代の基盤層と考えられる。 上面標高は0.70mである。
- 8層: 青灰黄色粘土である。出土遺物はないが、既往の調査成果を勘案すれば、弥生時代中期より古い無遺物層と考えられる。上面標高は0.58mである。
- 9層:暗灰黒色粘質土である。上面標高は、0.20m前後である。無遺物層と考えられる。

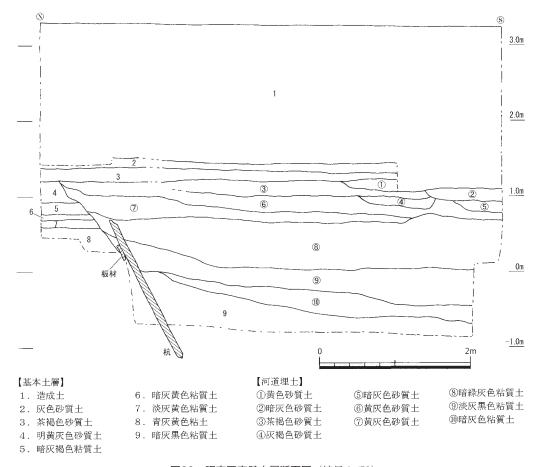


図20 調査区東壁土層断面図 (縮尺 1/50)

河道埋土

河道埋土は、砂質土である上半(① \sim ⑦層)と、粘質土である下半(\otimes \sim @層)とで二大別される。上半は河道を埋め立てる際の土層と考えられる。下半の各層は、微砂 \sim 粗砂を含み、河道が機能していた段階に堆積した土層と考えられる。

b. 遺構と遺物

調査の結果、入り江状を呈する近世河道と、河道斜面において古代後半の井戸・土坑を検出した。以下、時期 ごとに概観する。

古代後半 (図21)

井戸1基(SK1)と土坑1基(SK2)を検出した。井戸上半の南端部が土坑によって切られるかたちとなる。井戸と土坑の上半部は、近世河道によって削平されていた。とくに土坑については、深さ約30cm分しか残存していなかった。

井戸については下半部約1.55mが残存していた。径は検出面で80cm、底面で50cmを測る。平面形は円形と考えられる。井戸の埋土中からは、土師質土器椀の初現段階(11世紀代)のものと考えられる椀や皿など、多くの土器が出土した。井戸の検出面付近(井戸下半部の上層)の埋土は、炭層が約30cmの厚さで堆積する。この土層には焼土塊も含まれており、井戸の埋め戻し時に、火を用いた祭祀がなされたものと考えられる。

この炭層を切るかたちで、土坑の埋土を検出した。遺構の下面は、薄い炭層となる。この土坑の性格について

は、井戸を掘りなおした痕跡の可能性も考慮すべきであるが、井戸の深さに比べて浅いことから、井戸を埋めた後に土坑が隣接して構築されたものと、ここでは判断している。なお、本土坑からも、井戸と同時期の椀・皿が出土した。

他に古代後半の遺構は検出されていないが、こうした井戸・土坑の存在から、本調 査地点の当該期は、居住域であったものと 考えられる。

近世 (図21)

入り江状をなす河道の北岸およびその護 岸施設を、4層上面において検出した。

調査区北辺では、河道の北岸を確認した。 一方、調査区南辺は、河道の底付近にあたる。したがって河道の南北幅は現状で7m (調査区の南北長)以上となり、仮に調査区南辺を川底の中心部付近とするならば、幅は推定で14m前後となるものと考えられる。なお、調査区南半において、南岸へと河道底のレベルが上がる状況は認められな

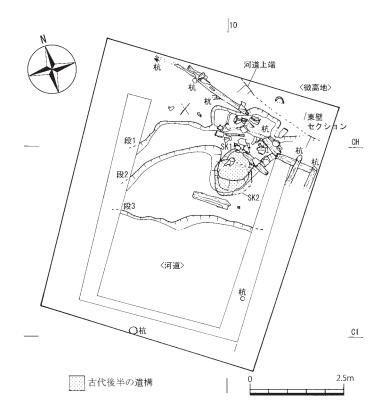


図21 検出遺構全体図(縮尺 1/100)

い。他方、河道西岸については、東から西に向けて河道底面のレベルが緩やかに高くなっていることと、調査区 西方にある第14次調査地点においては、こうした河道が検出されていないことから、本調査区と第14次調査地点 との間に位置するものと考えられる。検出された河道は、現代の鹿田キャンパス東辺に流れる枝川と関連するも のと考えられる。本調査地点は、北から南へと流れる近世段階の枝川が、鹿田キャンパス側へと入り江状に入り 込んだ箇所にあたるものと推定される。河道の深さは、最深部で1.9mを測る。

河道の北斜面は、段状 (3段) を呈するものであり、人為的加工によるものと考えられる。段1と段2の平面 形は、西側になるほど南方向へカーブしている。調査区西壁との対応関係をみると、段2ないし段3については、 西壁南半で一連の段になるものと考えられる。

段2には、幅約1.5m、長さ1.3mの、南に張り出す部分がつくりだされている。この張り出しの前面(南側)には、 長さ約1mの薄い板材が、張り出しに並行する向きで斜面から出土した。また張り出しの向かい(北岸側)は、約0.7 m北側へ段が入り込む構造をなす。こうした張り出しを中心とする構造は、階段としての機能を有していたもの と推測される。なお、張り出しの上面からは、瓦が多く出土している。これらの瓦は、規則的に敷かれた状況を 呈するものではなかったが、段上面を補強する意味合いが存在していた可能性もある。

河道の北岸から斜面にかけては、杭と板材による護岸がなされていた。護岸は横位の板材を斜面上に貼り付け、それらの前面に杭を打ち込むことを基本とする。板材と斜面との間に生じた間隙には、瓦や板小片等が挟みこまれていた。挟み込まれたものの中には、木製杓子もみられた。板材の代わりに、丸太材(転用材)を横たえた部分もみられる。こうした護岸は、階段状をなす部分にも築かれている。構築の先後関係については、階段状の施設が形成された後に、護岸が構築された可能性も考えられるが、時期差を示すような土層の堆積が認められないため、両者は同時に機能していたものと判断される。

杭は、北斜面における護岸のほか、調査区南辺、すなわち河道最深部においても2本確認された。遺存状況の良い南辺中央付近の杭は、全長約2.0m、径約20cmを測るもので、地中に1.1m打ち込まれ、河底から約90cmの高さで上に伸びていた。この杭の先端部加工や大きさ等が、北斜面の杭と類似しているため、両者は同時期の所産と推定される。こうした河道最深部の杭は、護岸とは別の機能を果たしていたものと考えられる。ひとつの推定としては、舟を繋ぐための杭としての機能が挙げられる。

河道からは、底面を中心に近世の瓦や陶磁器が出土した。河道の形成時期については、河道が平安時代末の井戸を削平していることから、平安時代末以降となるが、河道内出土遺物が近世に限定されることから、近世段階に位置づけうる。北斜面の張り出し状を呈する箇所の近辺からは、平安時代末ごろの土器片が出土しているが、これらは前述の井戸・土坑に伴うものである。

以上、本調査地点において検出された河道は、北斜面における段および護岸施設の存在から、近世段階に入り 江として人為的に整備がなされたものと考えられる。こうした入り江の機能としては、調査区南辺の杭の存在から推定したように、船着き場を想定することができる。その場合、張り出しを含む階段状をなす箇所は、舟に関する乗り降りに使用された可能性がある。本調査と同時期になされた鹿田遺跡第18次調査18 a 地点(中央診療棟地点)では、近世段階の集落域が確認されており、入り江状遺構との関連性が注目される。

なお、北壁において4層中よりピット1基を確認した。また、次の近代段階には、河道は埋め立てられ、耕作 地となったことが土層から明らかとなった。

(4) まとめ

本調査によって明らかにしたことを以下に列挙し、まとめとしたい。

- ①古代後半の遺構として、井戸1基と土坑1基を検出した。いずれも近世河道によって上半部を削平されていた。これら遺構の存在により、本調査地点が当該期に集落域の一部であったことが明らかとなった。
- ②近世段階には、入り江状遺構および護岸施設を検出した。当時、現在の枝川にあたる川が鹿田キャンパス側に入り込んでいたものと考えられる。こうした入り江状遺構は、船着き場として機能していたことが想定される。

(光本)

D. 用水路改修地点:18c地点

(1) 調査地点の位置

調査地点は鹿田地区の東辺を流れる枝川用水が本流と支流に分岐する地点にあたり、2条の水路に挟まれた幅約5m強の道路部分である(図15-18c地点)。鹿田地区に設定している構内座標では、CM~CN9・10、CO10・11区にあたる。鹿田地区構内における近隣調査地点には、北西に病棟Ⅱ期(鹿田遺跡第14次調査)、南西に医療技術短期大学部校舎(同第3次調査)、附属病院共同溝(同第10次調査)があり、第14次調査では弥生~古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝、近世のため池・土坑などが、第3次調査地点では中世の集落、古代の河道と橋脚が確認されている。

(2) 調査に至る経緯と調査の経過

調査に至る経緯

岡山大学鹿田地区では、病棟の開設にあわせ、周辺環境整備を実施している。その一環として、2007年に病棟へのアクセスを円滑にするため、病院への通路部分となる鹿田地区の東辺を南流する枝川用水の流路地中化が計画された。枝川用水の流路地中化にあたっては、流路内に箱型躯体を埋設するため、既設の護岸ならびに市道の一部を掘削することが必要となる。これらの範囲はいずれも岡山大学敷地外の掘削であったが、岡山大学の敷地

に隣接していること、岡山大学鹿田地区の発掘調査は長く当センターが実施しており、データが蓄積されていることなどから、岡山市教育委員会の指導により、当センターが調査を実施することとなった。なお、面的な調査が可能な市道部分は発掘調査とし、護岸部分は壁面観察を中心とした立会調査とした。発掘調査面積は56㎡であり、調査員1名が発掘調査にあたった。

調査の経過

発掘調査に先立ち、2007年12月25日から造成土の除去を開始し、翌26日に完了した。発掘調査は12月27日から着手した。まず土層の堆積状況を確認するため、調査区北半の東西辺に沿う、長さ約4m、幅約0.8mの範囲を深さ約1mで先行して掘削した。本地点の北約30mで実施した鹿田遺跡第18次調査18b地点(防火水槽地点)の調査において、近世の河道が東から西へ入り込んでいる状況が確認されており、本調査区にも河道や谷のような低地が連続することが予測されたためである。しかし、河道や谷などの低湿地性の堆積物は確認されず、下層にいたるまで比較的安定した微高地状の堆積を示していることが判明した。また、遺構・遺物は稀薄で、断面観察用の土手においても、数基の近世土坑や中世段階の溝やわずかな窪みを確認するにとどまった。そこで、断面観察で中世段階の遺構が確認できた6層および弥生時代の基盤層と考えられる11層上面で遺構検出を実施した。その結果、中世段階では南北方向の溝と道路状遺構の可能性も考えられる小溝群を、11層上面では土坑2基を確認した。

11層上面での調査および調査区周辺に設定した土層観察用の土手の掘削を終え、2008年1月16日に発掘調査を終了した。

(3) 調査の概要

a. 層序 (図22)

本調査区では以下の土層の堆積を確認した。以下に各層の特徴を示す。なお、遺物の出土は僅少であり、各土層の所属時期を決し難い状況であった。以下に記す土層の時期は遺物の出土がみられた土層との上下関係や、周辺調査区の土層と比較のうえに推定したものを含んでいる。

1層:造成土である。本調査区は岡山大学鹿田地区の敷地外に位置する調査区であり、鹿田地区構内でみられる 真砂土やバラス主体の造成土とは異なる。道路敷きの下部構造となる造成土のため、均質な砂質土が厚く堆積し ている。近・現代の造成土である。

2層:淡青灰色弱粘質土である。砂粒は均質で、鉄分を若干含む。上面の標高は約1.4mである。近代の土層と考えられる。

3層:明橙茶褐色砂質土である。上面には鉄分の沈着が著しい。上面の標高は約1.35mである。近世の土層と考えられる

4層:2層に細分される。a層は明橙灰茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集も顕著である。中世のものとみられる土器小片を含む。上面の標高は約1.3mである。b層は橙茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集もみられる。土器小片を含む。

5層: 明橙灰褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集も顕著である。上面の標高は約 $1.1\sim1.2$ mである。

6層: 灰茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集も顕著である。中世土器小片を含む。上面の標高は約1.0~1.05mである。南北方向の溝群が掘削されている。中世の土層である。

7層:明橙褐色砂質土である。上面には鉄分の沈着が著しい。マンガン粒の凝集も顕著である。上面の標高は約0.95mである。道路状遺構を構成すると考えられる浅い掘り込みが掘削されている。

8層: 2層に細分される。 a層は暗灰褐色砂質土である。鉄分の沈着がみられ、マンガン粒の凝集は顕著である。

上面の標高は約0.9mである。 b層は暗黄灰~暗灰褐色砂質土である。鉄分の沈着は少なく、マンガン粒の凝集も少ない。明黄色砂質土ブロックが多量に混じる。

9層:淡灰白色弱粘質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集もみられる。上面の標高は約0.75~0.8mである。

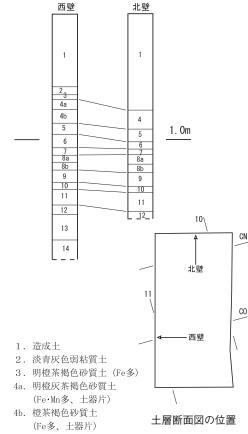
10層:暗灰褐色粘質土である。鉄分の沈着が顕著にみられ、マンガン粒の凝集もみられる。上面の標高は約0.65 mである。遺物は出土していないが、土質や色調等から本調査区の北西約20mに位置する第14次調査(病棟Ⅱ期)地点の8層に対応し¹)、弥生時代後期の土層と考えられる。本層下層の検出遺構は埋土の色調等から、本層から掘削されていると考えられる。これらの遺構からも遺物の出土はないが、弥生時代の遺構であると推測される。

11層:淡黄明緑灰色粘質土である。鉄分の沈着が顕著 にみられ、マンガン粒の凝集もみられる。遺物は出土し ていない。上面の標高は約0.6mである。

12層:暗緑灰褐色粘質土である。鉄分の沈着、マンガンの凝集が観察されるが、顕著ではない。上面の標高は約0.4~0.5mである。無遺物層である。

13層:明緑灰色粘土である。鉄分の沈着はあまりみられず、マンガンの凝集はみられない。粘性強い。上面の標高は約0.3~0.4mである。無遺物層である。

14層:暗緑灰褐色強粘土である。鉄分、マンガン等の鉱物の凝着はみられない。粘性が強く、湿地状の堆積物の可能性がある。上面の標高は約0.15~0.3mである。無遺物層である。



- 5. 明橙灰褐色砂質土 (Fe·Mn多)
- 6. 灰茶褐色砂質土(Fe·Mn多、中世土器片)
- 7. 明橙褐色砂質土 (Fe·Mn多)
- 8a. 暗灰褐色砂質土 (Fe、Mn多)
- 8b. 暗黄灰~暗灰褐色砂質土 (明黄色砂質土ブロック多)
- 9. 淡灰白色弱粘質土 (Fe多)
- 10. 暗灰褐色粘質土 (Fe多)
- 11. 淡黄明緑灰色粘質土 (Fe多)
- 12. 暗緑灰褐色粘質土
- 13. 明緑灰色粘土
- 14. 暗緑灰褐色強粘土

図22 調査区土層柱状図 (縮尺 1/30)

4層~8a層は灰茶褐色系の色調を呈する砂質土層で

あり、ほとんどの層において鉄分の沈着やマンガンの凝集が顕著に認められることから、耕作地として利用されていたことが推測される。遺物が出土していないため、時期は不明だが、直下の8b層は明黄色砂質土ブロックを多く含んでおり、中世以前の段階で本調査区一帯を耕作地として利用する際の造成土とも考えられる。

11層~14層は緑灰色系の色調を呈する粘質~粘土であり、特に13・14層は粘性が非常に強いものである。11層 以下は弥生時代後期以前の湿地状堆積物と考えられる。

b. 遺構・遺物

弥生時代 (図23)

11層上面で土坑 2 基を検出した。上位の10層は第14次調査(病棟 II 期)地点の 8 層に対応しているとみられるため、10層は弥生時代にあたると考えられる。11層の遺構は埋土の色調等から、10層から掘削されているものと考えられ、遺物の出土はなかったが、弥生時代の遺構であると推測される。

土坑1 調査区南東で検出した長軸長約2.6m、幅約1m、深さ約0.3mの不整形な長楕円形の土坑である。土坑の長軸は北東-南西方向である。土坑の掘り方は、直線的な掘削で急角度に立ち上がる。また、土坑の中心部が一段深く掘りこまれ、二段掘り状を呈している。埋土は暗褐色土系粘質~粘土であるが、最下層の暗灰褐色粘土の底面付近では植物遺体が顕著に含まれる。貯蔵穴の機能を有する土坑であった可能性も考えられる。

土坑2 調査区北側で検出した径約0.9m、深さ約0.15mの浅い土坑である。平面形は不整形な長楕円形である。底面には凹凸があり、波打った状態である。また、立ち上がりの角度は緩い。遺物の出土はなく、人為的な掘削によるものではない可能性もある。

中世 (図24)

中世の遺構は6層から掘り込まれた溝3条、7層から掘削された、道路状遺構と考えられる並行する浅い 小溝群を確認した。

溝1~3 南北方向の溝が調査区東半に並行して掘削されている。これらはいずれも切りあい関係を有しており、中央の溝がもっとも古く、その後、両側の溝が掘削されている。いずれの溝からも中世の土師器小片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

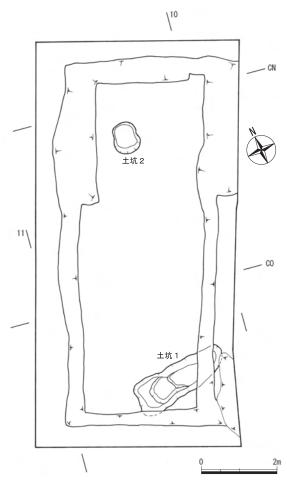


図23 弥生時代遺構全体図 (縮尺 1/100)

調査区北西では、長さ約2 m、幅約0.3~0.5 m、深さ約0.1~0.15 mの東西方向の浅い溝が並行して掘削される。いずれも7層から掘削された浅い溝である。このような多条の浅く、短い溝が並行する遺構については、道路状遺構の下部構造と考えられている 2)。これが道路状遺構の下部構造であるとすれば、南北方向の道路状遺構ということになり、この調査区で確認した溝と道路状遺構はいずれも南北方向の区画を明示する遺構となる。なお、道路状遺構・溝2は現在も鹿田地区周辺で確認される土地区画の方向に合致しているのに対し、溝3はそれよりも北で東に振れていることには注意が必要である。いずれにせよ小規模な調査であり、これ以上区画のひろがりや方位の問題に言及できないが、この調査区付近の南北方向の区画についても今後検討していかなければならない。

(4) まとめ

本調査区は小規模なものであったが、地形や遺構の広がりについて新たな知見を得ることができた。

まず、岡山大学鹿田地区の南東側で微高地状の安定した土地の広がりの範囲を確認できたことがある。本調査区の北西約20mに位置する第14次調査(病棟Ⅱ期)の土層と比較すると、対応するとみられる土層の上面の標高は本調査区にむかって緩やかに下るものの、低湿地状の堆積物は観察されず、比較的安定した状態を示すものであった。また、本調査区の北約30mの位置にある第18次調査 b 点(防火水槽地点)では、近世の河道が東から西

に入り込む状況であったが、その後実施した現在の枝川東岸護岸の掘削工事では、本調査区より北へ約20m程度は安定的な土層の堆積状況を確認できた。 b 地点の近世河道がどのように走向するか、現在の枝川の流路が開削された時期がいつなのかという問題もあり、今後、鹿田地区東側の地形復原のためのデータを蓄積・検討する必要があろう。

中世段階には溝や道路状遺構による南北方向を指向 する遺構が確認された。これらの遺構が区画を明示す るものか否かについても今後のデータの蓄積と検討が 必要となる。本調査区周辺では、現在の枝川東岸より もさらに東に微高地が広がる可能性があることから、 遺構の広がりについても考慮していかなければならな いだろう。

なお、本概報は現時点での暫定的なものであり、正式な内容は今後の整理・検討を経て刊行する報告書によるものとする。 (野崎)

註

- 1) 岩崎志保2004「鹿田遺跡第14次調査」『岡山大学埋蔵文 化財調査研究センター 紀要2003』pp.21-25
- 2) 光本順2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変 遷」『津島岡大遺跡15』pp.79-86

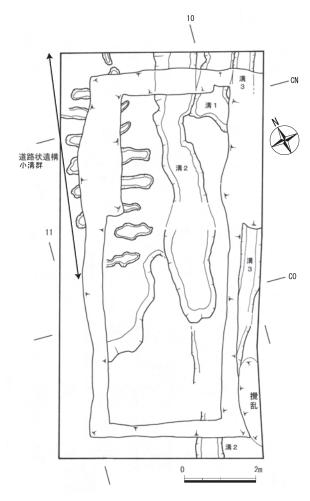


図24 中世遺構全体図 (縮尺 1/100)

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

鹿田地区における2007年度の立会調査は31件を数える。2006年度のそれが5件であったのに比べて、件数は大きく増加した。その要因としては、南病棟の完成に伴う周辺整備と、中央診療棟の新営に関連する掘削が計画されたことが挙げられる。この2つの工事では、掘削深度が大きく、中世層以下の包含層・遺構が確認できる箇所があった。病棟関連では、基幹環境整備(道路等)工事<調査番号4>、環境整備(道路等)工事<調査番号11・17>、用水路改修工事<調査番号28>がそれに該当する。中央診療棟新営に関連する工事では、中央診療棟屋上防水改修その他工事<調査番号5>、中央診療棟新営工事(ガス配管切断工事)<調査番号7>が挙げられる。また上記以外の工事でも、中世遺構および弥生時代の遺物を確認した高エネルギー治療室改修工事<調査番号30>をはじめ、他2件の立会調査において良好なデータを得た。

以下では、中世層以下の包含層・遺構を確認した調査地点について報告する。 (光本)

2. 基幹環境整備(道路等)工事: CC13~20、CD13~20区<調査番号4>

(1) 調査地点の位置と経過

本調査は、新築なった病棟の配管工事に伴う立会調査である。管路は、病棟の北辺に設置されるもので、発掘調査範囲(第11次・第14次調査地点)におさまる汚水配管と、その北側の雨水配管からなる(図25)。掘削予定深度は汚水配管が深く(地表より約2m)、雨水配管が浅い(約1.2m)計画となった。深い掘削を伴う汚水配管については、病棟北東部の桝Hと病棟から離れる桝Iを除き、桝・管路ともに病棟の発掘調査範囲内に可能な限り収まるように協議を重ねたうえで、掘削が実施されることとなった。

立会調査は2007年8月1日・2日・6日~10日・20日~22日・24日に実施した。掘削は汚水配管の桝Aから実施された。当初の予定通り、桝Aの北壁付近に第14次調査時の矢板痕跡が認められ、汚水配管が発掘調査区内に位置することを確認した。しかしながら、隣接する桝B・Cを同時に掘削するに際し、桝C箇所に近代以下の包含層が残存していることが判明した。その後、桝C - D間の管路の掘削によって、少なくとも、桝Cから東へ0.2 mの範囲まで包含層が残存していた。この包含層残存部分は、第11次調査と第14次調査の間に位置する。したがって、両調査が年度を違えて実施されたこともあり、両者の間には未調査地が結果的にのこされていた可能性が高まった。

この桝 C付近の立会調査の結果、後述のように中世段階の東西溝とピットが検出された。桝 $D\sim G$ までの区間については、既存調査区内に収まるものであった。病棟の調査区(第14次調査)からはずれる汚水桝 $H\cdot I$ については、包含層が残存しており、中世段階の溝等を確認した。

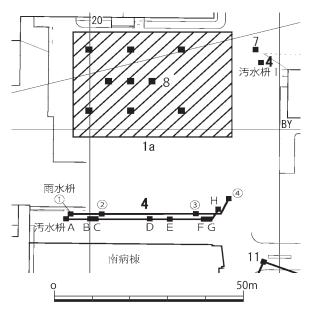
本調査では、汚水桝B・C、H、Iの3箇所、および雨水桝 $1\sim3$ において、包含層の良好な残存と遺構の存在を確認した。以下では、それら地点ごとに成果を概述する。

(2) 汚水桝B·C、雨水桝1~3の調査の成果

汚水桝B・Cは新病棟北辺に位置し、CC19区に位置する。この桝および桝Cから東へ伸びる管路の一部において、中世段階の溝・ピットを確認した。また、汚水桝B・Cの北辺に隣接する雨水桝2、およびそれより約5m西方の雨水桝1、そして約25m東方の雨水桝3では、掘削深度が地表より1.1~1.3mであったが、当該汚水桝で確認された溝1と類似する土層が確認された。その成果も合わせて以下で報告する。

a. 層序 (図26·27)

1層は造成土で、上面標高2.50mを測る。2層は 青灰色粘土で上面標高1.55m、3層は青灰色粘質土 で上面標高1.47mとなり、ともに近代の耕作土と考 えられる。4層は暗茶灰褐色土で上面標高1.41m、 5層は暗茶灰褐色粘質土で上面標高1.10~1.20mを 測り、中世段階の土層と考えられる。4層上面から 溝とピットが掘りこまれている。6層は黄灰褐色粘



番号は表1の調査番号に対応 太字4:本調査地点

図25 調査地点の位置(縮尺1/1,000)

質土で、上面標高0.94~1.05mを測る。古墳時代の包含層の可能性がある。7層は暗灰色粘土で上面標高0.88mとなる。この土層は北側に向かって落ちをなす。8層は暗茶灰色粘土で、7層によって北半が切られている。上面標高は0.61~0.80mを測る。9層は淡黄灰白色粘土で上面標高0.60~0.70mとなり、弥生時代の基盤層と考えられる。

b. 遺構と遺物 (図26)

4層上面において、溝1条とピット3基を確認した。

溝1 上面標高は1.41m、深さは0.62mを測る。桝C - D間の管路の調査では、包含層が残存していた東西に約0.2 mの範囲ではあるが、本溝の南側の肩を確認している。溝の北に隣接する雨水桝2では、標高1.1~1.37mの範囲で確認された暗青灰色粘質土中に、中世土器片が多く含まれていた。この雨水桝2の土層もまた、位置と土質、検出レベルからみて、本溝の埋土と考えられる。同様に、雨水桝1で標高1.2~1.4mの範囲、および雨水桝3で標高1.03~1.3m(上面は既設埋土により削平)に堆積する暗青灰色粘質土においても、中世土器小片を多く含むものであり、これらも本溝の埋土の可能性が高い。したがって、平面調査と壁面観察から、本溝は鹿田地区調査グリッドのCCライン付近に東西方向にのびるものと整理することができる。溝の長さは、雨水桝1~3までの距離で33mを測る。溝の幅については定かではないが、雨水桝1~3において北側の肩が平面的に確認されなかったことから、現状で1.6m(溝の南肩~雨水桝2の北辺までの幅)以上の幅を有するものと推定しうる。

埋土中からは、遺物が2袋分出土した。13世紀末~14世紀初頭頃の高台付土師質土器片が多く出土したほか、 青磁・白磁の破片が出土した¹⁾。

図26-1~3は、土師質土器椀である。 1は、口縁 1/2 が残存し、口径13.0cm、底部径6.2cm、器高4.0cmを測る。 2は、口縁 1/3 が残存しており、復元口径12.8cm、復元底部径5.0cm、器高4.3cmを測る。 3は、口縁 1/4 が残存し、復元口径13.3cm、器高は現存長で3.2cmを測る。いずれも、内外面とも灰白色をなす。

輸入陶磁器としては、青磁杯 1 点、青磁皿 1 点、白磁皿 1 点が出土している。4 は、龍泉窯系青磁杯 (Ⅲ類)である。 1/4 が残存しており、復元口径12.2cm、復元底部径5.8cm、器高4.0cmを測る。胎土は灰白色をなす。緑灰色の釉が厚く施されており、畳付のみ、掻き取りがなされる。内面には、蓮弁文が描かれる。13世紀後半頃に相当とする。5 は、白磁皿 (Ⅳ類) である。1/4 が残存しており、復元口径11.3cm、復元底部径8.0cm、器高1.9cmを測る。胎土は灰白色をなす。全体に薄く均質に施釉(淡緑灰色)されており、底面の一部が露胎となる。口縁部は口禿げとなり、淡茶灰色を呈する。13世紀後半頃に相当とする。6 は、同安窯系青磁皿の小片で、内面に貫入がみられる。釉は淡オリーブ色を呈し、厚めに施される。

瓦も1点出土している (7)。須恵質の平瓦で、内面に菱形タタキ痕がみられる。胎土は細砂が均質に含まれ、色調は灰白色をなす。

本溝と同様にCCライン付近に東西にのびる溝は、第11次・14次調査次では調査範囲からわずかに外れていたため、確認されていなかった。一方、本溝と同じラインに位置する、附属病院液酸タンク設置に伴う立会調査 (1995年度実施)では、方向については不明であるが、中世段階の溝が発見されている 2)。そのうち、「溝1」と報告されている遺構は、上面標高1.30m、深さ0.42mを測り、本溝よりもやや浅い印象はあるものの、標高という点では比較的近い。いずれにせよ、厳密な対応関係については判然としないが、本溝の発見によってCCライン付近に中世段階の区画が存在した可能性が高まったものと考えられる。

こうした区画は、中世鹿田遺跡の集落構造に関する研究³⁾を参照すると、同時期の第7次調査地点(医学部基礎研究棟)の東西大形溝から南へ約50mの位置に相当する。また、今後の整理・研究が必要であるが、第9~11・14次調査地点の南辺でみつかった東西溝から北へ約50mの地点にも位置する。したがって、1町をおおよそ2等分した単位によって、屋敷地を南北に区画していた可能性が、今回の調査によって浮かび上がってきたものといえよう。

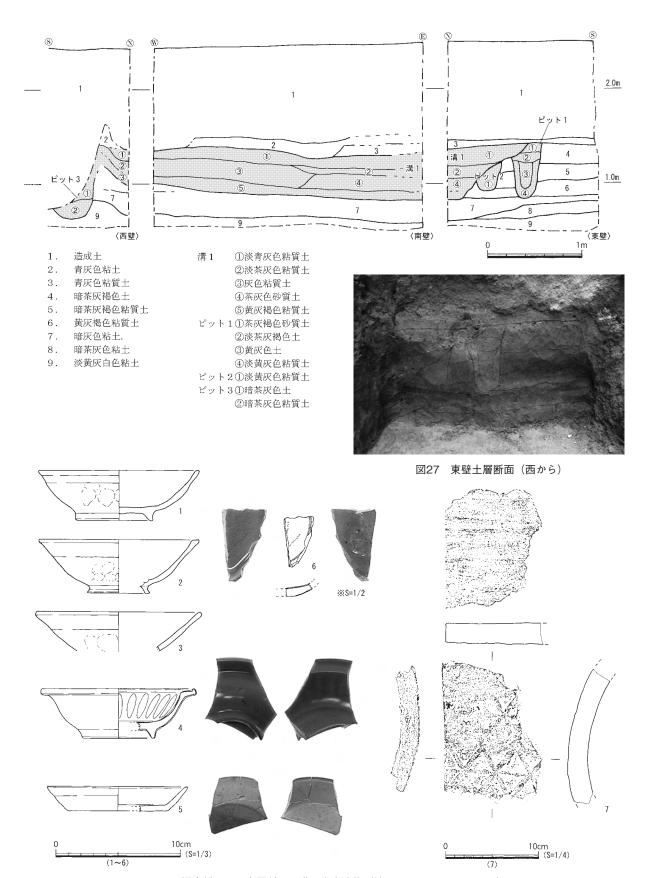


図26 汚水枡B・C土層断面と溝 1 出土遺物 (縮尺 1/40、 1/3 、 1/4)

ピット 東壁で確認したピット $1\cdot 2$ は、黄灰色粘質土からなるとともに、溝 1 によって切られている。ピット 1 は、径0.33 m、深さ0.58 m を 測り、柱痕をのこす。ピット 3 も 溝 1 によって切られたものと考えられる。ピットからは遺物は出土しなかった。第11次・14次調査区北辺では、中世段階のピットが多く検出されており、今回のピットもそれらと一連のものと考えられる。

註

- 1) 土器・輸入陶磁器については、山本悦世・岩崎志保の各氏にご教示いただいた。
- 2) 山本悦世1996「附属病院液酸タンク設置に伴う調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13 1995年度 pp.28-30 岡山 大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 山本悦世2007「中世の集落構造と推移」『鹿田遺跡5』 pp.153-166 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(3) 汚水桝Hの調査成果

汚水桝Hは、第14次調査地点の北東、CC13区に位置する。新病棟から北東にのびる共同溝に並行するかたちで設置された桝である。そのため、掘削域の東側は共同溝構築時の埋土となる。この桝では、中世段階と思われる3条の溝を確認した。

a. 層序 (図28)

1層は造成土で、上面標高は2.53mを測る。2層は緑青灰色粘質土で、上面標高1.30mとなる。近代耕作土と考えられる。3層は、暗灰色粘質土を呈する土層で、溝によって切られているが、現状で上面標高0.64mを測る。3層もまた溝埋土の可能性もある。

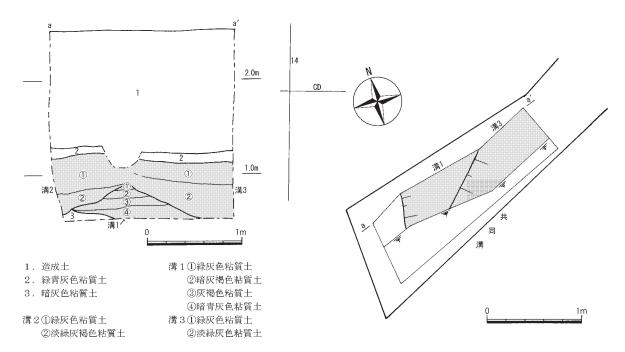


図28 汚水枡H 土層断面図 (縮尺 1 /40)

図29 汚水枡H 3層上面検出遺構平面図(縮尺1/40)

b. 遺構と遺物 (図29)

溝1 鹿田地区調査グリッドに沿って南北方向にのびる溝である。溝2・3によって切られているため、規模については判然としない。埋土は緑灰~灰褐色の粘質土を基本とする。遺物は出土していない。

溝2・3 3層下面において確認された溝 $2\cdot3$ は、上面標高が1.23mとなる。溝2は壁面のみで確認したため、走行方向はわからないが、溝3については、グリッドよりやや東に振れるように見受けられる。この2つの溝は埋土が類似しており(緑灰色粘質土)、明確な切り合い関係は認識しえなかった。溝2からは、中世土器小片が多く出土した。

(4) 汚水枡 I の調査成果

汚水桝 I はBU10区に位置し、他の桝・管路とは離れた箇所にある。掘削の結果、桝の北半は既設の管路によって包含層がすでに失われていたため、桝南半部の調査を行った。

a. 層序 (図30)

各層からは目立った遺物が出土していないため、時期推定については遺構の時期や既往の調査との比較によって行った。

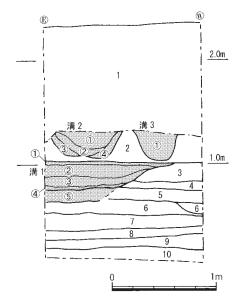
1層は既設の管路に伴う埋土で、上面標高は2.35mを測る。2層は淡灰褐色砂質土で、上面標高1.33mとなる。近代の耕作土と考えられる。2層では2条の小型溝(溝2・3)が確認される。3層は暗灰褐色粘質土で、上面標高1.0mを測る。中世遺物を包含する溝1は、本層の上面から掘りこまれている。4層は黄灰褐色砂質土で、

上面標高0.83mを測る。5層は青灰色粘質土で、湿地状の土質を呈する。上面標高は0.76mとなる。図示した南壁西端では10cmほどの落ちをなす。6層は淡灰色砂質土で、弥生時代の基盤層に類似する。上面標高は0.67mを測る。7層は暗灰色砂質土で上面標高0.53mを測る。8~10層は、淡~暗青灰色粘質土で、しまりが強い土層である。これらの層は谷部や湿地等の土層の可能性がある。上面標高は、8層で0.40mとなる。

b. 遺構と遺物 (図30)

溝1 本溝は中世土器片を含むことから、中世段階の溝の可能性が高い。埋土は黄灰色~灰褐色を基本とする。⑤ 層については、基本土層の5層と類似するが、それと比して色調が暗く、層下面が5層よりも低くなるように観察された。⑤層も含めて本溝を理解すれば、溝の深さは0.40mとなる。溝の底面は平坦である。溝の方向については北壁が既設埋土のため確実ではないが、南北溝である可能性が高いだろう。

溝2・3 近代耕作土を掘り込むかたちとなる溝2・3 は、耕作関連の溝と考えられる。溝3には炭・焼土が含まれていた。遺物については、両溝からは出土していない。



- 1. 既設埋土
- 2. 淡灰褐色砂質上
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 黄灰褐色砂質土
- 5. 青灰色粘質土
- 6. 淡灰色砂質土
- 7. 暗灰色砂質土
- 8. 淡青灰色粘質土
- 9. 暗青灰色粘質土
- 10、暗青灰色粘質土
- 溝1①黄灰色粘質土 ②淡灰褐色粘質土
 - ③灰黄色砂質土
 - ④黄灰色粘質土 ⑤暗青灰色粘質土
- 溝 2 ①青灰色粘質土
 - ②緑灰色粘質土 ③黄灰色砂質土
 - ④淡黄灰色砂質土
- 溝3①褐色粘質土

図30 汚水枡 I 土層断面図 (縮尺 1/40)

(光本)

3. 中央診療棟屋上防水改修その他工事: AS03~07、AV~AX07、AY·BB09区<調査番号5>

(1) 調査地点の位置と経過

本立会調査は、中診棟屋上防水改修工事として、旧混合病棟(現在は平地の駐車場)の周辺における既設ガス管・排水管改修工事に伴って、8月6日~9日に実施したものである。そのうち、中世以前の包含層を確認したのは、2箇所あるガス管切り替え部分のうちのひとつである。

このガス管掘削地点は、旧混合病棟の南西隅に位置する(図31)。BB09区である。1.8m四方を、地表下1.8mまで枡状に掘削されたもので、調査区南半は既設埋土によって占められていたが、北半については包含層と遺構埋土を確認することができた。

太字 5:本調査地点 (矢印は断面位置)

図31 調査地点の位置(縮尺1/1,000)

(2) 調査の成果

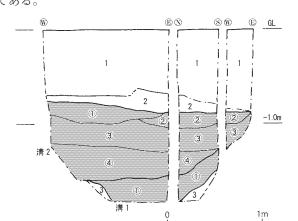
a. 層序 (図32)

1層は既設ガス管の埋土である。2層は茶褐色砂質土である。 通常の近代耕作土とは異なり、近現代の最堆積土の可能 性も存在する。2層下面より下は遺構埋土が続き、調査 区底面付近において黄褐色砂質土(3層)を確認した。 しまりが強く、弥生時代の基盤層の可能性がある。

b. 遺構と遺物 (図32)

溝1 古墳時代初頭頃の土師器片を含む溝である。上面は、溝2によって切られている。埋土は暗茶褐色砂質土となる。溝の方向については確実ではないが、北壁と東壁で溝の上がりが確認できることから、鹿田地区の調査グリッドを基準にすると、それにやや斜交し、北東 - 南西方向にのびる可能性がある。

溝2 中世土器片を含む溝である。溝の深さは0.83m となる。溝を最後に覆った土層である①層は、淡黒灰色 砂質土で焼土と炭を多く含む。溝の方向については、東



- 1. 既設工事埋土
- 溝2①淡黒灰色砂質土(焼土・炭多)
- 2. 暗茶褐色砂質土
- ②淡茶灰色弱粘質土
- 3. 黄褐色砂質土 溝1①暗茶褐色砂質土
- ③黄灰色砂質土 ④黄灰色砂質土

図32 土層断面図 (縮尺 1/40)

壁で溝の上がりが確認されることと、北壁の底面が直線的に西へとのびることから、鹿田地区の調査グリッドに沿った東西方向の可能性が考えられる。 (光本)

4. 環境整備 (道路等) 工事: ガス配管 1 CG08、CF09・10、CG・CH11、CI11区<調査番号11>

(1) 調査地点の位置と経過

新病棟の新営に伴い、周辺環境整備の一環として、ガス管の切り替え・埋設工事が実施された。調査地点は新病棟東側で、当該年度に発掘調査を実施することとなった防火水槽地点(第18次調査)の北辺・西辺をL字上に囲むような位置関係となる(図33)。

立会調査は10月2日・3日に実施した。管路は0.8~1.0mほどの深度であり、造成土中あるいは近代層までの掘削の範疇におさまった。一方、配管がL字に屈曲する箇所にあたる管接続部分(A地点)、および北側管路の東半部(B地点)では、約1.3mの深さを掘削することとなった。このA地点および・B地点において、中世の包含層と複数の遺構を確認した。なお、平面において検出した遺構については、上部に枡等の重い構造物が設置されないことから、埋土の掘り下げを行わず現状保存することとし、上面を砂(約30cmの厚さ)で覆った上で埋め戻しを行っている。

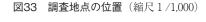
番号は表2の調査番号に対応 太字11:本調査地点

(2) 調査の成果

A地点

a. 層序(図34)

1層は造成土で、上面標高は2.35mを測る。2層 は青灰色粘質土で、近代耕作土と考えられる。上面 標高は1.01mとなる。3~5層は、b-b´断面に おいて5層(淡灰色砂質土)が畦畔状を呈し、その 両側に耕作土と考えられる3層(黄灰色砂質土)・ 4層(淡青灰色砂質土)が堆積する。これらの上面 標高は5層上面において0.98mとなる。3層上面か らは近世土坑と考えられる土坑2を確認した。6層 (淡灰色砂質土):7層(淡黄灰色~淡緑灰色砂質土) もまた、堆積状況から耕作土と畦畔の関係となる可 能性がある。上面標高は7層上面で0.92mを測る。 こうした3~7層の時期については、出土遺物がみ られなかったため判然としないが、中・近世段階と 想定される。8層は淡緑灰~黄灰色砂質土で上面標 高は0.79mを測る。9層は淡黄灰色砂質土で、上面 標高は0.71mとなる。本層の上面からは、土坑1や ピットを検出した。



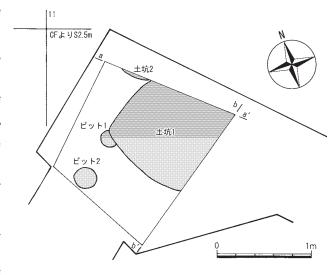
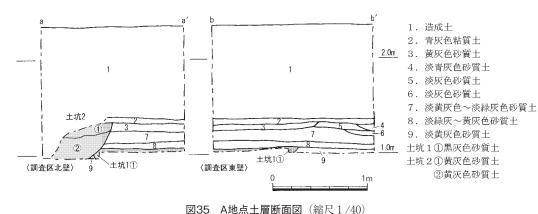


図34 A地点検出遺構平面図 (縮尺 1/40)



b. 遺構と遺物 (図34·35)

中世の土坑1基とピット2基、近世の土坑1基を確認した。

土坑1 調査区の北東コーナーの9層上面において検出した。発見されたのは全体形の1/4ほどと考えられる。平面形は方形を呈する。埋土は黒灰色砂質土であり、炭と中世土器小片を多く含む。平面形から、井戸または土壙墓の可能性が想定される。

ピット 9層上面の平面調査において、2基のピットを検出した。ピット1は径0.17m、ピット2は径0.22mを測る。

土坑2 3層上面から掘りこまれた土坑であり、a-a´断面付近に位置する。埋土は黄灰色砂質土となる。 出土遺物はないが、近世土坑の範疇と考えられる。

B地点

a. 層序 (図36)

掘削地点は大きな撹乱を受けておらず、四周の壁面および平面を観察することができた。

1層は造成土で、上面標高は2.53mを測る。2層は茶灰色砂質土で1.60m、3層は淡青灰色砂質土で1.49mを測る。2・3層は土質から近代耕作土と考えられる。4層は淡茶灰色砂質土で、上面標高は1.40mを測る。5層は黄灰色砂質土で、上面標高1.30mとなる。5層上面から中世溝が掘りこまれており、とくに溝1によって5層の多くは失われている。6層は淡黄褐色砂質土で上面標高1.18mを測る。褐色系をなす色調が特徴的であり、中世~古墳時代ごろの土層であろう。

b. 遺構と遺物 (図36)

遺構は、断面で確認された溝2条のほかに、平面調査でピット3基を検出した。遺物は、中世と考えられる土器の小片が出土したのみである。

溝1 5層上面から掘りこまれた、浅い溝状遺構である。埋土は暗灰色砂質土となるが、これは溝2の①層と類似する。そのため、溝同士の明瞭な切りあい関係は確認できなかった。北壁・南壁ともに同様の土層の堆積が認められた。埋土には中世土器小片が含まれており、埋没時期を示すものと考えられる。

溝2 段掘りを呈する溝で、幅0.68m、深さ0.23mを測る。5層上面から掘りこまれている。北壁・南壁と、プランにおいて、南北方向にのびる溝であることを確認した。本溝は中世土器小片を含むため、中世段階のものと考えられる。

ピット 掘削後の6層の平面調査によって、3基のピットを検出した。埋土は、いずれも暗黒灰色粘質土である。1基は径0.4m、のこりは径0.2mとなる。 (光本)

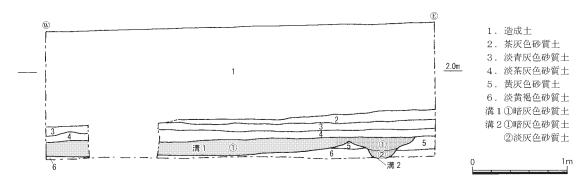


図36 B地点土層断面図(縮尺 1/40)

5. 用水路改修工事: CI7~CP12区<調查番号28>

(1) 調査地点の位置と調査の経過

鹿田地区では、南病棟の開設にあわせ、周辺環境整備を実施している。その一環として、南病棟へのアクセスを円滑にする通路整備のため、鹿田地区の東辺を南流する枝川用水の流路地中化と護岸改修が計画された。計画範囲は鹿田遺跡に接するものであり、岡山市教育委員会の指導により、当センターが掘削を要する範囲の発掘調査を実施することとなった。対象地区は、南流してきた枝川が2条に分岐する位置にあたる。分岐点以南の流路に挟まれた部分は市道である。そこで面的な調査が可能な市道中心部についてはなるべく広く発掘し(鹿田遺跡第18次調査c地点)、護岸部分については壁面観察を中心とした立会調査とした。

立会調査地点は、枝川分岐点以南の護岸部分(A地点)、分岐点以北の枝川東岸部分(B地点)である(図37)。A地点では、護岸が発掘調査範囲の周囲まで迫り、西・北側では包含層はほとんどのこされていなかった。

また、部分的に包含層が確認された場合も、発掘調査の成果と大過ないものであった。発掘調査範囲の北東にのこされた、枝川本流を狭めるように最大幅約1.5mで張り出した範囲については、コンクリート片等を含む土砂によって形成されたものであった。ここには市道と対岸を結ぶ簡易な橋が架けられており、架橋のために造成したものとみられる。結果としてA地点では包含層はほとんど確認されなかったため、ここでは包含層を確認したB地点の調査結果を報告する。なお、調査は工事の工程に合わせて1月25・28日、2月5・6日、3月6日に実施した。

(2) 調査の成果

a. 層序と地形 (図38·39)

本調査地点では遺物が出土していないため、各層の所属時期は明らかではない。6、7、10層については、第18次調査(c地点)の調査成果を参考に時期を推定した。

1層は近代以降の造成土で、上面の標高は1.7~2.0mである。2層は灰橙茶褐色砂質土で、上面の標高は約1.35~1.4mである。近代の土層と考えられる。3層は灰茶褐色砂質土で、上面の標高は1.25~1.4mである。4層は明橙灰白色砂質土で、上面の標高は約1.15~1.28mである。5層は淡灰白色砂質土で、上面の標高は約1.15mである。3~5層は上下の土層との関係から、中世~近世に属すると推測されるが、各土層の時期は限定できない。

6層は明灰褐色砂質土で、上面の標高は約1.1mである。土質や標高から、第18次調査(c 地点)の6層に対応すると考えられ、中世の堆積層とみられる。7層は淡灰茶褐色砂質土で、上面の標高は0.95~1.0mであり、これも第18次調査 (c 地点)の7層に対応するとみられ、中世層と考えられる。8層は明灰白色砂質土で、上面の標高は0.85~0.9mである。9層は明灰茶褐色砂質土で、上面の標高は約0.8mである。8、9

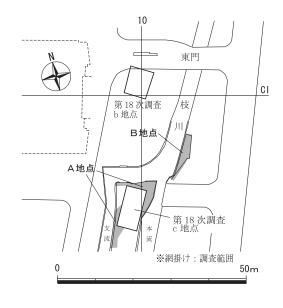


図37 調査地点の位置 (縮尺 1 /1,000)

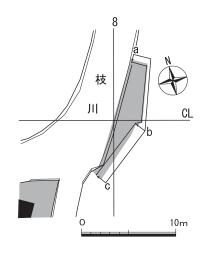


図38 土層断面の位置(縮尺1/400)

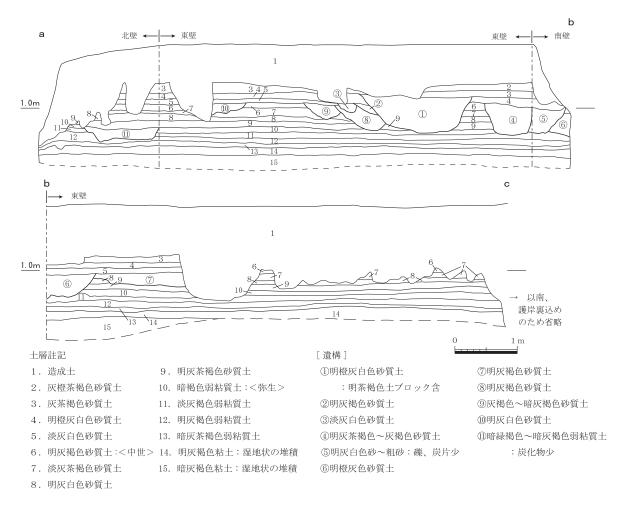


図39 B地点土層断面図(縮尺1/60)

層についても上下の土層との関係からは弥生時代以降中世までに属する土層となるが、遺物が出土していないため、それ以上の時期を限定できない。10層は暗褐色弱粘質土で、上面の標高は約 $0.7\sim0.75$ mである。第18次調査(c地点)の10層に対応していると考えられ、弥生時代の土層とみられる。

11層は淡灰褐色弱粘質土で、上面の標高は約0.6~0.7mである。12層は明灰褐色弱粘質土で、上面の標高は約0.5~0.6mである。13層は暗灰茶褐色弱粘質土で、上面の標高は約0.4~0.5mである。14層は明灰褐色粘土で、上面の標高は約0.4m前後である。湿地状の堆積層と考えられる。15層は暗灰褐色粘土で、上面の標高は0.25mである。本層も湿地状の堆積層とみられる。

地形

各層の上面の標高は、北から南にむかって緩やかに下がるものの、高低差は10cm前後におさまり、ほぼ水平な堆積状況を呈している。 9層よりも上位は灰褐色から茶褐色を呈する砂質土がほぼ水平に堆積し、安定した微高地が形成されていたことが推測される。第18次調査(c 地点)周辺を含めれば、南北約40mの範囲で安定的な微高地が広がっていたこととなる。

10層以下は粘質土層や粘土層が堆積しており、特に14・15層は粘性の強い粘土層である。土層から弥生時代以前は湿地状の地形が広がっていたことが推測される。

b. 遺構 (図39)

遺構は4、5、6、7、10層上面から掘削されている。いずれも断面観察で落ち込みを確認したのみであり、 それぞれの遺構の機能や性格については、すべてを明らかにしえていない。

4層上面からは遺構①が掘削される。明茶褐色土ブロックを多く含む明橙灰白色砂質土の埋土で、幅約1.8m、深さ約0.65m、逆台形状の掘り方を有する。掘り方の形状や埋土から溝状の遺構と推定される。

5層上面からは遺構②・③が掘削されている。埋土は②が明灰褐色砂質土、③が淡灰白色砂質土である。いずれも一部を別遺構に切られている。残存部の規模は②が幅約0.4m、深さ約0.2m、③が幅約0.3m、深さ約0.15mと小規模である。これらは浅く、小規模で不安定であり、遺構ではない可能性もある。

6層上面からは遺構④~⑧が掘削されている。埋土は粗砂を多く含む⑤以外は灰~灰褐色砂質土である。⑤は粗砂を多く含むほか、礫や炭小片をわずかに含む埋土である。掘り方の形状は、④、⑤は逆台形状の掘り方、⑥・⑦は逆三角形状の掘り方を呈する。それぞれの規模は、④が幅約0.75m、深さ約0.5m、⑤が幅約0.55m、深さ約0.4m、⑥が幅約0.8m、深さ約0.4m、⑦が幅約0.6m、深さ約0.3mとなる。⑧は北半を攪乱によって切られており、全形は不明な点が多いが、浅い皿状の掘り方を呈すると推測される。埋土は明灰褐色砂質土、規模は、残存幅が約0.55m、深さ約0.2mである。土層から中世の遺構と考えられる。

7層上面からは遺構⑨・⑩が掘削されている。埋土は⑨が暗灰褐色砂質土、⑩が明灰白色砂質土である。残存部の規模は⑨が幅約0.8m、深さ約0.35m、⑩が幅約1.45m、深さ約0.2mとなる。掘り方の形状は⑨が半円形を呈するが、⑩は浅くたわみ状に落ち込むものであり、遺構ではない可能性もある。土層から中世に属すると考えられる。

10層上面からは遺構⑪が掘削されている。埋土は暗緑褐色〜暗灰褐色弱粘質土で、炭化物をわずかに含む。規模は幅約1.2m、深さ約0.3mで、掘り方の形状はやや不整形な浅い逆台形状を呈する。時期については、土層から弥生時代のものと考えられる。第18次調査 c 地点でも浅い土坑状の遺構が確認されており、埋土や断面形の形状や規模に類似点がみられることも時期を考えるうえで参考になろう。

c. まとめ

今回の調査では、発掘調査を実施した第18次調査 c 地点も含め、弥生時代以降、安定した微高地が南北約40m にわたって広がっていたことが確認された。また、遺構・遺物の分布が稀薄であることも推測された。

本調査範囲の周辺における既往の調査には、鹿田遺跡第3・4次調査(現保健学科棟ほか)、第14次調査(南病棟II期)、第18次調査(b地点)などの発掘調査ほか、枝川分岐点より派生する支流西岸の護岸工事に伴う立会調査がある。

このうち、護岸工事に伴う立会調査は第18次調査(c 地点)の西に水路を挟んで接し、分岐点から南に約80m の範囲で土層を確認したものである。その成果を参照すれば、分岐点付近は今回の調査と同様、微高地となっているものの、その南は約60~70mの範囲で低い地形が確認されている。したがって、今回の調査で確認された微高地の南端は、第18次調査(c 地点)の南辺より大きく南にはのびないと考えられる。

また、B地点の北西約15mに位置する第18次調査(b地点)では、枝川より西側に入り込む東西方向の近世河道北岸部分が検出された。また、この河道の西岸位置に関しても、b地点の西側に位置する第14次調査地点間において実施した立会調査、あるいは第14次調査地点の調査では微高地の広がりが確認されていることから、b地点の西端部付近に求められる。さらに、今回の調査では、B地点の北端まで確認した微高地状の安定した土地が枝川の西側にも広がると想定されるため、b地点で検出された河道は、その西側や南側にさらにのびるわけではなく、枝川から西に入り込んだ入り江状の地形を呈することとなる。本書第2章第1節で指摘した船着き場状の施設であるとの想定は、今回の調査によって南側の地形が復元されたことで、さらに補強できたこととなる。(野崎)

6. 高エネルギー治療室改修工事:BE33区<調査番号30>

(1) 調査地点の位置と経過

外来診療棟(第1次調査地点)の南に位置する、高エネルギー治療室を改修するにあたり、同所の北西隅を、南北2 $m \times$ 東西3m、深さ約1.4mの範囲で掘削する計画がなされた(図40)。建物際は、建設時の埋土となる一方、その周辺において包含層が残存している可能性が高いと判断されたため、立会調査を実施することとなった。

調査は2月5日に実施した。その結果、調査区内は、建物埋土(建物から約0.5m幅)、および調査区西半において南北方向の既設管路埋土(幅0.7m)によって、包含層が大きく損なわれていた。しかしそうした中、調査区西壁より0.25m幅と、一部中央付近(0.4m幅)において、包含層が残存することが判明した。西壁を中心とする包含層の調査によって、中世〜近代の溝と畦畔や、弥生時代後期〜古墳時代初頭土器片を確認した。

(2) 調査の成果

a. 層序 (図41)

1層は造成土である。2層は暗青灰色粘土であり、近代耕作土と考えられる。2層直下の土層は畦畔として加工がなされており、2層はこの畦畔に伴う耕作土と考えられる。畦畔をなす層は、いくつかの段階の遺構埋土によって構成される。

b. 遺構と遺物

西壁で観察した断面形状から溝と推定されるものが4条、溝等の何らかの遺構埋土の可能性が存在するものが2基(「遺構1・2」)、ピット1基、畦畔1条を確認した。ただし東壁方向が現状建物となり、主に西壁の検討によるため、溝と認識したものが、別種の遺構となる可能性も存在する。

各遺構の構築段階 切り合い関係と、埋土の内容を含む遺 構間の関係から、遺構の構築段階については次のように推 定する。

A段階:遺構 $1 \rightarrow B$ 段階:溝 $1 \cdot 溝2 \rightarrow C$ 段階:溝 $3 \rightarrow$ D段階:遺構 $2 \rightarrow E$ 段階:畦畔·溝4

このうち、A:遺構1には弥生時代後期の土器片が、C: 溝3には中世土器小片が含まれていた。また、E:溝4を 畦畔に伴うものとすると、この段階は近代と推定される。 少なくとも中世段階には溝がつくられ、同様の位置に近代 の段階で畦畔が形成される状況から、東西方向の区画が存 在していた可能性が考えられる。なお、ピットについては、 切り合い関係からA段階の後であり、かつB段階の溝1よ り前の時期に形成されている。

以下、段階ごとに遺構の内容を記述する。

A段階:遺構1 暗黄灰色砂質土からなる埋土によって構成される。北側に下がるように堆積する土層である。性格

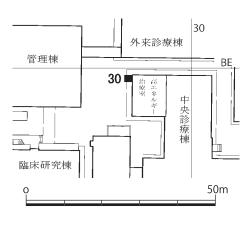


図40 調査地点の位置(縮尺1/40)

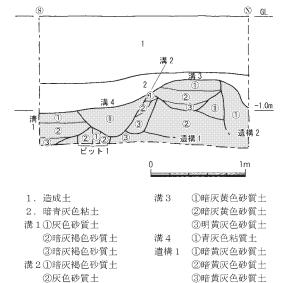


図41 土層断面図 (縮尺 1 /40)

遺構2 ①灰色砂質土

ピット1①灰色粘質土

②暗灰黄色砂質土

③暗灰褐色粘質土

は判然としないが、自然地形の落ちの可能性もある。埋土中からは、弥生時代後期~古墳時代初頭の土器片が1 袋分出土した。鹿田遺跡では、外来診療棟建物付近において当該期の集落が密集することがこれまで判明してお り、本調査もまたそれを裏付ける成果といえる。

B段階:溝1 灰色~暗灰褐色の砂質土の埋土からなる。深さ0.38m以上、幅0.55m以上を測る。遺物の出土は ない。

溝2 埋土は溝1と類似し、暗灰褐色~灰色砂質土となる。深さ0.45m、幅0.35m以上となる。出土遺物なし。 C段階: 溝3 近代畦畔部分に位置する溝である。少量の中世土器小片が含まれていた。幅0.71m、深さ0.32m を測る。埋土は暗灰黄色~明黄灰色砂質土となる。

D段階:遺構2 溝3を切るかたちで北側に形成された遺構である。垂直気味に落ちており、ピットの可能性も ある。灰色砂質土からなる。遺物は出土していない。

E段階:溝4 幅0.76m、深さ0.45mを測る。埋土は基本土層2層と類似しており、青灰色粘質土によって構成 される。遺物は出土していない。

畦畔 幅1.35m、高さ0.30を測る。土地を削り出して作られた畦畔である。

その他の遺構:ピット1 柱痕をのこすピットであり、径0.35m、深さ0.17m以上となる。埋土は暗灰黄色砂質 土となる。 (光本)

7. その他

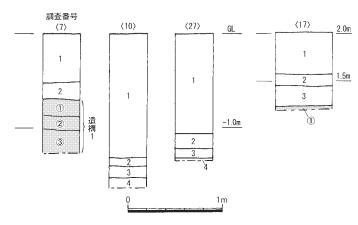
鹿田地区の立会調査では、上述のほか、中世層にまで掘削が及んだ地点が四箇所<調査番号7・10・17・27> 存在するため、それら土層断面を柱状図(図42)で示す。

このうち、中央診療棟新営工事(ガス配管切断工事)に伴う立会調査<調査番号7、BT11区>では、遺構埋 土が確認された。この掘削箇所は、上述の基幹環境整備(道路等)工事の汚水桝Ⅰ地点の北側に位置する。灰褐

色砂質土となるこの遺構埋土は、当該汚水桝 Iで発見された中世の南北溝を構成するもの と考えられる。

環境整備(道路等)工事:ガス配管2(調 査番号17) のCN14・15区では、標高1.2mに おいて、何らかの遺構埋土の可能性が高いと 思われる、中世土器小片を含む①層:暗黄灰 色砂質土を確認した。また、①層と同様の標 高において、ピットと思われるプランを3基、 平面的に確認した。いずれのピット状遺構も、 淡茶灰色質土からなる。

その他、基幹整備(電気設備)工事(調査 番号10、CO42、CV36) における、エネルギー センター南東隅の掘削箇所にて、また、総合 研究棟(医学系)新営その他工事(調査番号 27、BT·BO65) においても、中世土層を一 部確認している。 (光本)



<調査番号7>

- 1. 造成土
- 2. 砂利混灰褐色砂質土
- 遺構1①淡灰褐色砂質土 (白色土ブロック, 土器)
 - - ②灰褐色砂質土 (自色土ブロック,土器)
 - ③灰褐色砂質土
 - (白色中ブロック. 十器)
- <調査番号10 > 1. 既設埋土
- 2. 青灰色粘質土
- 3. 淡緑灰色粘質土
- 4. 淡黄灰色粘質土
- <調查番号27>
- 1. 造成土
- 2. 砂混暗青灰色粘土
- 3. 青灰色粘土
- 4. 緑灰色粘質土

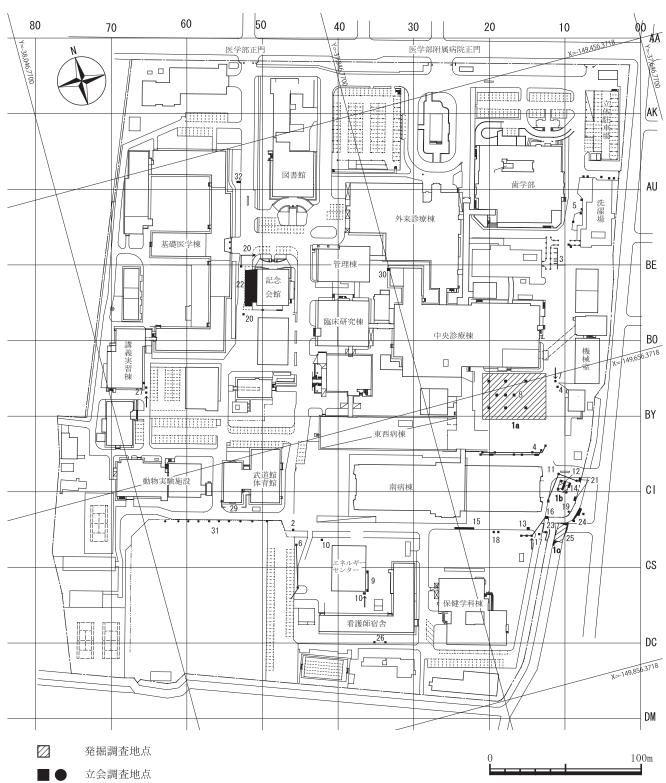
<調査番号17 >

- 1. 造成土
- 2. 淡灰黄色砂質土
- 3. 黄灰色砂質土
- ① 暗黄灰色砂質土

図42 土層柱状図 (縮尺 1/40)

表2 2007年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調 査 名 称	調査期間	掘削深度	内 容
la	発掘	BT13~BY20	医病	中央診療棟予定地(旧厨房棟跡地)	10.10~ 08.3.14	(GL-m) 1.6~2.5	弥生時代後期~近世の集落、井戸26基・溝29条ほ か遺構多数、井戸枠・下駄などの木製品、五輪塔、 ウシの骨、ほか土器多数
1b	発掘	CG~CI9~10	医病	防火水槽設置地点	10.16~11.1	4.0	古代後半の井戸、近世の入り江状遺構・護岸施設・ 杭、古代〜近世遺物
1c	発掘	CM~CN 9 · 10, CO10·11	医病	用水路改修地点	12.27~ 08.1.16	1.6~1.9	弥生時代土坑1基、溝3条ほか、弥生~中世土器 片
2	立会	CM45	医病	エネルギーセンター棟Ⅱ期新営工事:配水管漏水	4.2	0.85	既設埋土中
3	立会	BB~BE11, BD10	医病	旧混合病棟改修その他工事	6.26、7.4	0.7、1.5	6.26: 既設配管への接続工事、GL-1.5m、既設埋 土中/7.4: GL-0.7m、造成土内
4	立会	CC13~20, CD13 ~20	医病	基幹環境整備(道路等)工事	8.1·2·6~ 10·20~ 22·24	1.2~2.2	基盤層まで掘削、中世東西・南北溝確認
5	立会	AS03~07, AV ~AX07, AY · BB09	医病	中診棟屋上防水改修その他工事	8.6~9	0.6~0.9、 1.4、1.8	ガス管 1: GL-1.8m、中世東西溝、古墳時代南北 溝確認/ガス管 2: GL-1.4m、既設内/排水管10 箇所: GL-0.6~0.9m、一部で近代層確認
6	立会	CO~CV45	医病	エネルギーセンター基幹整備工事:外構	8.8	0.9~1.2	造成土内
7	立会	BT11	医病	中央診療棟新営工事:ガス配管切断工事	8.30	1.28	中世溝埋土確認
8	立会	BT15 · 17 · 19 · 20, BV16~18, BX15 · 17 · 19 · 2	医病	中央診療棟新営工事:発掘調査地内の土壌調査	8.30	0.5~0.7	造成土内~近代層上面
9	立会	CS~CV36	医病	エネルギーセンター棟Ⅱ期新営機械設備工事	9.11	0.9~1.6	既掘内~一部近世層まで掘削
10	立会	CO42、CV36	医病	基幹整備 (電気設備) 工事	9.25 · 26	1.3~1.65	中世層まで掘削、遺構埋土確認
11	立会	CG08、CF09·10、 CG·CH11、CI11	医病	環境整備(道路等)工事:ガス配管 1	10.2·3	0.85~1.3	10.2: GL-0.85~1.3m、中世井戸(または墓)、ピット等確認/10.3: GL-1.0~1.3m、中世溝 2 条、ピット確認
12	立会	CG · CH10	医病	環境整備(道路等)工事:支障ガス管撤去	10.10	0.6~1.1	既設内
13	立会	CM14	医病	環境整備(道路等)工事:既存ガス管確認	10.10	0.85	既設内
14	立会	CG~CI09	医病	環境整備(道路等)工事:防火水槽支障物撤去	10.11	0.8~0.9	造成土内
15	立会	CM22~24	医病	環境整備(道路等)工事:雨水枡	10.12	1.1~1.3	造成土内、包含層確認
16	立会	CL12	医病	環境整備(道路等)工事:構造物撤去(トラフ)	10.29	0.8	既設内
17	立会	CL12、CM13、 CN14 · 15	医病	環境整備(道路等)工事:ガス配管 2	11.2	1.0~1.2	中世層、中世遺構埋土確認
18	立会	CN19	医病	環境整備(道路等)工事:沈下棒設置	11.9	0.6	造成土内
19	立会	CK09	医病	用水路改修に伴う電柱取設	11.26	1.7	河道埋土、板材出土(近世か)
20	立会	BC51 · 52、BD52	医	記念会館新営その他工事:機械設備工事 (ガス配管)	11.27 · 28	0.8~1.1	既掘内
21	立会	CG08、CI08	医病	環境整備(道路等)工事:樹木移植	11.28	0.5~0.8	造成土内
22	立会	BE∼BJ50 · 51	医	記念会館新営その他工事	12.6 · 9	0.75、1.3	12.6: GL-0.75m、造成土内/12.9: 基礎確認のための掘削、GL-1.3m、包含層確認
23	立会	CM · CN12	医病	環境整備(道路等)工事:水道管撤去	12.6 · 7 · 18	0.9、1.2	12.6·7: GL - 0.9m、近代層確認/12.18: GL - 1.2m、近世層確認
24	立会	CK07、CL08	医病	樹木移植	12.12 · 13	0.75~0.8	近世層確認
25	立会	CM09 · 10, CN10	医病	支障水道配管撤去	12.18	1.2	中~近世層確認
26	立会	DB33 · 34	医病	看護師宿舎耐震改修電気設備工事	12.18	1.3	近世層確認
27	立会	BT · BU65	医	総合研究棟(医学系)新営その他工事	08.1.22	1.35	中世層確認
28	立会	CJ7~CP12	医病	用水路改修工事	08.1.25·28· 31、2.4·5·6	1.7~2.0	包含層及び枝川東側で微高地確認
29	立会	CI51 · 52、CJ52、 CJ55	医	体育館及び武道場改修機械設備工事	08.2.4	0.6	造成土内
30	立会	BE33	医病	高エネルギー治療室改修工事	08.2.5	1.4	近代~中世?の畦畔と溝確認、弥生後期土器出土
31	立会	CL49~63	医	防球ネット設置工事:建柱	08.2.25	2	10箇所、基盤層まで掘削
32	立会	AT53	医病	正門周辺路面改修工事	08.3.21	1.35	近世層確認



※番号は表2の調査番号に対応する。 矢印は図42柱状図の断面位置に対応

図43 2007年度の調査地点【2】 - 鹿田地区 - (縮尺 1 /2,500)

第3章 構内遺跡の調査研究

1. 「20年の発掘成果展」における展示活動と評価-見学者アンケートの分析から-

はじめに

2007年6月5~17日に実施した「20年の発掘成果展」は、埋蔵文化財調査研究センター20周年記念事業の一つの柱であった。同時に、本展示会は、20年間にわたって継続してきた構内遺跡の発掘調査・研究成果を総括し、学内外へ公開する場でもあった。それゆえ、本展示会は、展示技術や成果の蓄積等の点では12回におよぶ既往の展示会の延長線上に位置するものである一方で、規模や企画構成、対象となる見学者層など様々な点で既往の展示会とは性質の異なるものとなった。ここでは、本展示会の展示活動について報告するとともに、見学者へのアンケート調査をもとにした展示評価を試みることにしたい。

展示の評価は、実施する時期によって企画・制作段階に行う形成評価と、展示公開後に行う総括評価に分けることができる。本稿で試みるのは完成した展示を対象とする総括評価にあたるが、展示会自体が会期の限られた企画展ということもあり、評価の方法自体は綿密に計画したものではなく、例年の展示会の折に継続的に実施してきた見学者へのアンケート調査を事後的に活用し、基礎データとしたものである。本稿で今回の展示会の評価を試みる目的の第一は、展示方法や企画とそれに対する見学者の反応についての基礎データを蓄積し、今後の公開活動や展示企画に向けての方向性や改善点を浮き彫りにすることにある。本展示会では、既往の展示会に比べ、実施規模が大きかったため、相当数のアンケートを回収することができた。また、見学者の構成も多様であったため、統計的な分析の対象とする標本としては適したものといえる。第二は、展示評価を行うことによって、「20年の発掘成果展」の意義を明瞭化することである。本展示会の実施は、学内施設ではなく設備・環境の整った学外の展示施設を会場とするという点でセンターにとっても新たな試みであった。また、学内事業としてみても、恒常的・体系的な展示施設をもたない現状で、センターの蓄積してきた膨大な学術標本をどのように活用しうるかを検討する機会でもあった。本展示会が学内外に及ぼした意義を把握するには、まず展示活動自体の正確な評価を行う作業が必要となろう。

1. 「20年の発掘成果展」の概要

a. 展示事業の概要

「20年の発掘成果展」は、テーマを『自然と人間、地中に埋もれた命の対話』として、6月5~17日の12日間にわたって実施した。会場は、岡山市デジタルミュージアム4階の企画展示室である。延べ利用面積は、約515㎡である。既往の展示会の延べ利用面積は、センターに付属の展示室(約18㎡)を利用した場合では、およそ30㎡内外であろう。利用面積で比べれば、例年の約17倍程度の規模となる。出展資料は、約400点である。

見学者は、12日間の合計で2,161名で

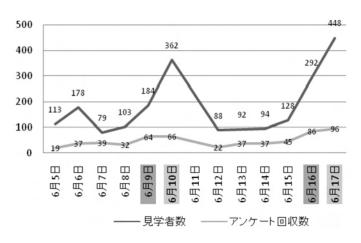


図44 「20年の発掘成果展」における見学者数とアンケート回収数

ある。アンケート回収数は580部で、回収率は26.8%である。一日平均の来場者数は、約180名である。土・日曜日(6月9・10・16・17日)には平日の $2\sim4$ 倍の見学者数を得ることができた(図44)。なお、会期中に複数回入場した見学者もいるため、実質のアンケート回収率はもっと高いと考えられる。

会期中の日曜日に、展示内容と関連したテーマで記念講演会を2回実施した。6月10日に『鹿田、古代・中世のにぎわい』、6月17日に『津島、自然のなかの縄文人』である。参加者数は、それぞれ70名、125名であった。日曜の展示見学者の顕著な伸びは、講演会聴講と併せて来場したためと考えられる(図44)。そのほか、6月5日に学内外の関係者を招いてオープニング・セレモニー、記念祝賀会を実施している。

展示会に関連した印刷物として、パンフレット(A4判、10頁)、リーフレット(A4判、三つ折)、がある。これらは、来場者全員に配布され、展示を見学する際の手持ち資料となるものである。そのほか、展示会終了後に刊行した『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』において、本展示会の概要をまとめており、展示図録に相当する内容の出版物となっている。

b. 企画趣旨と展示の全体構成

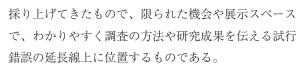
今回の展示は、導入部分と4つのテーマセクション、そしてワークショップ/大学紹介コーナーという、大きく6つのセクションによって構成されている(図45)。展示の中核となるのは4つのテーマセクションで、それぞれ「水とめぐみ」、「心といのり」、「荘園の世界」、「戦いと人びと」という、タイトルが冠されている。基本的には、これら4つのセクションで縄文時代からはじまり近代におよぶ構内遺跡の歴史をたどる、時代順展示の形態を採っている。しかし、セクションごとに完全に時代順には分離しておらず、少しずつ重複した展示となっている。これは、時代順展示の形態を採りつつも、『自然と人間、地中に埋もれた命の対話』という全体テーマに即して、津島岡大・鹿田の両構内遺跡の出土資料の特長を活かせるような展示テーマを各セクションに設定したためである。したがって、各セクションは時代性とともに、全体テーマである人間と自然のかかわりの歴史を4つの異なる視点を通して描き出すという二重の役割を担っていることになる。また、今回の全体テーマは、いわゆるモノ中心の展示ではなく、モノの背後にある各時代の人間と自然の歴史を描くことを目的としており、そのため既往の展示会と比べて通時代的な内容であるとともに、現代的なメッセージ性の強いテーマであることも特



図45 会場平面図 (縮尺 1/300)

色といえる。

展示の全体的な特徴 4つのセクションは、後述するように、幅のある展示手法をとっており、それぞれに特色が認められる。これらに共通の、展示の全体的な志向として挙げられるのは、参加・体験型展示の積極的な導入と床面展示の多用である。両者に共通しているのは、いずれも見学者にわかりやすい、空間体験型の展示、イメージしやすい手法ということであろう。どちらの手法もセンターが既往の展示会において



動線配置 次に、動線配置をみておくことにしたい (図46)。動線の全体の流れは時計回りになっているが、これは会場の出入口の配置に制約を受けたものである。また、6つのセクションは順番に回るように設定されており、全体としては規制的誘導方法を採っているといえる (図47中)。これは、時代順展示に適した動線配置を採った結果といえるが、各セクションでみた場合、規制の強弱にはかなりの幅がみられる。

2. 各セクションの構成と展示形態の特徴

本展示会では、全体テーマのもと中心となる4つのテーマセクションを設け、結果として展示形態や手法も各4セクションで相応の幅をもつこととなった。後述するアンケートの結果においても、セクション別の評価に有意の差を見出すことができた。ここでは、アンケートの分析を進める前に、各セクションの構成と特徴をまとめておきたい。

a. 導入

入って左手には趣旨説明、構内遺跡の概要説明のパネルが、右手には縄文時代の森から弥生時代の水田への景観の移り変わりをイメージさせるイラストと写真のタペストリーが並ぶ。利用面積は、28㎡である。

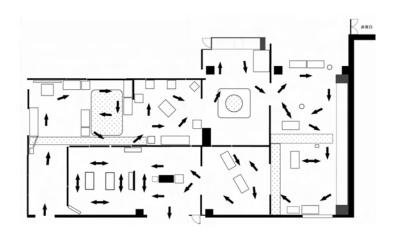
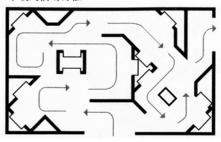
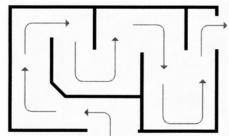


図46 動線配置図 (縮尺 1/400)

示唆的誘導方法



規制的誘導方法



非規制的誘導方法

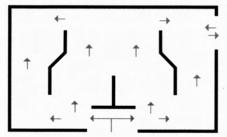


図47 動線配置の類型 (デビッド・ディーン2004から引用)

b. 「水とめぐみ」

「水とめぐみ」は、4つのテーマセクションの最初に位置する。津島岡大遺跡の成果を中心に、縄文時代から弥生時代への川辺の景観の移り変わりを通して、水稲農耕のはじまりにともなう人間と自然とのかかわりの変化に焦点をあてた展示を目的とする。前半部に縄文時代、後半部に弥生時代の資料を配置しており、時間軸展示の性格がつよいセクションである。見学者が目にする順番を想定して各展示ケース・装置を配置しているため、動線も4つのセクション中でもっとも規制がつよくなっている。利用面積は、約74㎡である。



図48 『水とめぐみ』コーナー展示

時間軸展示のなかに、本学の自然科学系の研究者との共同研究の成果を展示したケースを組み込むことができたのも、本セクションの特徴である。縄文時代の部では水田雑草の種子(環境理工学部 沖陽子教授 監修)を、弥生時代では石器石材の原産地(理学部 鈴木茂之准教授 資料提供・監修)と雑草メロン種子のDNA分析(農学部 加藤鎌司教授 パネル提供・監修)の研究成果を展示することができた。これら自然科学との共同研究の成果を併せて展示できたことによって、全体テーマとのつながりがもっとも顕著にあらわれたセクションとなった。

ところで、各テーマセクションには象徴展示となるような資料が配されている。「水とめぐみ」の場合では、 実物の貯蔵穴(切り取り保存したもの)とその使用状況の復元画に高さ4.2mのタペストリーを背景に組み合わせ た展示がその役割を果たした(図48)。

c. 「心といのり」

「心といのり」は、縄文時代から弥生時代にかけての自然と人間のかかわりを、当時の人間の精神世界に焦点をあてて展示したセクションである。利用面積は、約48㎡である。本セクションでは、象徴展示となる弧帯石(倉敷市楯築遺跡)・タペストリー・照明演示具との組み合わせによる展示(図49上)を中心に、小型の展示ケースを周囲に配置している(図45・46)。そのため、動線の規制は4テーマセクション中でもっとも弱くなっている。また、展示手法として単体展示と回転台を用いた動態展示の活用が特徴的にみられ(図49下)、動線設定のあり方とともに、一つ一つの資料をみせる鑑賞的な性格のつよい展示が全体に採られているといえる。照明は他のセクションに比べて暗めに設定されており、中心に配置した象徴展示が浮き上がる、神秘的な雰囲気の漂うセクションである。



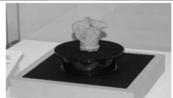


図49 『心といのり』コーナー展示

d. 「荘園の世界」

「荘園の世界」は、古代から中世の鹿田遺跡の調査成果を中心に、「鹿田庄」における荘園経営のようすや暮ら

しの賑わい、条里地割の導入による自然改変の 歴史に焦点をあてたセクションである。出展資 料数・利用面積ともにもっとも規模の大きなセ クションで、前セクションまでの自然改変の歴 史の一つの到達点として、荘園という小世界で 豊かな文化が花開くようすを物語る展開構成と なっている。利用面積は約205㎡である。前半 部に古代、後半部に中世の資料を配置する。動 線の規制はさほどつよくなく、必要に応じて順 路を選択できる示唆的誘導方法に近い。象徴展 示は、古代の井戸枠(実物)の展示である(図 50右)。床面のカーペットで井戸枠の掘り形を 表現している。本展示は、アンケート調査で印 象にのこったものを尋ねる設問において、もっ とも回答数が多かった。また、古代の部では、「鹿 田庄 | の調査成果をダイジェストでみることの できる映像展示コーナーを設けている。



図50 『荘園の世界』コーナー展示

「荘園の世界」の展示の特徴は、中世の部に

おいて顕著にみることができる。中世の部では、展示空間を荘園に見立てて、複数の展示グリッド(職人長屋・市場・屋敷地・台所など)を有機的に関連させて配置する、構造展示的な手法を採っている(図50下)。また、各グリッドでは絵図と考古資料をセットとして展示するなどの組み合わせ展示によって、荘園のなかの情景をイメージしやすいように工夫している。図50左は、絵図と調理用具の組み合わせ展示によって屋敷地内の台所を表現したグリッドである。

本セクションでは、古代の部 (橋脚杭)、中世の部 (土師質椀の型式変化) のそれぞれで、資料を見学者に実際に触れてもらう、いわゆるハンズオンを実施した。

e.「戦いと人びと」

「戦いと人びと」は、弥生時代から近現代までを対象に、構内でみつかった戦いの存在を示す遺物や痕跡に焦点をあてたセクションである。最後尾に位置するテーマセクションで、人間社会の負の側面をとりあげて「命の

対話」の結びとする展開となる。前半部では弥生時代における戦いのはじまりから近世の和流砲術までを、後半部では構内に現存する旧陸軍関連施設を中心にとりあげた。前半部と後半部で展示形態を大きく変えており、前半部は規制的な動線を敷き、時間軸展示を採っている。反対に、後半部は非規制的な動線で、解説パネルによる現存施設の紹介・展示が主体となっている。他のセクションに比べ、一次資料よりも写真・図・映像など二次資料を用いた展示が多く、とりわけ後半部ではその傾向がつよい。映像展示コーナーを2か所に設け、それぞれで展示の



図51 『戦いと人びと』コーナー展示

ダイジェストをみることができる。象徴展示は、後半部の入口に掲げた旧陸軍第十七師団司令部(旧事務局棟)の写真パネルである(図51)。利用面積は、約98㎡である。

f. 大学紹介/ワークショップ

最後のセクションは、「自然と人間、21世紀の岡山大学」というテーマのもと、学内の最新の研究成果をパネルで紹介するコーナーと、ワークショップで構成される。前者は、各学部から全体テーマに関連する研究成果を紹介してもらう内容で提供頂いた



図52 大学紹介/ワークショップコーナー

パネルと、大学紹介ムービー(常時放映)で構成される。後者は、3種類の参加体験型展示で構成される。「土器を組み立ててみよう」は土器接合の体験を、「石器をさがそう」は礫や剥片のなかから石器を判別する体験を、「「くぐつまわし」をさがそう」は絵図中からクイズ形式で特定の人物や情景を探しだしてもらう展示である。中央のスペースでワークショップを、周囲の壁面でパネル展示を実施した(図52)。会場出口は「戦いと人びと」に接続しているため、本セクションへの出入りは見学者の自由である。ワークショップでは、会期中常時2名のスタッフが見学者への対応をとった。利用面積は、約48㎡である。

3. 展示構成の取り組みと成果・課題

本展示会で実施した取り組みの多くは、既往の展示会において部分的・実験的に実施してきたものである。しかし、会場や展示規模の違いもあり、制作段階から一からの試行錯誤を要したものもある。ここでは、今回の展示の取り組みのいくつかを採りあげて、成果と課題をまとめておきたい。

a. 視聴覚映像展示

映像展示は、計4か所で実施した(図45)。「荘園の世界」(図53左)、大学紹介パネルコーナーで各1か所、「戦いと人びと」で2か所である。内訳を表3に示した。いずれも常時放映で、大学紹介「希望という名のデッサン」以外は無音声である。スライド放映の3展示は、いずれも設置セクションの展示の流れを掴むための補助的な機能を担うものである。全体的に上映時間の設定が長めで、インタラクティブ型の展示ではないため、休憩スペースと併置して息抜き効果を狙った側面がつよい。ただし、設置箇所がいずれもセクションの冒頭部分にあたるため、導入としてはやや間延びを生む傾向があった。映像展示の動線上の位置付けについては、今後の課題といえる。また、DVDを制作した『鹿田遺跡と「鹿田庄」』については、解像度の調整に問題が残り、見えづらかったという感想がアンケートに散見された。

表3 映像展示の概要

タイトル	設置セクション	映像種類	上映時間
鹿田遺跡と「鹿田庄」	荘園の世界	投射映像	8:00 (スライド29枚分)
兵どもが夢の跡 第1部	戦いと人びと	直視映像	5:50 (スライド21枚分)
兵どもが夢の跡 第2部	戦いと人びと	投射映像	5:30 (スライド28枚分)
希望という名のデッサン	自然と人間、21世紀の岡山大学	直視映像	17:48 (音声有)

b. 床面展示

床面展示は、計6か所で実施した(図45)。そのうち3か所は、河(水とめぐみ~心といのり)・水路・道(荘園の世界)を表現したもので装飾的な意味合いがつよい展示である。残りの3か所では、弥生時代前期の水田畦畔(図53中)、古代の井戸枠掘り形(図50右)、古代の掘立柱建物の柱穴跡の展示を試みた。これらはいずれもカーペットで実物大に遺構の表示を行ったものである。これらは、水田区画や建物の大きさを一目で体感できるため、アンケートにおいても好意的な意見が多く見られた。視覚だけでなく、歩行時の感覚にも刺激をもたらす点が見学者の印象に残りやすい要因と考えられ、展示の流れに変化をつけるには有効な方法といえよう。ただし、通行の障害にならないように、解説パネルでの表示の仕方や、段差をつけないための細工、足元の照明の調整など、制作時の綿密な調整は不可欠である。今回の展示では通行上の問題は生じなかったが、床面展示と解説パネルが離れており、やや関係がわかりにくかったようである。

c. 参加体験型展示

参加体験型の展示は、ワークショップで実施した3展示以外に、「荘園の世界」で2展示を実施した。古代の部のものは、橋脚杭(PEG処理済み)に実際に触れてもらうことで、木製品の大きさや手触りを実感してもらうというものである。中世の部では、土師質椀の型式変化を手に取って観察してもらうハンズオンを実施した。

参加体験型展示・ワークショップは概ね好評であった。とりわけ土器接合は珍しい試みとして多くの見学者の興味をひいたようで、印象に残った展示を挙げるアンケート調査で3番目に多い回答を得ている(図53右)。アンケートには土器接合が「想像より難しかった」、「大変だった」等の感想も散見され、経験者のアドバイスを受けながらの参加が理解を助けるのに不可欠のようである。ワークショップ・土器接合は、会期中常時参加可能な体制であったため、見学者とスタッフとのコミュニケーションの場として機能しやすい環境でもあった。人的コストとしては大きく、企画展という形態でこそ可能な試みではあるが、常設的なワークショップの大きな利点と言えよう。「研究の様子が伝わった」といった感想にみるように、ただ資料に触れるだけでなく、コミュニケーションを通して見学者の展示への理解を深めることができた点は、コストに見合う大きな成果と言える。

d. 多様な見学者層への対応

多様な知識レベルをもつ見学者への対応として、解説パネルよりも詳細な情報を盛り込んだ解説シート(A4判)を3か所で自由配布した。「心といのり」で2か所、「荘園の世界」で1か所である。バリアフリーへの取り組みは、先述の床面展示の細部加工以外に積極的な実施は行っていない。そのほか、照明が反射してケース内に設置した解説パネルが見難いなどの意見が寄せられたが、見学者の多様な要望をさらに検討していくことは今後の課題となろう。







図53 本展示会における主要な取り組み

4. 見学者アンケートの分析による展示評価

展示を評価する主な方法として、面接法・観察法・アンケート 調査法がある。ここでは、見学者へのアンケート調査から展示評 価を行いたい。

a. 見学者の属性

まず、見学者の属性構成をみておきたい。図54は、縦軸にアン ケート回答数、横軸に回答者の年齢を示したものである。男性見 学者は、年代が上がるにつれて増え、女性は20代を頂点にして年 代が上がると緩やかに減少する傾向がある。全体では、男性が 57%、女性が41%となっており、やや男性見学者が多い。本展示 会では、60~70代以上の男性が見学者の比率としてはもっとも高 かったことになる。これらの数字は、アンケート調査の結果であ り、実際は10才未満から10代の構成比率がこれより高い可能性が あるものの、以下では図54の属性構成を本展示会の基準とみなし て分析を進めることにしたい。

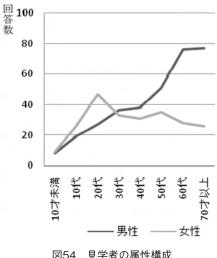


図54 見学者の属性構成

b. 広報活動の効果と見学者の属性

本展示会の広報活動の構成は、大きく3種類の方法に分けることができる。第一は、ポスターやチラシといっ たセンターから配布する紙発行物によるもの。第二は、新聞・テレビといった公共的な媒体によるもの。第三は、 ホームページや電子メールなどインターネットを用いたものである。情報取得媒体と見学者の回答数の関係を図 6に示した(複数回答可)。新聞・テレビによる効果がもっとも大きく、全体の約34%は公共的な媒体によって 情報を得ている。次に多いのが、ポスター・チラシによるもので、二つを合わせると全体の約24%、埋文センター からのお知らせまでを含めると約28%がセンター配布の紙媒体で情報を得ている。ホームページ・電子メールは、 全体の約8%である。なお、ホームページによる広報は、センターと今回の会場となった岡山市デジタルミュー

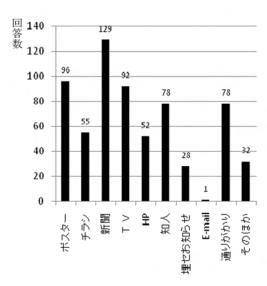


図55 情報取得媒体の構成

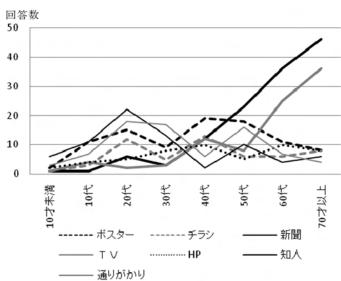


図56 情報取得媒体と見学者属性

ジアムの2つのサイト上で公開している。注意すべきなのは、知人・通りがかりといった固定的な媒体を経ずに情報を得ている見学者が相当数みられる点で、これらを合わせると約24%になる。通りがかりの多さは、今回の会場が岡山駅を目前にする立地環境の良さに起因するものであろう。

次に、情報取得媒体と見学者属性の関係を図56に示した。縦軸は回答数である。第一の特徴は、もっとも影響力をもつ媒体である新聞とテレビが60~70代以上を中心に効果を与えているということである。これは、本展示会の見学者の年齢構成を考えれば理解しやすい結果である。逆に、60~70代以上では、新聞・テレビ以外の媒体はいずれも低い数値を示している。また、若年層においては、新聞・テレビの効果は非常に小さいもののようである。ポスターは、40~50代を中心に効果が大きかったことがわかるが、紙媒体(ポスター・チラシ)はどの年代でも一定の効果を及ぼしており、年代間に効果の偏りの少ない安定的な媒体といえそうである。ホームページによる効果は、全体における数こそ少ないものの、年代間の大きな偏りもみられず、高齢層にも一定程度浸透している媒体とみてよいように思われる。今後の活用方法の工夫が期待できる媒体と言えよう。いま一つの大きな特徴は、20~30代前後の若年層ほど情報取得媒体が多様化してみえるなかで、知人・通りがかりといった固定的な媒体を経ずに情報を得ている割合がもっとも高くなっている点である。これが、若年世代の情報取得行動の特質に起因するのか、本展示会が学内事業であるために学生層が知人・教職員等を通して情報を得る機会が多かったことに起因するのか、ただちには判断しにくい。しかし、知人による情報取得を除いても、やはり20代を中心とする通りがかりの多さは、本展示会の特徴であるとともに、若年層に特有の情報取得行動のありかたを反映したものと考えるべきであろう。

c. 見学者の属性とセクションの評価

ここでは、セクションの評価と見学者の属性を比較することで、各セクションの展示内容が見学者にどのような反応を与えたか、反応が見学者の属性によってどのように変動するかを検討することにしたい。

まず、各セクションの評価をみることにしたい。図57は、セクション・コーナー別におもしろかったものを回答してもらったものである(複数回答可)。ワークショップ合計の項目には、3種類の展示それぞれの回答数の合計に、ワークショップ自体の回答数も含めている。テーマセクションでは、「水とめぐみ」の評価がもっとも

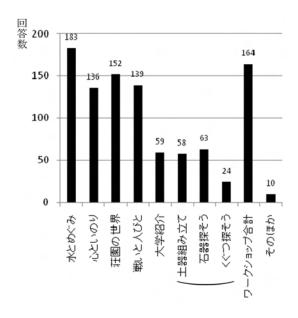


図57 各セクションの評価

高かった。ワークショップは、3展示の合計でみると一つのテーマセクションに相当する評価を受けている。

次に、各セクションがどのような属性の見学者に評価を受けているかを検討してみたい。図58は、横軸に回答者の年代を、縦軸に各セクションを100%とした回答率をとって、図57の年代別の内訳を示したものである。

「水とめぐみ」・「荘園の世界」は、いずれも男性が右肩上がり、女性が20代を頂点に減少する属性分布を示す。これは先に図54に示した見学者全体の属性構成とほぼ一致するとみてよい。つまり、見学者の属性の影響をさほど受けずに、どの見学者からも一定の評価を得たセクションといえる。そのほかのセクションには、それぞれ分布に特徴が認められる。「心といのり」は、20~30代の女性からの評価が高く、60~70代以上の男性からの評価の伸びは、全体の属性構成を考慮すると低めにとどまっているといえる。「戦いと人びと」では、男性からの評価に特色がみられ、

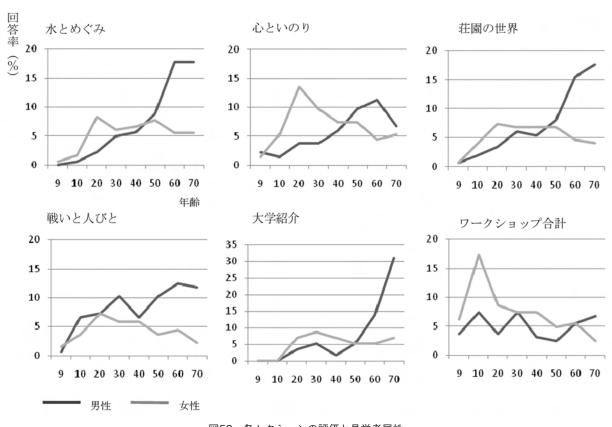


図58 各セクションの評価と見学者属性

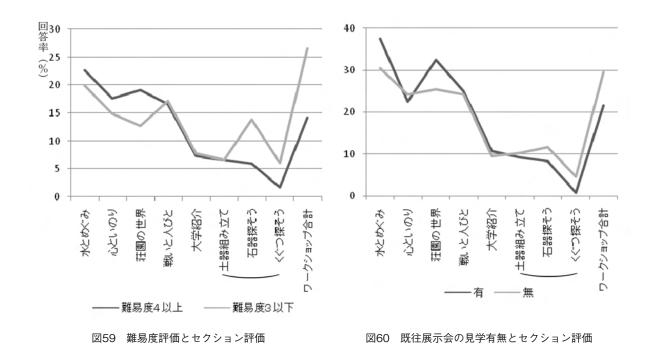
20~30代男性からの評価が高い傾向がある。40代でやや断絶がみられ、50代以上になると回答率は増加するものの、全体の属性構成と比較すると評価はやや低めである。大学紹介のコーナーは、60~70代の男性からとりわけ評価を受けた。ワークショップは、唯一10代からの評価が顕著にみられるセクションである。とりわけ10代女性からの評価を受け、10才未満の男女においても他のセクションに比べてやや高めの数字が出ている。反対に、高齢層からの支持はきわめて低い。

d. 見学者の知識レベルと展示評価

展示の評価と見学者の属性の関連性については、以上の分析から十分うかがうことができるであろう。最後に、 セクションの評価を分ける要因を、もう少し別の角度から検討してみることにしたい。

アンケート調査では展示全体の難易度を5段階(わかりやすい:5~難しい:1)で回答してもらっている。 難易度平均は3.98で、大半の見学者からわかりやすいという評価を受けた結果となる。では、今回の展示を相対 的にわかりやすいと感じた見学者と、難しいと感じた見学者では、各セクション・コーナーへの評価にどれほど の違いがみられるのだろうか。図59には難易度4以上の回答者と3以下の回答者のセクション別評価の違いをま とめた。縦軸は回答率を示す。相対的に全体の展示内容を難しいと感じた回答者が、テーマセクションでの展示 よりもワークショップに高い評価を与えているのは明らかである。テーマセクションでは、「戦いと人びと」だ けに難易度による差がみられなかった。「荘園の世界」は、難しいと感じた回答者からの評価がやや低めとなっ ている。

次に、既往の展示会の見学経験の有無によってセクションの評価を検討したものが図60である。見学経験の有無は、展示に関する予備知識の有無としてここでは読み替えておくことにしたい。見学経験のない回答者は、や



はりテーマセクションよりもワークショップに高い評価を与える傾向がある。また、「水とめぐみ」・「荘園の世界」 において見学経験の有無で評価が分かれる傾向にある。

e. 分析のまとめ

以上の分析結果は、限られた項目のアンケート調査を活用したものではあるが、様々な要因によって展示の評価が形成されていることをうかがわせるものである。とりわけ興味深いのは、各セクションによって主要支持層に違いがみられる点である。「水とめぐみ」・「荘園の世界」は、どの分析においても非常に類似する傾向を示している。つまり、年齢や性別によって評価の偏りがない一方で、展示に対する予備知識をもつ見学者からより受け入れられやすい展示だったといえるであろう。「心といのり」・「戦いと人びと」は、主要支持層に特徴があり、これは2セクションの設定テーマに起因するものであろう。ワークショップは、様々な点で4つのテーマセクションとは反対の結果を示している。つまり、10~20代の若年層を中心に支持があり、予備知識の少ない見学者から評価が高い傾向があった。「水とめぐみ」・「荘園の世界」がテーマセクションの典型として、主要見学者層となる高齢層のニーズを満たすものであったとするなら、その対極の若年層をワークショップが担い、「心といのり」・「戦いと人びと」がやや変則的なテーマによって対極の空白部分を担ったものとして全体の構成を位置づけることもできよう。

いずれにしても、以上の分析結果から大雑把に二つの見学者層の存在を読み取ることは不可能でないように思われる。一つは、高齢者を中心とする、「水とめぐみ」・「荘園の世界」といった、モノを中心とした、より従来的な傾向をもつテーマや展示内容に高い評価を与える見学者層である。この層は、より専門的な知識を求めて来場している可能性が高く、リピーターの多くもこの層によって構成されているように思われる。もう一つは、若年層を中心とする、ワークショップなどの参加体験型展示や、「心といのり」・「戦いと人びと」といった特定のテーマに高い評価を与える見学者層である。この層は、展示に対して専門的な知識の獲得よりもわかりやすさやおもしろさといったものを求めていると考えられる。

本展示会の構成を改めて振り返ると、既往の展示会よりも幅の広い見学者層を対象としながらも、結果として

各セクションが相補的な役割を果たしたことが難易 度平均3.98という好評価に結びついたものと思われ る。今回のような規模・構成の展示会を恒常的に継 続していくことは困難であろうから、今後の展示会 で規模を縮小した際に今回のようなセクション間の 展示の相補性をどのように企画・実現していくかと いうことは留意しておいてよいように思われる。

おわりに

a. 「20年の発掘成果展」の位置づけ

アンケート調査を活用することで本展示会の評価を試みてきたわけだが、既往の展示会との比較を行い、本展示会の意義をまとめることにしたい。図61には既往の展示会との見学者構成の比較を示した。第5回展示会の該当データはなく、リピーターの調

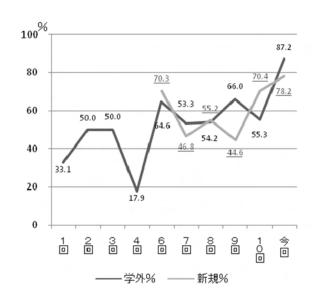


図61 既往展示会と見学者構成の比較

査は第6回目以降である。本展示会の構成は、学外見学者率においても、新規見学者率においても既往の展示会に比べて高いことがわかる。見学者数においても、既往の展示会が400名を越えることがなかったことからすれば、利用会場を変えたことが規模や見学者構成など今回のあらゆる面での質的な変化をもたらしたといえるであろう。

本展示会の意義の第一は、より広範な一般市民への成果の公開に成功したという、学外的・対外的な点にあろう。既往の展示会に比べ見学者数だけでなく、学外所属者・新規来場者の割合が高いことは、関係者や考古学に関心の高い見学者のほかに地域市民の相当数の参加があったとみるべきであろう。第二は学内的な意義であり、広く市民の評価を受ける機会となっただけでなく、多くの学内関係者へもセンターの成果の集大成を示す場となった点である。岡山大学は約130万点にのぼる学術標本を保有しているものの(考古資料が7割以上を占める)、恒常的・系統的な展示を行う環境をもたないのが現状である。そのような状況において、設備・環境の整った会場で構内遺跡出土の考古資料を中心とした通時代的な展示会が可能であることを示せたことは、埋蔵文化財の保護・活用のありかたに理解をもたらすだけでなく、今後の大学博物館構想においても多くの参考資料を提供するものであるう。第三は、センターとしての意義である。20年間にわたる調査・研究の蓄積を、展示会の制作を通して解説パネルや出版物などの一定の成果物として残すことができたことはもちろん、学内の研究協力者との連携が進んだ点も重要である。また、既存の成果の全体像を総括しなおすことで、調査研究の現状と課題を浮き彫りにする機会となった。

b. 展示評価のまとめ

本稿で「20年の発掘成果展」の評価を試みたのは、見学者の評価を知ることが単なる自己評価にとどまらない本展示会の位置づけを探る方法と考えたためであり、また、その位置づけが展示会のみにとどまらない意義や波及性をもつと考えたためである。最後に、展示評価のまとめを行うことにしたい。

展示評価の成果として、第一に挙げることができるのは、見学者の属性把握における分析結果である。見学者の属性によって、展示の評価だけでなく情報取得の段階においてすでにかなりの幅が存在することは分析の項で検討してきたとおりである。見学者は、大雑把に見積もっても、より専門的・高度な知識を求める層と、わかりやすさを重視する層に二分できると考えられ、展示において専門性と一般性の対立をどのように実現していくか

は今後の大きな課題である。それは、言い換えるなら、新たな見学者層を開拓することとリピーターの満足度を高めていく作業ということになろう。第二は、テーマ設定・企画の重要性である。本展示会は、基本的に歴史展示を対象としたものでありながら、各セクションでは設定テーマによって見学者の反応が大きく異なることがわかった。また、同じ考古資料を扱いながら、テーマセクションと参加体験型のワークショップでは対極の評価を示す結果となった。見学者の属性を十分考慮しつつ、展示に対する多様な要望を限られたスペース・予算で実現していくことが必要となる。

一方で、本展示会が、見学者から全体に高い評価を受けたのは間違いない。それは、センターの調査研究の積み重ねや既往の展示会での試行錯誤が一定の理解を得たことを示すであろう。センターは、展示活動を事業の根幹とするわけではない。しかし、一次資料の収集から整理・研究、成果の公開までを一貫して担うことが博物館との大きな違いであり、それゆえに、展示の評価を調査や研究などの他の事業全体に直接フィードバックしていくことも可能であろう。専門性と一般性のバランスをどのようにとっていくかという課題は、展示だけでなく、大学の一機関としてどのように地域や学界に貢献していくかという課題とも併せて、さまざまな場面で検討していく必要がある。

【引用・参考文献】

青木豊1997『博物館映像展示論―視聴覚メディアをめぐる―』雄山閣

岩﨑志保2007 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』40号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

加藤有次他2000『博物館展示法』新版·博物館学講座 第9巻 雄山閣

「大学博物館のあり方と学内学術標本のデータベース化に関する学際的研究」プロジェクトチーム・岡山大学総合研究博物館(仮称) 構想検討会 編・発行2000『岡山大学 自然と人間の共生博物館―新しい大学博物館をめざして― 資料・研究編』 デビッド・ディーン2004『美術館・博物館の展示 理論から実践まで』丸善

西野嘉章1996『大学博物館―理念と実践と将来と』東京大学出版会

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編・発行2007『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用 第1節 調査資料の整理・研究

1. 調査資料の整理

2007年度の調査資料の整理は、鹿田遺跡第13次調査(総合教育研究棟)の古墳時代初頭土器の接合・復元作業を中心に行い、特に、土器溜まりの土器組成に注目した分析を進めた。

また報告書の作成に関しては、『津島岡大遺跡18』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊)を刊行した。『津島岡大遺跡18』は、自然科学系総合研究棟建設に伴う津島岡大遺跡第28次調査(2002年度調査)成果報告書である。同報告書では、縄文時代後期の遺物、そして弥生時代では前期水田や中期遺構の資料について成果をまとめた。

(山本)

2. 調査資料の自然科学的分析

2007年度における自然科学的分析としては、津島岡大遺跡を対象とした縄文時代後期ならびに突帯文土器の胎土中のプラント・オパール分析、同遺跡第5次調査における土器表面に付着した圧痕状痕跡の分析、そして、同遺跡第30次調査では、珪藻分析と放射性炭素年代測定を行った。また、分析結果としては、津島岡大遺跡第28次調査における植物珪酸体分析・花粉分析・放射性炭素年代測定結果を報告することができた。

土器の胎土中のプラント・オパール分析に関しては、宮崎大学宇田津徹朗氏と愛媛大学田崎博之氏の科学研究への資料提供である(後述)。資料は、縄文時代後期土器と突帯文土器をあわせて合計37点である。津島岡大遺跡第5次調査地点出土では、縄文時代後期に属する土器の胎土中からプラント・オパールが検出された報告がなされており1)、縄文時代の植物栽培に関する本研究においての結果が注目される。

圧痕分析は、縄文後期土器に付着した植物圧痕の可能性があり、田崎博之氏のお世話になった。資料は津島岡 大遺跡第5次調査地点出土の縄文後期土器である。

分析結果の報告は、津島岡大遺跡第28次調査において実施した(2003年1月土壌採集)植物珪酸体分析・花粉分析・炭素年代測定の結果である。その報告は、年度末に刊行した『津島岡大遺跡18』に掲載した。同分析は平成14年度~15年度科学研究補助金、基盤研究(C)(2)「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」(研究代表山本悦世)よるものである。 (山本)

註

1)藤原宏志1994「津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オパール胎土分析」『津島岡大遺跡』 4 岡山大学構内遺跡発 掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

3. 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG保存処理作業

2007年度における調査資料の保存処理としては、木製品のPEG保存処理作業を実施があげられる。 2005年8月に開始した第7期の保存処理を2007年8月に終了し、引き続いて第8期の保存処理に入った。

表4 第7期~8期の処理工程

期	年 月 日	作 業 内 容		
第7期	2007年2月22日 2007年8月2~9日	濃度 95% 濃度 100%: 博物館実習で引き上げ		
第8期	2007年8月9日 2007年10月2日 2007年12月3日 2008年1月31日 2008年3月31日 2008年5月9日 2008年6月10日 2008年8月4・6・8・12日	 濃度 40%: 処理開始 濃度 50% 濃度 60% 濃度 70% 濃度 80% 濃度 90% 濃度 95% 濃度 100%: 博物館実習で引き上げ 		

表5 既往の保存処理一覧

期	処理期間 (延べ期間)	処理対象調査		
第1期	1992年2月~1993年11月 (1年9ヶ月)	鹿田遺跡第1次(附属病院外来診療棟)、第2次(NMR-CT室)		
第2期	1994年6月~1996年8月 (2年2ヶ月)	鹿田遺跡第3次(医療短期大学部校舎)・第4次(医療短期大学部校舎周辺配管)・第5次(管理棟)、津鳥岡大遺跡 第3次(男子学生寮)・第5次(大学院自然科学研究科棟)・第6次(工学部生物応用工学科棟)		
第3期	1996年12月~1999年6月 (2年7ヶ月)	鹿田遺跡第3次、津島岡大遺跡第3次・第6次		
第4期	1999年7月~2000年12月 (1年5ヶ月)	鹿田遺跡第3次·第4次、津島岡大遺跡第3次		
第5期	2001年1月~2002年3月 (1年2ヶ月)	鹿田遺跡第3次・第4次、津島岡大遺跡第3次・第9次(工学部生体機能応用工学科棟)・第10次(保健管理センター)・ 第12次(附属図書館)・第13次(福利厚生施設北棟)		
第6期	2002年11月~2004年8月 (1年10ヶ月)	鹿田遺跡第7次(医学部基礎棟)、津島岡大第19次(コラボレーション・センター)・第22次(環境理工学部校舎Ⅱ期)		
第7期	2005年11月~2007年8月 (1年9ヶ月)	津島岡大遺跡第23次・24次(文化科学系総合研究棟)		

第7期は2007年2月には95%に濃度を上げた。その後、蓋をあけた状態で徐々に100%の濃度へ到達させた。その状態で8月まで処理を継続し、8月2日~9日に実施した博物館実習において、3回に分割して引き上げを行った。

第8期は、第7期の処理作業を終了後、引き続いて2007年8月9日から開始した。保存処理対象の遺物は、津島岡大遺跡第23次調査から出土した縄文時代の木材(河道出土の杭・流木)および同遺跡第15次調査で出土した弥生時代前期の杭(河道出土)である。開始にあたっては、博物館学の実習作業の中に組み込んで、木器のつけ込みを行った。PEG濃度は40%から開始し、1ヶ月に10%の上昇を基本として作業を進めた。2008年5月にほぼ90%に達し、6月には最後のPEGを投入して95%とした。その後は、蓋を開けた状態で徐々に100%へと濃度を上昇させ、7期と同様に8月に行う博物館実習において木器の引き上げを行った。

なお、本年度は外部委託による保存処理は実施していない。 (山本)

第2節 調査成果の公開・活用

2007年度は、岡山市デジタルミュージアムにおいて、「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20年の発掘成果展」を開催した。キャンパス発掘成果展としては11回目にあたる。学外に本格的な会場を求めた初めての試みであった。その結果、開催期間の10日間で合計2,000人を超す見学者があり、好評を博した。そのほかに、大学生の博物館実習や中学生の職場体験を受け入れるなど、学校教育現場との連携も積極的に行った。遺物あるいは写真資

料などの貸し出しの点数も比較的多い年であった。さらに、年度末には、『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 - 』を刊行した。本センターの調査成果あるいは事業内容などを総括的にまとめた冊子である。

以上のように、本年度は調査成果の公開・活用の点で特筆に値する成果をあげることができた。

1. 公開・展示

a. 展示会

①岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20年の発掘成果展:2007年6月5日~17日

経緯と概要

2007年は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター設置20年にあたることから、その記念事業が計画され、発掘成果展がその中心的柱となった。展示にあたっては、発掘成果を一同に公開するために必要な会場を、学外の本格的な博物館施設に求めることとなった。そして利便性の高い岡山駅西口に立地する岡山市デシタルミュージアムにおいて、同博物館と共催で開催することとなった。開催期間は、2007年6月5日~17日の10日間(10時~18時)とした。

こうした計画がもちあがったのは、2006年12月末~2007年1月初旬であった。それを受けて、2007年1月に具体的な企画が緊急に検討されたが、同時期が、発掘調査報告書の作成時期と重複することとなり、本格的な作業に入ることができたのは、3月中旬であった。4月に入ると、パンフレットの作成あるいは展示のパネルや模型などの作成へと、急ピッチに作業は進行した。その間、運営委員会あるいは大学本部から、様々な形での支援を受けながら、開催へとこぎ着けることができた。

展示のテーマは「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」とし、縄文時代~近世までの人びとの歩みを描き出すことを目的とした。展示の内容に合わせて4つのセクションを設けたが、いずれの展示においても、このテーマを軸におきつつ、展示方法にはそれぞれに工夫を凝らした。また、考古学からの視点のほかに、他分野の研究成果との連携にも重点を置いた。これに関しては、環境理工学部の沖陽子教授・農学部の加藤鎌司教授・理学部の鈴木茂之准教授のご協力により、多角的な展示が可能となり、見学者に新鮮な興味となって展示の効果を高めることができた。

また、展示のほかに、6月10日に「鹿田、古代・中世のにぎわい」、17日には「津島、自然のなかの縄文人」 と題した講演会を開催し、本センター教員のほかに、千葉喬三学長・沖陽子環境理工学部長・久野修義大学院社 会文化科学研究科教授あるいは学外からは岡山市教育委員会の草原孝典氏を講師に迎えた。

会場は、開催期間中に2,161名の見学者で賑わった。具体的な内容は、「第3章1.「20年の発掘成果展」における展示活動と評価 - 見学者アンケートの分析から - 」で詳細にまとめられているので、参照されたい。 (山本)

2. 資料・施設等の利活用

a. 教育機関への支援(授業などの受け入れ)

①博物館実習:8月2日~9日、8月16日(補講)

例年通り、岡山大学文学部が実施している学芸員資格取得のための授業(博物館実習)の受け入れを行った。 期間は8月2日~9日のなかで6日間である。受講生全体を3グループに分けて各グループ10数名とし、それぞれ2日間の受講日程を組んだ。

授業内容は、1日目は、同期間中に実施していた津島岡大遺跡第30次発掘調査における発掘体験である。考古

資料の取り扱いにおける出発点の状況を実感することを目的とした。2日目は考古資料の取り扱いに関する専門的知識の修得を目指した構成とし、その基礎的作業となる遺物の注記あるいは接合作業などの室内作業を体験する講義内容を用意した。こうした内容は、これまでも行ってきたものであるが、今年度は、新たに出土木器の記録作業を取り入れた。実習生が自ら考古資料を観察して記録に残すという新たな試みである。基礎的な作業をこなすというありがちな受動的授業形態にとどまらないようにという工夫であったが、積極的に考古資料に向き合う作業である点で、本講義が目指す知識の取得において効果的であった。担当教員は、山本悦世准教授・岩﨑志保助教・光本順助教である。また、同期間に受講が困難であった学生に対して、8月16日と10月1日の午前中、10月16日のそれぞれ補講を行った。担当は野崎貴博助教である。

②中学生の職場体験:11月20日 (岡山市立高松中学校)、生徒3名

例年通り、岡山市内の中学校から、「中学生の職場体験」の受け入れ依頼が1件あった。中学生職場体験では、 遺物の洗浄、注記や接合作業などの通常業務を行った。

③2007年度非常勤講師への委嘱依頼

岡山大学文学部長より、表6の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼を受け(2008年3月31日)、 承諾した。

職名	氏 名	担当科目	委 嘱 期 間	備考
准教授	山本 悦世	博物館実習	平成20年4月1日~平成21年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	岩﨑 志保	博物館実習	平成20年4月1日~平成21年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	野崎 貴博	博物館実習	平成20年4月1日~平成21年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	光本 順	博物館実習	平成20年4月1日~平成21年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)
助教	池田 晋	博物館実習	平成20年4月1日~平成21年3月31日	通年(水曜日3・4・5限)

b. 調査・研究への支援

① 資料調査および見学・視察

· 宮崎大学宇田津徹朗准教授 · 愛媛大学田崎博之教授

プラント・オパール分析による農耕および環境変遷の検討を目的とした研究に対して、土器の胎土分析への 資料提供を行った。資料は、縄文時代後期土器・突帯文土器である。遺物の出土地点などの詳細は、津島岡大 遺跡第3次調査6点、同5次調査10点、同9次調査3点、同15次調査3点、同17次調査7点、同21次調査3点、 同23次調査3点、同27次調査2点、合計37点である。(2007年12月)

・岡山理科大学富岡直人准教授ほか同大学学生

津島岡大遺跡第3次調査・同5次調査・同6次調査・同9次調査・同15次調査の植物種子(ドングリ)を対象とした古植物生態学研究(2008年2月)

② 図書の外部貸し出し:22件(岡山大学文学部学生ほか)

c. 資料の貸し出し

① 版物の資料提供

·月刊文化財 AUGUST2007VOL.176 第一法規株式会社

埋蔵文化財最前線 弥生前期特集 金田善敬「弥生時代開始前後の岡山平野」

「水田畦畔1」全景写真:『津島岡大遺跡』14(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編集・発行 2004年) P94 図90

・岡山市デジタルミュージアム特別展「うるしの技 木の技-おかやまの木工芸いまむかし-」展示関連刊行物

…写真2点

「木製漆塗り短甲」鹿田遺跡第1次調査 井戸15 (古墳時代初頭)

「蒔絵横櫛」鹿田遺跡第12次調査 土坑 (近世)

・岡山県瀬戸内市発行『邑久町史通史編』…写真2点

「貯蔵穴に埋設された貯蔵穴」『津島岡大遺跡』 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊 「図版25 石器4 S109・309」 『津島岡大遺跡』 16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊

・月刊プラザ岡山

③ 他機関の展示・公開支援

・岡山市デジタルミュージアム特別展「うるしの技 木の技 - おかやまの木工芸いまむかし - 」

(2007年9月~11月)

「漆塗り竪櫛」津島岡大遺跡第5次調査 貯蔵穴SP2 (縄文時代後期)

「木製漆塗り短甲」鹿田遺跡第1次調査 井戸15 (古墳時代初頭)

「蒔絵横櫛」鹿田遺跡 第12次調査土坑 (近世)

「曲げ物」鹿田遺跡第7次調査 井戸3 (古代末)

「曲げ物」 鹿田遺跡第6次調査 SW1 (中世)

· 岡山市立京山公民館

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20周年特別展「自然と人間 地中に埋もれた命の対話」における展示 品および講演「津島自然の中の縄文人」の映像撮影 (2007年6月)

(山本)

第3節 2007年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

山本悦世:基盤研究C「弥生時代~中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」 研究 代表者

岩﨑志保:基盤研究C「弥生時代~中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究」(研究代表者:山本悦世) 研究分担者

2. 論文・資料報告

山本悦世:「瀬戸内〜四国地方出土の植物遺存体」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』日本考古 学協会2007年度熊本大会実行委員会

「津島岡大遺跡における植物珪酸体分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学 埋蔵文化財調査研究センター

『弥生時代~中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究』科研報告書

岩﨑志保:『津島岡大遺跡18』(編集) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

『弥生時代~中世の景観復元と社会における生業の位置づけに関する基礎的研究』科研報告書

光本 順:The Body as Material Culture: A Theoretical Osteoarchaeology. By Joanna R. Sofaer, Anthropological Science 115(1)

「陵墓をめぐる2007年度上半期の動向」『考古学研究』第54巻第2号(共著)

「履修希望授業科目について」『「岡山大学生のジェンダー意識に関する調査」報告書』岡山大学文学 部

池田 晋:『新上小阪遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター(編集・分担執筆)

3. 研究発表など

山本悦世:「瀬戸内~四国地方出土の植物遺存体」日本考古学協会2007年度熊本大会(熊本大学10月21日)

光本 順:「岡山市鹿田遺跡の発掘調査成果」考古学研究会岡山5月例会(岡山大学5月12日)

池田 晋:「弥生時代打製尖頭器の破損と用途」考古学研究会岡山12月例会(岡山大学12月8日)

4. 講演など

山本悦世:「古代・中世鹿田の土地区画」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20周年記念講演会『鹿田、古代・中世のにぎわい』(岡山市デジタルミュージアム6月10日) 「縄文・弥生時代の植物利用 - 埋もれた種子と人々の営み - 」歴風ボランティア公開講座(広島県立歴史民俗資料館9月16日)

「施設整備と埋蔵文化財」文教施設セミナー(社)文教施設協会(岡山大学11月5日)

岩﨑志保:「くぐつまわしと猿形木製品」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20周年記念講演会『鹿田、古代・ 中世のにぎわい』(岡山市デジタルミュージアム6月10日)

野崎貴博:「津島岡大遺跡の縄文人」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20周年記念講演会『津島、自然のなかの縄文人』(岡山市デジタルミュージアム6月17日)

光本 順:「井戸と曲げ物」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20周年記念講演会『鹿田、古代・中世のにぎわい』 (岡山市デジタルミュージアム6月10日)

5. 資料収集·実態調査

山本悦世:弥生時代集落遺跡の調査(福岡県福岡市ほか)

中世城館の資料調査(福井県福井市)

生業に関する実態調査と焼畑シンポジウム参加(宮崎県椎葉村)

岩﨑志保:中国戦国時代青銅器の資料調査(京都市泉屋博古館)

大学博物館の実態調査 (広島大学総合博物館)

野崎貴博:中・後期古墳の踏査・埴輪の実見(群馬県)

光本 順:英国の遺跡・博物館に関する実態調査

弥生時代資料に関する資料調査および中世遺跡の踏査(福井県)

池田 晋: 弥生時代武器形石器の資料調査 (奈良県・滋賀県) 大学博物館の実態調査 (広島大学総合博物館)

第5章 2007年度における調査・研究のまとめ

調査 2007年度には、発掘調査としては、津島岡大遺跡第30次調査(インキュベーション施設建設工事)を2007年6月~12月に、鹿田遺跡第18次調査(中央診療棟新営関連工事)を2007年9月~2008年3月にそれぞれ実施した。件数としては合計2件の発掘調査であったが、鹿田遺跡の調査地点は3箇所に分散していた。立会に関しても比較的規模の大きいものが多く実施された。津島地区では、岡大西門付近あるいは津島岡大遺跡第30次調査地点周辺などで、鹿田地区では、鹿田遺跡第18次調査地点周辺そして第1次調査地点脇の地点などがあげられる。

津島岡大遺跡の調査では、現在に残る条里に合致した位置に、古代に遡る道路状の畦畔を確認できた点は、特に重要な成果といえる。周辺の立会調査でも東西方向の溝が検出されており、今後の条里の復元に関して貴重な資料となろう。さらに、調査がこれまで状況が不明確であった津島岡大遺跡の西端部付近あるいは岡大西門付近におよんだことから、微高地の広がりなどの地形復元ができた点も大きな成果であった。

一方、鹿田遺跡の調査では、新知見として、近世後半期における集落形成の新たな動きを確認することができた点があげられる。その集落に近接して検出された、船着き場の可能性をもつ入り江状遺構との同時性が確認されれば、その意義はさらに高まりそうである。今後の課題として取り組む必要があろう。また、本年度の調査で、弥生時代~近世資料の拡充がさらに進むこととなったが、その中でも、中世(鎌倉時代)における集落の区画溝と判断される遺構の検出は注目される。立会調査で確認された溝は東西方向に走っており、鹿田地区西端付近で想定されている(鹿田遺跡第6次・17次・7次調査地点)屋敷地区画の問題に深く関わる資料と評価される。そのほかにも、主要な調査が集中した鹿田地区南東部の地形復元や遺跡の状況についても、新たな資料を得ることができた。

研究 2007年度の刊行物として、例年通り、発掘調査報告書 1 冊(『津島岡大遺跡18』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊)および紀要 1 冊(『紀要2006』)、そしてセンター報 2 冊を刊行した。『津島岡大遺跡18』では、弥生時代前期水田の関する成果あるいは中期への遺構の変遷などが注目されよう。紀要では、津島岡大遺跡内における土壌中のプラント・オパール分析に関する成果をまとめた報告を 2 件あげることができた。プラント・オパールの残存状況から津島岡大遺跡における稲作の実態を考えたものである。

展示・公開 特筆される点は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20年の発掘成果展として、「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」をテーマにした展示会を開催したことである。会場を学外の本格的設備の整った岡山市デジタルミュージアムに求め、同博物館と共催で行うという初めての試みであった。これまで継続してきた展示会の集大成ともいえる規模の大きなものとなった。期間中(6月5日~17日)、会場は2161名の見学者で賑わい、マスメディアにも大きく採り上げられ、好評を博した。その間には、2回の講演会を企画し、本センターのみならず学内外から、千葉学長をはじめとする多彩な講師を迎えることができた。本センターだけでなく、学内外の多大なご支援・協力のもとに展示会を開催できた点は、非常に意義深いものであった。

そのほかに、例年通り、教育機関への支援として、博物館実習や中学生職場体験の受け入れたほか、鹿田遺跡 第18次調査中には現地説明会を実施した。

本年度は、年度初めから短期間内での展示会の準備に続き、6月以降は、調査研究員の大半が発掘調査を担当するなかで、通常業務を実施していくこととなった。発掘調査をはじめとする数多くの調査に加えて、埋蔵文化財調査研究センター設置20年に際して企画された記念事業の実施は、日常的には多忙を極めることとなったが、その成果は、本センター20年の節目の年にふさわしいものとなった。ここで総括した20年間の歩みを踏まえ、センターとして、またさらに新しい一歩を踏み出していく出発点としていきたい。 (山本)

付 編

- 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程
- (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

平成16年4月1日) 岡大規程第93号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則(平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。)第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

- 第2条 センターは、岡山大学(以下「本学」という。)の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。
 - 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
 - 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
 - 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
 - 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

- 第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価(以下「自己評価」という。)を行い、その結果を公表する。
- 2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

- 第5条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則(平成16年岡大規則第3号)第5条第1項第5号に規定する財務・施設担 当理事をもって充てる。
- 3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

(副センター長)

- 第6条 センターに副センター長を置く。
- 2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。
- 3 副センター長は、センター長の職務を助ける。
- 4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

- 第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。
- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

- 第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。
- 2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

- 第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。
- 2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附目

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

(平成16年4月1日) 学 長 裁 定)

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程(平成16年岡大規程第93号)第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(以下「センター」という。)の運営に関する具体的な事項を 審議する。

(組織)

- 第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
 - 一 埋蔵文化財調査研究センター長(以下「センター長」という。)
 - 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
 - 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
 - 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
 - 五 センターの調査研究室長
 - 六 施設企画部長
- 2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

- 第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。
- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2. 2007年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉梶原憲次:併、財務・施設担当理事

運営委員会

〈副センター長〉稲田孝司:併、大学院文化科学研究科教授

〈調査研究専門委員〉-

沖 陽子:環境理工学部学学部長

今津勝紀:大学院社会文化科学研究科准教授 鈴木茂之:大学院自然科学研究科准教授

〈調査研究室長〉山本悦世:専、埋文センター准教授

〈調 査 研 究 員〉池田 晋・岩﨑志保・野崎貴博・光本順

: 専、埋文センター助教

〈非常勤職員〉上地洋子・西本尚美・山口雄治

井口三智子・片山純子・黒藪美代子:補助員

(2) 運営委員会

【委員】

梶原憲次 財務・施設担当理事(センター長) 柴田次夫 大学院自然科学研究科教授

稲田孝司 大学院社会文化科学研究科教授(副センター長) 沖 陽子 環境理工学部学学部長(調査研究専門委員)

新納 泉 大学院社会文化科学研究科教授 山本悦世 埋蔵文化財調査研究センター准教授 (調査研究室長)

久野修義 大学院社会文化科学研究科教授 入江良広 施設企画部長

大塚愛二 大学院医歯薬学総合研究科教授

【2006年度協議・報告事項】

第62回2007年9月27日 協議事項 ・平成18年度決算について

報告事項・平成19年度予算について

・20周年記念展示会について

・発掘調査について

第63回2008年2月19日 協議事項 ・平成20年度予算(案)について

人事について

報告事項 ・平成20年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画について

3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長

施設部長

I. 請負業者が留意すべき事項

- 1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
- 2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること
- 3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
- 4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。

5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ. 発掘現場で注意すべき事項

- 1. 服装・装備・用具等
 - 1) 安全で機能的な服装にする。
 - 2) 平坦面から2m 以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
 - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
 - 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
 - 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2. 掘削

1)のり面の角度

造成土:通常の土壌の場合は50~60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土:基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い遺構 (深さ1.5m以上の遺構)

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

- 3. 高所(高さ2m 以上の場所)での作業
 - 1) 作業中には安全帯を使用する。
 - 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
 - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
- 4. 発掘用機械類の操作

(ベルトコンベアー・ポンプ等)

- 1)調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないような措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。 (重機関係)
- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
- 5 健康管理
- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1) \sim 3) どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

付表 1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	地	区 名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積 (㎡)	文献	備	考
1980	鹿 田		立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8			
	津島南	BD26	"	農	寄宿舎新営	"				
	津島北		"	文法	合併処理槽施設	"				
	津島北		"	文法経	合併処理槽施設	"				
	津島南	BD09、 BC09~11	"		基幹整備 (共同溝取付)	"				
	津島南	$\begin{array}{c} {\rm BD} \sim {\rm BE04} \sim \\ 07 \end{array}$	"		陸上競技場改修 (配水管施設)	"				
1981	鹿 田		"	医病	高気圧治療室新営	"				
	"		"	"	動物実験棟新営	" 岡山県教育委員会			大学が市教委へ 査の依頼をせっ その後、岡山市 教委が残存壁面 を実施	ずに掘削。 j・岡山県
["		"	"	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会				
["		"	医	運動場改修	"				
	津島	AV06 · 10, AW05 · 14, AX08, BD07, BE10	試掘		排水基幹整備	"			津島AW14区で 包含層確認、協 岡大遺跡第1次	孫議→津島
	津島北	AW14	発掘	法文	排水集中槽(NP-1)埋設	岡山大学	24.0	3	小橋法目黒遺跡 大第1次調査	*:津島岡
	津島南		試掘	学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3			
1982	津島北	AY15 · 16	"	法経	校舎新営	"	7.0			
[鹿 田		"	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0			
	"		"	医病	外来診療棟新営	″ 岡山市教育委員会	4.0	2		
	"		立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1		
	鹿 田	AE ~ AN22, AE22 ~ 26	"	歯	電話ケーブル埋設	″ 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室				

- 文献 1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 3. 古留秀敏 1985『岡山大学津鳥地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2006年度以前の構内主要調査(1983~2006年度)

- * 八例 * 総合番号:調査の地区別通し番号 (立会調査は選択的に保存) 津島岡大護跡第1 次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。 発掘調査には番号に○を付している。 確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に())を付してい ###応呼見と、この、くいない光知両正型四内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含る。 立会調査で、付表に保存する基準:①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査・番号:年度別報告番号 ・文献:付表4・5の番号に対応する。

付表 2 -(1) 発掘調査

<津島地区:津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (㎡)	概 要	文献
*1	1982	-	AW14	文	小橋法目黒遺跡(津島岡大遺跡第1 次調査) :排水集中槽(NP-1)埋設	82.10.28~11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
1	1983	11	BE14·18、 BF17·18、BG14 BH14·15	農	津島岡大遺跡第2次調査 :排水管埋設	84.1.9~3.5	265	弥生時代早~前期集落	4
2	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第2次調査 :合併処理槽埋設	11.14~11.22 84.1.9~3.5	276	弥生時代早~前期水田関連遺構 (溝他)	4
(15)	1986 1987	2	AV00、AW00·01	学	津島岡大遺跡第3次調査 :男子学生寮	12.1~87.6.18、 8.24~9.5	1550	縄文時代後期〜弥生時代早期の貯蔵穴と 河道および集落、弥生時代の前期〜近代 の水田・溝、古代の条里関連溝	19
16	1986	3	BF·BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 :屋内運動場	87.1.19~1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
26	1988	1	AY06~08、 AZ06·07	大自	津島岡大遺跡第5次調査 :自然科学研究科棟	6.27~89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と 河道・弥生時代末~近世の水田関連遺構	27
27	1988 1989	2	AV · AW04 · 05	工	津島岡大遺跡第6次調査 :生物応用工学科棟	9.20~89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里 関連溝、弥生時代前期〜近世の水田・溝	35
28	1988	3	AV · AW05 · 06	工	津島岡大遺跡第7次調査 :情報工学科棟	10.12~89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期~近世水田	35

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (㎡)	概 要	文献
39	1990	1	AY·AZ08	大自	津島岡大遺跡第5次調査 :自然科学研究科棟	4.3~4.21	90	古墳時代後期の溝	27
44	1991	2	BD18·19	農·薬	津島岡大遺跡第8次調査(A地点) :遺伝子実験施設	7.23~12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代〜近世の溝	32
45	1991	3	BH13	農·薬	津島岡大遺跡第8次調査(B地点) :合併処理槽	7.23~12.2	140	弥生時代溝、古代~近世水田	32
50	1992	1	AU~AW04	I	津島岡大遺跡第9次調査 :生体機能応用工学科棟	7.1~93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代 〜近世の水田址	47
51)	1992 1993	2 1	BB~BC10~11	保	津島岡大遺跡第10次調査 : 保健管理センター	93.2.1~3.31、 4.17~7.31	400	弥生時代後期~古墳時代集落、近世耕作 関連遺構	64
54	1993	2	AV~AW11~12	情	津島岡大遺跡第11次調査 : 総合情報処理センター	9.14~94.1.11	640	縄文後期遺構	36
55	1993 1994	3 1	AV~AW13~14	図	津島岡大遺跡第12次調査 :図書館	94.2.9~3.31、 4.1~11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代時代中期~ 古墳時代溝、古代~近世溝(条里関連)	64
64	1994 1995	2	AW~AX11~12	事	津島岡大遺跡第13次調査 :福利厚生施設北棟	10.6~11.30, 95.7.10~10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥 生~古墳時代溝、近代耕作面	41
69	1995	2	BB∼BC12 · 13	事	津島岡大遺跡第14次調査 :福利厚生施設南棟	10.25~96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生~古墳時代の溝	46
70	1995 1996	3 1	AW00 · 01	サ	津島岡大遺跡第15次調査: サテラ イトベンチャービジネスラボラト リー	96.1.16~4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と 河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期 水田、古墳〜中世水田・溝	38 72
74	1996	2	BD19~20	農薬	津島岡大遺跡第16次調査 :動物実験棟新営	96.5.7~15	30.3	A地点:縄文時代と古墳時代の土坑、 B地点:中世の溝、古代の柱穴列、弥生 時代の水田	44
75	1996	3	AW02~04	環	津島岡大遺跡第17次調査 :環境理工学部新営	96.5.21~1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水 田、古代の水田	44
85	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査:福利施 設(南)新営に伴うポンプ槽取設	98.4.7~4.10	16	古代の溝状遺構	53
86	1998	3	AZ09·10	理	津島岡大遺跡第19次調査 :コラボレーションセンター	98.7.27~99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時 代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
87	1998	5	AY07	環	津島岡大第20次調査:校舎(I期) 新営に伴うポンプ槽取設	98.10.19~28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査 :エレベーター設置	98.11.6~24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期~前期 溝、古代土坑・溝	65
89	1998 1999	8 2	AW02·03	環	津島岡大遺跡第22次調査 :校舎(Ⅱ期)	1999.3.1~7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水 田畦畔、古墳時代溝、古代〜近世溝(条 里関連)・水田畦畔	53
104	1999 2000	5 1	AZ15 · BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査 :総合研究棟	00.2.3~7.28	1339	縄文時代後期河道·杭列、弥生前期河道· 堰·溝、弥生中期~近世溝	56
(11)	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査 : 総合研究棟渡り廊下建設	00.12.5~14	34.2	縄文時代後期河道·杭列	61
(1)	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査 :散水施設設置	01.1.29~31	20.0	中世〜近世の溝・杭	61
(13)	2000 2001	5 1	BC~BD14~15	事	津島岡大遺跡第26次調査 :事務局	01.3.26~9.30	1550	縄文~弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・ 炉、近世の溝・堰	56 61
(2)	2001 2002	2 1	BB~BC14~15	-	津島岡大遺跡第27次調査 : 創立50周年記念会館	02.2.1~6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代 の溝、中世の畦畔(条里関連)	66 68
127	2002	2	AW~AY06~O8	大自	津島岡大遺跡第28次調査 :自然科学系総合研究棟	4.30~9.20、 11.28~03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世~古代の畝・ 溝	71
(28)	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査 :共同溝	02.9.18~10.3	62.6	弥生~古墳時代の溝・ピット	71

<鹿田地区:鹿田遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (㎡)	概 要	文献
1)	1983 1984	9	AU~BD28~40	医病	鹿田遺跡第1次調査:外来診療棟	7.27~11.22 84.1.9~8.31	2188	弥生時代中期後半~中世集落	7
2	1983	10	BG~BI18~21	医病	鹿田遺跡第2次調査:NMR-CT室	8.1~12.30	176	弥生時代後期~中世集落	7
10	1986	1	CN~CU27·28, CT~CY19~27, CX~DD16~25, DD~DG22·23	医短	鹿田遺跡第3次調査:校舎	6.2~11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10
12	1987	3	DD~DF25、 DG~DI27·28	医短	鹿田遺跡第4次調査 : 校舎周辺の配管	11.2~11.21	30	古代の河道	10
13	1987	2	BB~BH35~42	医病	鹿田遺跡第5次調査:管理棟	10.6~88.3.2 88.3.23~3.31	1192	弥生時代中期後半~中世の集落	24
16	1990 1991	2 1	BW~CC67~71	ア	鹿田遺跡第6次調査 :アイソトープ総合センター	11.20~91.6.30	690	弥生~古墳時代の集落、中世集落	40
25	1997 1998	4	BR55~BX61、 BY56~57	医	鹿田遺跡第7次調査:基礎医学棟	98.2.27~8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・ 溝	50 53
27)	1998	4	BP~BS30~32	医病	鹿田遺跡第8次調査:RI治療室	98.7.28~9.1	165	古墳時代溝·中世溝	53
28	1998 1999	7 1	CD33~37, CE·CF28~37, CG~CJ20~37, CK·CL25~37	医病	鹿田遺跡第9次調査:病棟	98.11.27~99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世〜近世集落	53

		_							
総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (㎡)	概 要	文献
31)	1999	3	CD·CE10~12、 DD~DF16~22	医病	鹿田遺跡第10次調査:共同溝関連	99.5.7~99.10.14	244.1	古代の杭列 (河道内)、弥生時代ピット、 近世溝	56
32	1999	4	CD~CM19~42	医病	鹿田遺跡第11次調査:病棟	99.8.19~12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世 ~近世集落	56
40	2000 2001	2 -	CO~CV35~44, CN·CM38~41, CN28~38	医病	鹿田遺跡第12次調査 :エネルギーセンター	00.10.2~01.05.10	1897	弥生時代溝·河道、古墳時代·中世集落、 近世土坑·溝	56 61
46	2002	3	BL~BR46~51	大医 歯	鹿田遺跡第13次調査 :総合教育研究棟	02.4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・ 溝中世の集落、近世土坑群	71
55	2003	1	CD~CM12~20	医病	鹿田遺跡第14次調査 :病棟(Ⅱ期)	03.7.31~12.17	1331	弥生~古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・ 土坑・溝・近世のため池・土坑	71
56	2003	2	BQ~BS45·46	大医 歯	鹿田遺跡第15次調査 :総合教育研究棟外構工事	03.10.16~10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝、中世溝群	71
59	2004	1	AH~AI6 · 7 AF12 · 13, AN~AO4	医病	鹿田遺跡第16次調査 :立体駐車場新営工事	04.10.21~11.8	49.15	近世〜近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世 の土坑、弥生〜古墳の河道	81
60	2006	1	BR~BY60~64	医病	鹿田遺跡第17次調査 :総合研究棟(医学系)	06.7.10~11.14	642	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井 戸·溝·建物、近世土坑·溝	87

<三朝地区:福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	調査期間	面積 (㎡)	概 要	文献
1	1997	1 · 2	_	固	福呂遺跡第1次調査:実験研究棟	97.5.10~20、 7.28~31	269	縄文時代早期·弥生時代中期·中世·近世集落	55
2	1997	3	-	固	福呂遺跡第2次調査:実験研究棟 新営に伴う工事スロープ部分	97.11.25~12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表 2 -(2) 試掘・確認調査 <津島地区:津島岡大遺跡>

掘削深度 造成土厚 総合 年度 番号 權内座標 所属 か献 調査名称 要 概 番号 (m) (3) 1983 農 合併処理槽予定地 2.5 →津島岡大第2次調査:1983年度 4 1983 農 排水管中間ポンプ槽予定地 BE∼BG14、 29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査: 5 1983 3 BE·BH15、BE18、 農 排水管埋設予定地 2.0 1 BF16~18, BC18 1983 農場畜舎新営予定地 20~30 2ヶ所、土器片<1987年度工事立会> 6 4 BF22.23 農 0.6 1 2ヶ所、→津島岡大第26次調査:2000年 (7) 1983 5 BC·BD15 事 大学事務局新営予定地 2.0~3.0 0.9 1 BB10 保 保健管理センター新営予定地 2.0~3.0 →津島岡大第10次調査:1999年度 1983 0.8 (8) 6 津島宿舎新営予定地 十器片<1987年度工事立会> 事 9 1983 BI16 0.9 0.9 10 1983 8 AW05 T. 校舎新営予定地 3.0 十器片 遺構など未確認<1986年度工事立会> 12 1985 BE08 教養 講義棟予定地 3.5 5 13 1985 AX02 教育 研究棟予定地 2.6~3.4 1.2 3ヶ所、縄文~弥生土器出土 5 14 1985 AV·AW99~01 男子学生寮新営予定地 2.0~3.0 →津島岡大第3調査:1986年度 5 3 →津島岡大第4次調査:1986年度 1986 BF·BG09 学 屋内運動場新営予定地 2.4, 1.2~1.7 (17)3 1.1 6 自然科学研究科棟新営予定地 →津島岡大第5次調査:1988年度 1986 (18)4 $AY \cdot AZ07$ 大白 $1.6 \sim 3.2$ $0.6 \sim 0.8$ 6 AP02 (土生地区) 22~28 縄文時代・弥生時代・近世の遺構面 22 1987 4 事 外国人宿舎建設予定地 8 総合情報処理センター新営予定地 →津島岡大第11次調査:1993年度 (23) 1987 5 AV11 情 2.0~3.0 2 8 身体障害者用エレベーター建設予 中世・近世の遺物、古代・中世の水田 1987 AY09 理 約1.0 8 24 <継続して調査> 定地 身体障害者用エレベーター建設予 縄文時代遺構、縄文·中世·近世土器 25 1987 7 BD09 教養 2.5 0.7 8 <継続して調査> 校舎建設予定地 29 1988 17 AX04.06, AW04 2.0~3.5 →津島岡大第6 · 7次調査:1988年度 11 動物実験飼育施設・遺伝子実験施 30 1988 19 BD18·19 農·薬 2.3 $1.1 \sim 1.2$ →津島岡大第8次調査:1991年度 11 中世・近世の遺物出土 31 BC29 事 国際交流会館 1.2 11 1988 20 2.5 <1988年度工事立会> 縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、 縄文時代後期~中世土器片 33 1989 2 AZ·BA05 教育 身体障害者用エレベーター 2.5 0.8 14 <継続して調査、面積38.5㎡> 中世~明治の水田の畦畔・溝 34 1989 3 AZ17 大自 合併処理槽設置予定地 4.0 1.6~2.0 14 <1989年度工事立会> 弥生時代早・前期の畦畔 <1989年度工事立会> 35 1989 4 BD02 学 学生合宿所予定地 2.0~3.2 1 14 →津島岡大第12次調査:1993年度 (36) 1989 AV·AW13 义 図書館新営予定地 14 5 3.0 $1.4 \sim 1.6$ 弥生時代前期畦畔、中世土器片 1990 学 学生合宿所ポンプ槽予定地 40 3 BC02 2.5 1.1 18 41 1990 6 AW · AX11 事 福利厚生施設予定地 39 $1.4 \sim 1.6$ →津島岡大第13次調査:1994年度 18 56 1993 3 BE~BF22~23 農 農学部汎用耕地実験実習施設 1.5 中~近世耕作土 30 GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点出土 65 1994 BD20 動物実験施設 <盛り土保存>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1 · 2.4	1.6	明治〜中世の土層確認、以下は湿地状態、 遺構・遺物無し(明治畝のみ) <工事立会>	38
72	1995	5	AW02 · 03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査:1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生~古墳時代の溝 2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に 伴う試掘調査	2.7~3.4	1.3	→津島岡大第19次調査:1998年度	53
(91)	1998	10	AW02·03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査:1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL-1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02·03·06、 AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4~3.8	0.8~1.6	5ヶ所、TP1・3・5: 微高地状、TP2・4 は低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生 溝・ピット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文· 法·経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.81.1	→津島岡大第23次調査:1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00, AX00·02·03, AZ06, AW08	-	縄文~弥生時代における環境復元 に伴う調査	2.6~3.2	1.7~0.9	6ヶ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、 古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	-	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査:2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1		黒色土の落ち検出	71

<鹿田地区:鹿田遺跡>

1201		120							
総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(4)	1984	1	BU30·31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5~0.7	中世土器·包含層確認<盛土保存>	2
(5)	1984	2	CT·CU25、 CZ19·20·23·24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8~1.0	→鹿田第3次調査:1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、 AJ·AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ 範囲確認調査	2.2~3.0	0.9~1.4	弥生時代~中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY·BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2~1.3	→鹿田第6次調査:1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査:1997年度	50
29	1998	11	CF·CG43·44、 CH25·26、 CK35·36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0~2.4	1.0	→鹿田第9次調査:1998年度	53

<倉敷地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1990	4	_	資生 研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	1	資生 研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚 (m)	概 要	文献
163	2006	1	_	教育	附属小学校校舎建替え工事に伴う 調査	3.0	0.3~0.5	4ヶ所、近世・近代溝3条、中世?畦畔	87

<三朝地区:福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1997	5 · 6	_	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調 査	1.66~2.1	0.8	2ヶ所→福呂第2次調査:1997年度	50
5	2004	1	_	固	三朝宿泊所増築工事に伴う試掘・ 確認調査	1.3	0.5~0.9	3ヶ所、遺構・遺物・遺物包含層確認されず	81
6	2004	2	-	固	高圧線・電話線切替工事	1.0	0.85	1ヶ所、河床礫、段丘礫層確認	81

付表 2 一(3) 立会調査

<津島地区:津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
11	1984	20	BI15~17	事	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0~2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08·09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07·08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10·11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ちを 推定	11

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚 (m)	概 要	文献
37	1989	8	AZ08	大自	自然科学研究科棟新営 : 工事用道路	1.4	(III)	弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	I.	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16	AV04~10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18
43	1990	19	BC02~04、 BD03·04	事	補償工事 I : 電柱移設 岡山市道本町津島東線拡幅に伴う 補償工事 I	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土	18
10	1001	-		dta -te:	: 学生合宿所給排水管設置	0.0	0.0		- 01
46	1991	9	BC18	農·薬	防火用水撤去 津島地区基幹整備(電気)	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石鏃出土	21
47	1991	17	BB16	事	: ハンドホール・アース板	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治層~淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備(電気) :アース板	1.7	1.0	GL – 1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC·BE·BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL−1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	農·薬	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75~ 1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本	25
53	1992	34	AV12	事	 	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB~BC10~12	保	保健管理センター新営に伴う外構 工事ほか:電気配線	1.8	0.6~0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒 褐色土はGL-1.15~1.7m、その直下に基 盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟 改修:電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備:RI共同利用	3.2	_	明治~中世層・暗褐色土層、古代溝?、	30
-					施設排水処理施設他設置 津島地区環境整備:南北道路沿水		1.0	縄文晩期?土器片	
60	1993	28	BD~BE13	事	路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世~中世層を確認	30
61	1993	33	BB~BG12~13	事	津島地区環境整備:水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	10ヶ所、近世〜中世層まで掘削、一部で暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD∼BE12·13	事	津島地区環境整備:信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39~ 41	BB05~07、 BC05·41	学	野球場バックネット・防球ネット 改修	2.0~3.2	1.0	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下は黄色砂~青灰色粘土	30
66	1994	9	BD·BE·BF04~07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削 (径80cm・深さ10m)、GL	33
			AV10, AW10,		総合情報処理センター新営電気工			-1.92~2.0mで黒色土 近世 2 面、中世(近世か?) 1 面、GL-	
67	1994	13	AU11	情	事	2.2	1.5	1.7mで黒色土、近世溝	33
68 76	1994 1996	20	BD20 BC18	農・薬	焼却場 動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土 黒色土層付近まで掘削	33 44
					動物実験棟新営に伴うハンドホー				
77	1996	5	BD16~19	農·薬	ル設置工事	1.3	-	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営:外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~ 1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世層?1面・弥生層?1面	44
79	1996	13	AV03~AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営:配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺 構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	-	黒色土まで掘削	44
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質	44
82	1997	16	BB13~BH13	事	: 雨水桝・外構工事 南北道路ガス管埋設工事	1.5	_	土・灰褐色粘質土 中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11~BA13	事	南北道路ガス管埋設工事	1.5	_	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新	2.0	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代~近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	設工事 構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL - 1.42m で黒色土	53
95	1998	22		<u> </u>	コラボレーションセンター支障配	1.4	1.0		53
			AZ09、BA09	理	管布設替工事 表類和作品: 第二字			GL-1.4mで黒色土	
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95 0.65~	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.2~1.4	0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ桝撤 去工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土層、GL-2.2m まで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03~AY07	環	実験排水管埋設工事	1.4	0.6~1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代 層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1~1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文 基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水桝設置工 事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管埋設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00, AZ01 · 03	施	構内外灯設置工事	1.15~1.35	0.5~1.2	3ヶ所で黒色土 (GL-0.85~1 m) 確認	56
108	1999	12	AZ08 · 09	理	コラボレーションセンター新営工 事に伴うハンドホール	1.48~2.1	1.03~ 1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴うスロープ 設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近 代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に 伴う排水桝	1.0~1.2	0.8~1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土	61
							1	<u> </u>	

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事 : 理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・ 灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10, AY10	理	校舎改修機械設備工事:電気	0.85~1.60	0.8~1.1	南側ハンドホールはGL-1.6mまで掘削、 GL-1.52mで中世溝(南東から北西方向 に向かって走行)	61
119	2000	42	AW08、AX08	I	精密応用化学科棟都市ガス改修工 事	1.6~2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土(中世?)	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5~1.7	1.0	GL-1.4mで中世層?、軍庭園の築山、 土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0~1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB~BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5~2.1	1.2~1.4	2 ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1 mまで谷部か?	66
124	2001	27	BB · BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5~1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65~ 0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層(古代)を確認	66
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電 室基礎解体工事	1.05	0.45~ 0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13~15	事	本部棟新設工事:排水桝・管路	1.2~2.5	0.7~1.2	突帯文土器・石器がまとまって出土、近 世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新営その他工事 : 雨水排水桝・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13 · BD14	事	本部棟新営その他工事: 外灯	0.95~1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL -1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07 · 09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0~1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB~BC14~15	事	創立五十周年記念館新築工事 : 汚水排水	1.0~2.3	0.85~ 1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13~15	五十	創立五十周年記念館新築に伴う掘 削(雨水排水桝·管埋設工事)	1.3	0.7~0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	エ	総合研究棟新営機械設備工事 (ガス配管埋設工事)	1.4	0.9	古代層?まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層確認	74
139	2003	7	BB,BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工 事(仮設電力・電話引き込み建柱 工事)	1.7	0.7	径0.5m、GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5~1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06~BA06	I	総合研究棟新営その他工事 (雨水排水)	1.7	0.7~0.8	標高3.3~3.4mで黒色土、弥生~古代の東西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔	74
141	2003	14	AW,AX06,07	工	総合研究棟新営電気設備工事 (外灯)	1.4	-	中世層まで掘削	74
142	2003	15	AW~AX06~07	エ	総合研究棟新営その他工事(排水)	0.5~2.5	1.6	桝で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、 弥生溝	74
143	2003	17	BC~BD15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事 (外部給水・消火配管)	2.75	1.1	桝で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21-1	BG∼BH13	事	公共下水桝接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	1.8	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21-2	BE∼BG10	事	公共下水桝接続工事No.2区間 体育館東~武道場西	1.95~2.25	0.8~0.9	桝で縄文基盤層、管路で弥生早・前期ま で掘削、弥生溝・縄文土坑	74
146	2003	21-4	AZ16	事	公共下水桝接続工事No.4区間 文·法·経2号館西	2.45	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21-5	BA10	事	公共下水桝接続工事No.5区間 理学部	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	74
148	2003	21-6	BG22	事	公共下水桝接続工事No.6区間 農学部4号館東	1.5~1.9	0.9~1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生~古墳初頭 ピット、近代畦畔状遺構	74
149	2003	21-7	BI16	事	公共下水桝接続工事No.7区間 津島宿泊所	1.15~1.3	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21-8	BI15	事	公共下水桝接続工事No.8区 間南宿舎	2.0~2.45	1.1	縄文基盤層まで掘削	74
151	2004	1	BB~BD26	事	公共下水桝接続工事 留学生等宿泊施設	1.22~1.68	1.0	中世層まで掘削	81
152	2004	6	BB9·10	事	津島キャンパス環境整備留学生センター西	0.5~1.15	0.4~0.6	弥生後期包含層・遺構・礫層確認	81
153	2005	3	AV08	エ	工学部総合研究棟改修工事 (仮設電柱掘削取り付け)	8.5	1.5	GL-0.9mまで造成土、以下、青灰〜白 灰色の粘質土3層を確認、「黒色土層」 は確認されず	83
154	2005	5	AW09	工	工学部総合研究棟改修電気設備工 事 (アース板設置)	1.8	-	基盤層~黒色土~明治の土層堆積確認	83
155	2005	9	BE02、BG07	事	キャンパス環境整備 (門扉改修等) 工事	1~1.3	0.7	東07地点:GL-0.7mで明治耕土と畦畔・溝、-1mで中世層確認、東08地点:近世畦畔、中世層確認	83
156	2005	13	BC~BE03、BB· BC02	事	プール改修 (排水管改修) 工事	0.75~2.4	0.8~1.3	縄文基盤層〜近代層の堆積確認、「黒色 土」確認、弥生〜古墳の溝多数、近世土 坑、近代大畦畔・溝	83
157	2005	14	BB · BC04	事	サッカー場防球ネット設置工事	2.0~2.2	-	オーガーによる掘削、一部で「黒色土」 確認	83
158	2006	2	AX10	エ	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事 :耐震工事に伴う支障物撤去・PC 耐震柱基礎掘削	8.18~21,9.8	1.8	近代耕作土層以下、中世層まで5枚の層 を確認。近世面で南北方向の溝	87

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚 (m)	概 要	文献
159	2006	3	AZ~BA02~04	教育	教育学部公共下水桝接続工事	9.4~21	2.3	桝1箇所、深さ2.3m。配管、深さ1.05~ 1.92m。黒色土層あるいは基盤層まで掘 削。東西方向の溝	87
160	2006	5	BA·BB02、BC02	事	プール改修配管接続工事	9.28~10.3	1.7	黒色土層あるいは基盤層まで。古墳時代 頃の溝状遺構	87
161	2006	11	AX08~09	I	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事: 耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	12.25~27	1.8	古墳~弥生層	87
162	2006	12	BF16	農	農学部2号館南電柱移設	07.2.23	2	中世層まで	87

<鹿田地区:鹿田遺跡>

✓雌□	비地즈	・雌口	出退砂 <i>></i>						
総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1983	23	AO~AW22	医病	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	-	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集 積	1
7	1985	6	AW~BH23、 BH·BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管埋設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24、 AF23	医病	基幹環境整備緑化工事 : 電気配線ハンドホール掘削	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BI~BN4	医病	記念館東側汚水管改修工事	0.8~1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL~CR12, CR~ CX13, CX~DA14	医短	護岸及び囲障工事	2	0.8~1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構	8
15	1989	46	CE30·37·44、 CJ·CK45、 CL28·29	医病	旧管理棟跡地環境整備:外灯基礎	1.2~1.5	0.7~1.0		14
18	1992	29	BW71	ア	アイソトープセンターL形側溝・ 集水枡	1.4~1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器 1 点	25
20	1994	5	DH60~62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あり、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	BG · BI18	医病	鹿田地区基幹整備 : 附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、 遺物なし	38
22	1995	14	CD07 · 08	医病	鹿田地区基幹整備 : 液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・古代の土師器出土	38
23	1995	17	CD08~CC11	医病	鹿田地区基幹整備: 附属病院液酸 タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工 事基礎などで区間全長の1 / 2程度は破 壊	38
24	1995	23	DF56~67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器 片・石器出土、調査区西寄りは、GL-2 m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65~71	医	研究棟新営に伴う給排水桝・管路	1.2~1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42 · 43、 BI43 · 44	医病	基幹整備(電気設備):地中配管	1.25~1.45	0.45~ 0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺 構	56
36	1999	41	CF21~28, CF~CL28, CD~CF28~33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	-	面積18㎡、鹿田11次調査3区南側部分で 中世ピット	56
37	1999	46	CN46~DE49	医病	病棟新営に伴う汚水桝・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝等	56
38	1999	47	CM · CN · CP · CR · CT58、CV · DA · DC · DD · DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0~2.3	-	11 ヶ所、南側 6 ヶ所は河道、7~10ヶ 所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う汚水検水桝	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘 削か。	56
41	2000	25	CD41~CN45	医病	病棟新営その他工事 : 管路・雨水桝	1.6~1.8	-	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15 · 21 · 27, CO31 · 42, CS45, DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	_	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ 取付工事	0.8~1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG~DJ28~67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1~2.3	1.3~1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	BR~CA43, CA43 ~55, CA44~ CL45, BR~CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調 査に伴う機械設置工事	1.65	0.7~0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土し た地点あり。	66
47	2002	10	CH11~CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0~1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT · BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5~1.8	-	2ヶ所、GL-1.22mまで掘削した地点で中世または古代層確認	71
49	2002	22	CQ41~42	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事:共同溝排水管	1.5	-	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、 CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事:外灯	1.47~1.66	-	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36~45	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事:外溝	0.9~1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI~BS45~53	大医 歯	総合教育研究棟新営その他工事	1.85~2.0	0.8~1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事:植採移植	1.25	-	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	-	底面で弥生~古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS~BZ45、CA~ CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事 (屋外排水)	1.7	0.7~1.0	弥生中期?包含層まで掘削、近世土坑·中 世ピット多数、低地部確認	74
56	2003	9	BL~BS45~53	医	総合教育研究棟外構工事 (雨水・汚水・実験排水)	0.8~1.75	0.7~0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、 古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確 認	74
57	2003	10	BR~BS50~54	医	総合教育研究棟給水配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事 (外灯)	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16、AF~ AJ17、AJ9~16	医病	医病構内支障ガス管配管替工事	1.0~1.9	0.7~0.8	接続部で近世〜近代の水田層、中世の畦 畔を確認。弥生〜古墳の河道と推定され る砂層を確認。	81
61	2004	5	AE4~16, AF~ AI16, AI9~15, AJ~AO09	医病	医病構内支障給水管配管替工事	0.9~1.9	0.85	桝で中世?〜近代の畦畔確認。弥生〜古 墳の河道と推定される砂層を確認。	81
62	2005	3	DH~DJ18、DJ19	医	医学部変電所ピット周辺高圧ケー ブル設置工事	1.1~2.5	0.7~1.1	一部で弥生〜近代層確認	83
63	2006	6	CT~CU45	医病	エネルギーセンター棟新営に伴う 工事	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複、同様の状況	87

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1983	13	_	教育	附属中学校新営	4.0~5.0	_	シルト層中	1
2	1997	29	_	教育	附属小・中学校他囲障改修工事	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

<三朝地区:福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚 (m)	概 要	文献
4	1997	18	_	固	実験研究棟新営に伴う電気埋設管 路工事	1.0	-	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上 昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要(2007年度現在)

13260	-11-11-2		(1450) 152 153 16	~ _	001 11.	又 うし エ /					
所属	種類	調査名・地区名		- 4	箱 数(:	1 箱:約30)リットル)		備考	文献
771 作時	生炽	調重石 地区石	総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*	(主要時期・特殊遺物)	- 大帆
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期~中・近世、木製短甲・ 人面線刻土器・ガラス滓等	7
"	"	鹿田第2次調査(NMR-CT室)	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期~中世、田舟・木簡等	"
医短	"	鹿田第3次調査(校舎)	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代~中世、石帯	10
"	"	鹿田第4次調査(配管)	3.5	2	0.3		0.2		1	古代、鹿角製品	"
医病	"	鹿田第5次調査(管理棟)	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期~中・近世	24
ア	"	鹿田 6 次調査 (アイソトープ総合センター)	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製椀	40
医	"	鹿田第7次調査(基礎医学棟)	81	66		10		1	4	弥生~近世、猿形木製品	53
医	"	鹿田第8次調査 (RI治療棟)	8	8						弥生~中世	53
医病	"	鹿田第9次調査(病棟I期)	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生~近世、木簡3点	56
医病	"	鹿田第10次調査(共同溝)	2	2						古代~近世	56
医病	"	鹿田第11次調査(病棟 I 期)	74	66		4		2	2	弥生~近世、木簡1点	56
医	"	鹿田第12次調査 (エネルギーセンター)	147	77	1	54			15	弥生~近世、櫛	61
医病	"	鹿田第13次調査(総合教育研究棟)	254	211	5	10			28	弥生~近世	71
医病	"	鹿田第14次調査(病棟Ⅱ期)	66	54		3			9	中世~近世	74
医	"	鹿田第15次調査 (総合教育研究棟関連)	4	4						古墳初頭·中世	74
医病	"	鹿田第16次調査 (立体駐車場エレベーター他)	1	1						弥生~近世	81
医	"	鹿田第17次調査 (総合研究棟 (医学系))	111	68	4	8		1	30	弥生~近世	87
医病	"	鹿田第18次調査(中央診療棟関連)	188	118	19	18			33	弥生~近世	本紀要
全	"	津島岡大第1次調査 (NP-1)	5	0.5	0.5	4				弥生中期~古代	3
農	"	津島岡大第2次調査 (農学部合併処理槽・配管)	17.5	12	1.5				4	弥生早期~弥生前期	4
学生	"	津島岡大第3次調査 (男子学生寮)	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期~古墳初頭、古代~近世 石製指輪、蛇頭状土器片	19
"	"	津島岡大第4次調査(屋内運動場)	1	1						弥生早期~弥生前期<試掘調査遺 物を含む>	6
大自	"	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	82	68	3	1	8		2	縄文後期~古墳、古代~近世、耳 栓·木製櫛(縄文)、堅果類	27
I	"	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	49	33	1	9	6			縄文後期〜近世、人形木器、アンペラ、人形土製品	35
I	"	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期~近世	35

所属 種類	調査名・地区名 津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設) 津島岡大第9次調査 (保健管理センター) 津島岡大第10次調査 (保健管理センター) 津島岡大第11次調査 (保健管理センター) 津島岡大第12次調査 (図書館) 津島岡大第12次調査 (図書館) 津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北) 津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第15次調査 (動物実験棟) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第77次調査 (東海理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津島岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津島岡大第20次調査 (現境理工学部大第20次調査 (環境理工学部を含 II 期) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部を含 II 期) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部を含 II 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校 をII 期) 津島岡大第22次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (自然科学第26次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第28次調査	総数 11.5 50.5 87 5.5 55 12.5 13 68 0.3 85 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33 15	土器	石器 0.5 2.5 0.5 1 0.5 10 11 1 2 4 0.5 0.1	大器* 3 7 20 20 4 4 3 60 1 0.2	リットル 種子*	その他 2 1	サンプル* 1 15 2 10 1 1 24 12 3 3 8	備 考 (主要時期・特殊遺物) 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期・中世、縄文後期・弥生早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期~近世 人代揮部材、曲 しげ物 縄文後期~近世、枯(縄文)、石棒	文献 32 47 65 36 65 41 46 72 44 77 53 64 53
 工 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	(遺伝子実験施設)	50.5 87 5.5 55 12.5 13 68 0.3 85 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	30 78 3 24 12 12 14 0.3 62 1 1 5 26 20 1 0.1	2.5 0.5 1 0.5 10 11 1 2 4 0.5	7 20 20 4 3 60 1	2		15 2 2 10 11 24 12 3 3 3	縄文後期~近世 郷文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	47 65 36 65 41 46 72 44 77 53 64 53 64 77
全	(生体機能応用工学科) 津島岡大第10次調査 (総合情報処理センター) 津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター) 津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北) 津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北) 津島岡大第16次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (市福利ボンブ槽) 津島岡大第18次調査 (東高田大第18次調査 (東海田大第20次調査 (現境理工学部ポンブ槽) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第22次調査 (境合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (場合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (場合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (場合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (場合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (自然科学系総合研究棟 津島岡大遺跡第26次調査 (自然科学系総合研究棟 津島岡大遺跡第29次調査 自然科学系総合研究棟 津島岡大遺跡第29次調査	87 5.5 55 12.5 13 68 0.3 85 1 7 31 7 90.5 2.1 0.3 33	78 3 24 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	0.5 1 0.5 10 11 11 2 4 0.5	7 20 20 4 3 60 1	2		2 2 10 1 24 12 3	弥生前期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期~弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	65 36 65 41 46 72 44 77 53 64 53
() () () () <td>(保健管理センター) 津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター) 津島岡大第12次調査 (図書館) 津島岡大第13次調査 (図書館) 津島岡大第13次調査 (図書館) 津島岡大第14次調査 (福利厚生施設地) 津島岡大第5次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (戸部レンジー) 津島岡大第18次調査 (東海理工学部投舎 II 期) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部表舎 II 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部技舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第26次調査 (総合研究権度)施下) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館)</td> <td>5.5 55 12.5 13 68 0.3 85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33</td> <td>3 24 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1</td> <td>1 0.5 10 11 1 1 2 4 0.5</td> <td>20 20 4 4 3 60 1</td> <td>2</td> <td></td> <td>2 10 1 24 12 3</td> <td>縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世</td> <td>36 65 41 46 72 44 77 53 64 53 64</td>	(保健管理センター) 津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター) 津島岡大第12次調査 (図書館) 津島岡大第13次調査 (図書館) 津島岡大第13次調査 (図書館) 津島岡大第14次調査 (福利厚生施設地) 津島岡大第5次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (戸部レンジー) 津島岡大第18次調査 (東海理工学部投舎 II 期) 津島岡大第21次調査 (環境理工学部表舎 II 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部技舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第26次調査 (総合研究権度)施下) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館)	5.5 55 12.5 13 68 0.3 85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	3 24 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1	1 0.5 10 11 1 1 2 4 0.5	20 20 4 4 3 60 1	2		2 10 1 24 12 3	縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	36 65 41 46 72 44 77 53 64 53 64
() () () () <td>(総合情報処理センター) 津島岡大第12次調査(図書館) 津島岡大第13次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第19次調査(「コラボレーション・センター) 津島岡大第19次調査(「コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (「エデ部エレベーター) 津島岡大第21次調査 (「東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第22次調査 (東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟) 津島岡大第25次調査 (東島岡大電路第27次調査 (割立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (割立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査</td> <td>55 12.5 13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33</td> <td>24 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1</td> <td>1 0.5 10 11 1 1 2 4 0.5</td> <td>20 4 3 60 1</td> <td>2</td> <td></td> <td>10 24 12 3 3</td> <td>縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世</td> <td>65 41 46 72 44 77 53 64 53 64</td>	(総合情報処理センター) 津島岡大第12次調査(図書館) 津島岡大第13次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第18次調査(「市場の大第19次調査(「コラボレーション・センター) 津島岡大第19次調査(「コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (「エデ部エレベーター) 津島岡大第21次調査 (「東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第22次調査 (東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (集合研究棟) 津島岡大第25次調査 (東島岡大電路第27次調査 (割立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (割立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	55 12.5 13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33	24 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	1 0.5 10 11 1 1 2 4 0.5	20 4 3 60 1	2		10 24 12 3 3	縄文後期~近世 縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	65 41 46 72 44 77 53 64 53 64
() () () () <td>津島岡大第13次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第14次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査(環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (フラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (現境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (東境理工学部式ンブ槽) 津島岡大第21次調査 (東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第22次調査(総合研究棟) 津島岡大第23次調査(総合研究棟) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第26次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第56次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第56次調査 (東野部散水施設) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟)</td> <td>12.5 13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33</td> <td>12 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1</td> <td>0.5 10 11 1 2 4 0.5</td> <td>20 4 3 60 1</td> <td>2</td> <td></td> <td>1 24 12 3 3</td> <td>縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世</td> <td>41 46 72 44 77 53 64 53 64</td>	津島岡大第13次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第14次調査(福利厚生施設化) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査(環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (フラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (現境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (東境理工学部式ンブ槽) 津島岡大第21次調査 (東境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第22次調査(総合研究棟) 津島岡大第23次調査(総合研究棟) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第26次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第56次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第56次調査 (東野部散水施設) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟)	12.5 13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33	12 12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	0.5 10 11 1 2 4 0.5	20 4 3 60 1	2		1 24 12 3 3	縄文後期・古墳前期・中世 弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	41 46 72 44 77 53 64 53 64
の の の の の の 理 の 工環 の 文法経 の 事事 の 工機 の 事事 の 医病 の 医病 の 医病 の 政議認 の 本 の 教養 の 本 の <t< td=""><td>(福利厚生施設北) 津島岡大第14次調査 (福利厚生施設南) 津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (扇福利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部で舎 II 期) 津島岡大第20次調査 (東島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第21次調査 (工学部工レベーター) 津島岡大第22次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第26次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟)</td><td>13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33</td><td>12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1</td><td>10 11 1 2 4 0.5</td><td>3 60 1</td><td>2</td><td></td><td>24 12 3</td><td>弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世</td><td>46 72 44 77 53 64 53 64 77</td></t<>	(福利厚生施設北) 津島岡大第14次調査 (福利厚生施設南) 津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (扇福利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部で舎 II 期) 津島岡大第20次調査 (東島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第21次調査 (工学部工レベーター) 津島岡大第22次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第26次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟)	13 68 0.3 85 1 31 7 37 90.5 2.1 0.3 33	12 14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	10 11 1 2 4 0.5	3 60 1	2		24 12 3	弥生~古墳 縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	46 72 44 77 53 64 53 64 77
の の 農業 の 定 の 工環 の 文法経 の 事事 の 事事 の 財産 の 大自 の 事理 の 教養 の 工 の お養 の 工 の お養 の お養 <td>(福利厚生施設南) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (市局利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (島西大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査 (自然科学系総合研究棟)</td> <td>68 0.3 85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33</td> <td>14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1</td> <td>11 2 4 0.5</td> <td>3 60 1</td> <td>2</td> <td></td> <td>24 12 3</td> <td>縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世</td> <td>72 44 77 53 64 53 64 77</td>	(福利厚生施設南) 津島岡大第15次調査(サテライトベンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査(動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (市局利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第25次調査 (島西大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査 (自然科学系総合研究棟)	68 0.3 85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	14 0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	11 2 4 0.5	3 60 1	2		24 12 3	縄文後期~中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンベラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	72 44 77 53 64 53 64 77
農薬 の 環 の 理 の 工 の 文法経 の 事 の 工 の 事 の 上 の 医病 の 医病 の 医病 の 大自 の 水養 の 教養 の 工 の	ンチャービジネスラボラトリー) 津島岡大第16次調査 (動物実験棟) 津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎 I 期) 津島岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第21次調査 (工学部工レベーター) 津島岡大第22次調査 (総合研究権後日 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第26次調査 (総合研究権がり廊下) 津島岡大第26次調査 (総合研究権がり廊下) 津島岡大第26次調査 (第一日本の主) 津島岡大道跡第27次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	0.3 85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3	0.3 62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	11 2 4 0.5	3 60 1	2		3 3	早期遺物、アンペラ、堅果類 縄文後期・弥生~中世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	44 77 53 64 53 64 77
環 () 全 () 理 ()	津島岡大第17次調査 (環境理工学部を含 I 期) 津島岡大第18次調査 (南福利ポンプ槽) 津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部ポンプ槽) 津島岡大第22次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第26次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第26次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	85 1 31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	62 1 21 1 5 26 20 1 0.1	1 2 4 0.5	3 60 1	2		3	縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世	77 53 64 53 64 77
全	(環境理工学部校舎 I 期) 津鳥岡大第18次調査 (南福利ボンブ槽) 津鳥岡大第19次調査 (フラボレーション・センター) 津鳥岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津鳥岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津鳥岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 II 期) 津鳥岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津鳥岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津鳥岡大第25次調査 (農全部散水施設) 津鳥岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津鳥岡大遺跡第26次調査 (事房局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	1 31 7 37 90.5 2.1 0.3	1 21 1 5 26 20 1 0.1	1 2 4 0.5	3 60 1	2		3	縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文中期~近世 縄文後期~近世、古代堰部材、曲 げ物	53 64 53 64 77
理	(南福利ボンブ槽) 津鳥岡大第19次調査 (コラボレーション・センター) 津鳥岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津鳥岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎II期) 津島岡大第22次調査 (総合研究棟) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟) 津島岡大第25次調査 (参子部散水施) 津島岡大選跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	31 1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	21 1 5 26 20 1 0.1	2 4 0.5	3 60 1	2		3	縄文後期~近世 縄文後期~近世 縄文中期~近世 縄文後期~近世、古代堰部材、曲 げ物	64 53 64 77
環	(コラボレーション・センター) 津島岡大第20次調査 (環境理工学部ボンブ槽) 津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第26次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第26次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第27次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	1 7 37 90.5 2.1 0.3 33	1 5 26 20 1 0.1	2 4 0.5	3 60 1	2		3	縄文後期~近世 縄文中期~近世 縄文後期~近世、古代堰部材、曲 17物	53 64 77
工	(環境理工学部ポンプ槽) 津鳥岡大第21次調査 (工学部エレベーター) 津鳥岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大選跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第27次調査 (東島岡大遺跡第28次調査 (東島岡大遺跡第29次調査	7 37 90.5 2.1 0.3 33	5 26 20 1 0.1	4 0.5	60	2	1		縄文中期~近世 縄文後期~近世、古代堰部材、曲 17物	64 77
環 / 文法経 / 文法経 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	(工学部エレベーター) 津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎 II 期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第26次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第26次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	37 90.5 2.1 0.3 33	26 20 1 0.1	4 0.5	60	2	1		縄文後期~近世、古代堰部材、曲げ物	77
文法経	(環境理工学部校舎Ⅱ期) 津島岡大第23次調査 (総合研究棟) 津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調査 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調查 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調查 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調查 (自然科学系統合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調查	90.5 2.1 0.3 33	20 1 0.1	0.5	60	2	1		げ物	
文法経 " 農 " 事 " 工 " 農 " 工 " 固 " 医病 確認 学生 " 大自 " 事 " 数養 " 工 "	津島岡大第24次調查 (総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調查 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調查 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調查 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調查 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調查	2.1 0.3 33	0.1		1	2		8	縄文後期~近世、杭(縄文)、石棒	00
 農 の 事 の 工 の 農 の 回 の 医病 確認 学生 の 大自 の 事理 の 教養 の 工 の 	(総合研究棟渡り廊下) 津島岡大第25次調查 (農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調查 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調查 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調查 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調查	0.3	0.1	0.1					2 1 2 2 2 3 3 3 3 4 7 1 H IT	80
事	(農学部散水施設) 津島岡大遺跡第26次調查 (事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調查 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調查 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調查	33			0.2				縄文後期~近世、杭 (縄文)	80
事	(事務局本部棟) 津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	-	17						中·近世	61
工	(創立五十周年記念館) 津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査	15	I		5		1	10	縄文後期~近世	76
農	(自然科学系総合研究棟) 津島岡大遺跡第29次調査		14	1					縄文中期~近世	68
「		17	15	2					縄文後期~近世	71
国	(農学部共同溝)	2.1	2	0.1					縄文後期~近世	71
 医病 (確認) 学生 (クリカラ) 大自 (クリカラ) 事 (クリカラ) 教養 (クリカラ) エ (クリカラ) 	津島岡大遺跡第30次調査 (インキュベーション施設)	37.2	15	0.1	18			4.1	縄文後期~近世	本紀要
医病 試媚 確認 学生 , 大自 , 事 , 理 , 教養 ,	福呂遺跡第1次調査 (実験研究棟)	9	8					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
確認 学生	福呂遺跡第2次調査 (実験研究棟スロープ)	2.1	2				0.1		中世~近世	55
大自 // 事 // 理 // 教養 // 工 //	鹿田 (駐車場)	1	1						弥生~中世	5
事	津島北(男子学生寮)	1	0.7	0.3					縄文後期~弥生前期	"
理 / 教養 / 工 /	津島北(自然科学研究科棟)	1	1						縄文後期~弥生前期 縄文~中世	6
教養 〃 工 〃	津島土生(外国人宿舎) 津島北(身障者用エレベーター)	0.3	0.3						中・近世	8
工 "	津島南(0.7	0.7						縄文・中世	"
mitte .	津島北 (校舎)	1	1						縄文~近世	11
農薬 〃	津島南 (動物・遺伝子実験施設)	0.7	0.7						縄文~弥生、中・近世	"
事 〃	津島南(国際交流会館)	0.3	0.3						中世	"
大自 /	津島北(合併処理槽)	0.2	0.2					0.0	中・近世	14
学生 /	津島南(学生合宿所)	0.4	0.2					0.2	中世 縄立	"
教育 〃	津島北(身障者用エレベーター) 津島北(図書館)	0.3	0.3	-					縄文 古墳~中世	"
学生 〃	津島南(学生合宿所ポンプ槽)	0.6	0.6	 					縄文~中世	18
資生 〃	倉敷 (資源生物科学研究所)	0.1	0.1						近世	"
7 "	鹿田 (アイソトープ総合センター)	1	1						中世~近世	"
事 〃	津島北 (福利厚生施設)	0.5	0.5						弥生?~中世	"
農〃	津島南(動物実験施設)	0.1	0.1						縄文?~近世	33
環 / 工 /	津島北 (環境理工Ⅱ期) 津島北 (システム工学科棟)	0.1	0.1						_	53 53
教育 〃	東山(附属小学校校舎)	1.1	0.1					1		87
全立会	•	2	2	<u> </u>				1	分銅形土製品	1
" "	83年度	1	1						-	2
" "	83年度 84年度	1	1						-	3
" "	+		0.5						-	6
" "	84年度 85年度 86年度	0.5	0.5						_	8
全 立会	84年度 85年度		0.5						-	14

所属	種類	調査名・地区名		Á	新数(]	箱:約30	リットル)		備考	文献
別個	俚炽	調重石・地区石	総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*	(主要時期・特殊遺物)	又瞅
全	立会	93年度~99年度	0.8	0.8						_	30·33· 38·44· 50·53· 56
"	"	00年度	3	3						-	61
"	"	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
"	"	03年度	2	2						_	74
"	"	04年度	1	1						_	81
"	"	05年度	1.1	0.1					1		83
"	"	06年度	1.1	0.1					1		87
"	"	07年度	0.5	0.5							本紀要
	総	箱 数	3058.4	2133.1	99.7	469.2	25	18.1	313.3		

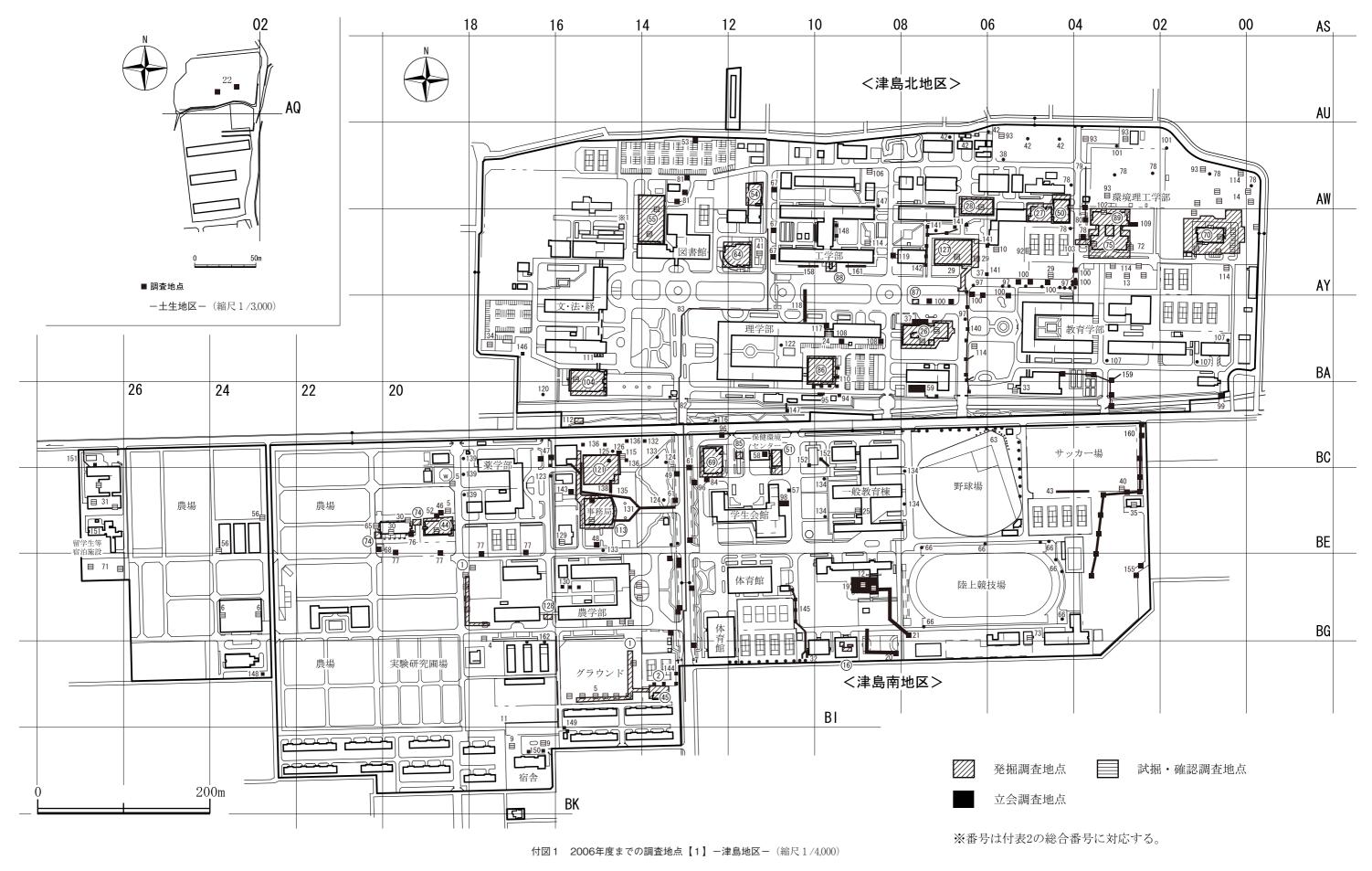
付表 4 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1 1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2 1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
1	│岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報	1986年3月
4	告 第2冊	1960年 3 月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4 1986年度	1987年10月

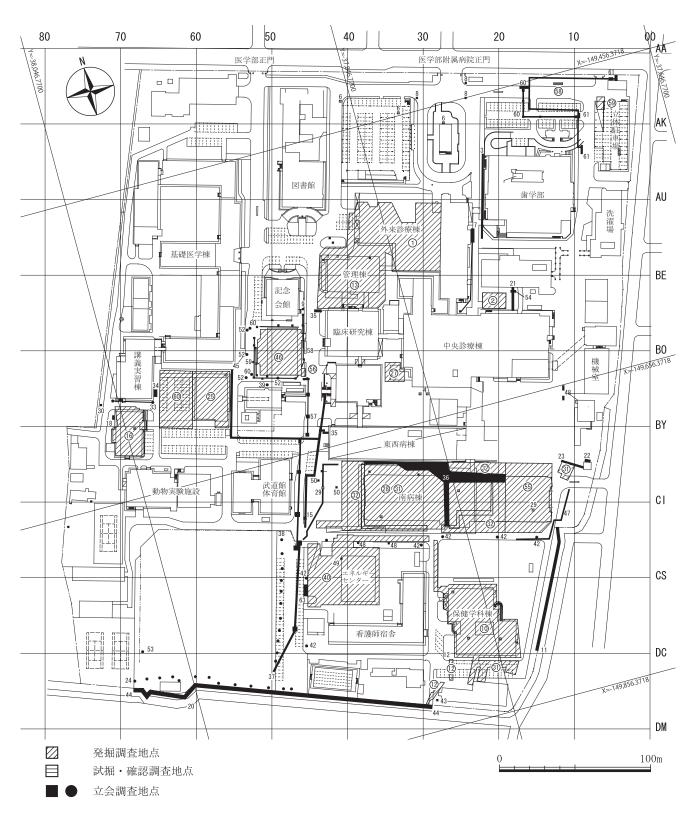
付表 5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2008年3月末まで)

番号		発行年月日
7	鹿田遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5 1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6 1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報 8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報 9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山人学構内遺跡調査研究年報 11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡 5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡 7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月

番号		発行年月日
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡 9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡 I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号 2005	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84 of	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号 東口書味 5 岡山大学様内書味登板調本報生 第22回	2007年3月
85	鹿田遺跡 5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊	2007年3月
86	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第24冊	2008年3月
87	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月



 $-85 \sim 86 -$



※番号は付表2の総合番号に対応する。

付図2 2006年度までの調査地点【2】 - 鹿田地区 - (縮尺 1/2,500)

